
流星のロックマン ～それが僕の選んだ道だから～

ウージの使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロッキマン ～それが僕の選んだ道だから～

【Nコード】

N4627M

【作者名】

ウージの使い

【あらすじ】

メテオGの脅威が去って3か月。

平和な生活を楽しむ星河スバルと仲間たち。

しかし、彼らの前に新たな敵が立ちふさがる！！
彼らは戦う。

己の信じた道のために。

ロッキマンたちは、再び世界を救えるのか！？

キャラクター紹介（第50話現在）（前書き）

今のところオリジナルキャラクターのみで、
抜けているキャラもいます。

できるだけ早く書きます

キャラクター紹介（第50話現在）

ささなみ
漣セイヤ

ウィザードはデステイル。一人称は「俺」

背は大吾よりは低いがスバルよりは断然高い。

黒い髪は短いというよりは少し長く前髪ははねている。

白いシャツに黒いズボンと、学校の制服を着ていることが多い。

ベイサイドハイスクールにかよう高校生で、学校では部活でトランプットをしている。

家の事情により星河家に居候することになり、スバルには「兄さん」と呼ばれている。

かつて麗音に告白し、振られたことがある。

しかし麗音の本当の気持ちには気づいておらず、スバルと同じく鈍感。

バトルセンスは高い。

デステイル

セイヤのウィザード。一人称は「俺」

黒いマントで体を包んでおり、マントからは

幽霊のような下半身と腕が出ており、それらは白い電波で構成されている。

マントと同じく黒いフードの中にも髑髏上の白い電波の顔があり

そこでは赤い目が二つ光っている、死神のような姿の電波体。

性格は見た目に反して明るい。

音楽好きで、空気の振動が見えるので音程がはっきりとわかるため、セイヤのトランプットを指導している。

自分の姿を大がまに変えることができ、セイヤは電波変換しなくても戦うことが出来る。

久住 美影

ウィザードはスラーとマダラ。一人称は”私”

アキンドシティからスバルの学校に転校してきた女の子
短い黒髪にカチューシャをしており車椅子で生活している。
身長は低い。

普段は物静かな性格であるが、起こると早口の関西弁へと変貌する。
天才的なプログラミング技術を持ち、その実力は自分で自立型ウィザードを一から自分の好きなように作り上げられるほど。
また、既存のプログラムをほかの電波体に入力することもでき、デスタイルなどはそのおかげで少しパワーアップしている。
特技は高速のタイピング。

スラー

美影のウィザード。一人称は”私”

頭に生えた一本の羽は虹色に光っており、顔は水色。

体を覆うようにしている大きな翼も顔と同じようなきれいな水色をしており、オレンジ色のラインが通っている。

尾羽に当たる部分からは通常のウィザードと同じように水色の電波が四角の形をして出てきている

オペレーター的美影と同じく物静かで礼儀正しい。

その力はウォーロックに何かを感じさせるほど、相当なものだが、美影のプログラミングによりその力を制限しており基本的に本気では戦わない。

(実はデスティルやマリアらと同郷。PCプログラムにより電波の体を人工のワイザードのようにしている。)

マダラ

美影がプログラムした人工ワイザード。一人称は”マダラ”
語尾に”です”をつけてしゃべることが多い。

赤茶色の体で、一本ある尻尾の先は白くなっている。

瞳は黒で、4本の足先からは水色の電波が炎のように揺らめいている。

自分の姿を変える能力を持ち、人間の姿になると電波を抑え、よほど感知能力が鋭い電波体でない限りほかの電波体をも欺くことができる。

ただし、自分の体が電波であるという事実は変えようがないため、ビジライザーをかけても姿が見える。

美影が後に改良し、人間の姿になるとリアルウェーブの応用で実際に物に触れたりすることができるようになっていく。

どんな人間にもなれるが、人間としてのマダラの姿は茶色の髪の毛をしており、先がくりんとカールしている女の子。

目は大きくぱつちりと開いており、瞳の色は黒。

黄色い服に白いミニスカートをはいていた。背はスバルと変わらな
いか少し低いのである。

無邪気な正確だが泣き虫で、ウォーロックを怖がっている。
戦闘用の姿もあるが、まだ未登場。

リー・シャンロン

2メートルを軽く超えるような大きく筋肉もついた体を黒い中国服にまとった男。でも年齢は18歳。

その頭はスキンヘッドで、目には力強い光が宿っている。
怒って暴走した美影を収めることができる唯一の人物。
熱い料理は熱いうちに、冷たい料理は冷たいうちに食べることがモ
ットー。

ウィザードは不明。

サラ・マルダー

ウィザードはマリア。一人称は“私”
年齢や身長は麗音と同じくらいで、顔はきれいに整っている。
しかし服装は帽子にジーンズという男の子のような服装をした金髪
の少女。

性格は結構気が強く、よくセイヤを叱っている。
シドウに対しても何の遠慮もなく罵倒できる数少ない人物。
実は過去に相当の肩書きを持っている天才。しかし、現在はそれを
捨てており自身もそのことを疎ましく思っている。
料理が大の苦手で、こっそりと練習している。
頭が良かったため、たまにセイヤに勉強を教えている。

マリア

サラのウィザード。一人称は“私”
白に赤が混じったような色の電波の体をもつが、体の部分を
白いワンピースのような装甲で覆っており、手の部分も白い手袋の
ようである。

頭の部分には天使の輪のようなものが光りながら浮かんでおり、ポ
ニテールのように

頭から背中の中ぐらいいにかけ電波が流れている。

アシッドのことを気に入っている。
風を起こすことで、風の反響から電波体が周りに何体、そしてどのあたりにいるかがわかる。
サラと違い丁寧な口調で、性格もいいため周りからの信頼は厚い。
言われた仕事はテキパキと片付ける有能な面もある。

ジャン・J・ジョーカー

ウィザードはギール。一人称は”オレ”

黒いコートを着た少年。

ある過去から、路地裏で孤独で貧しい生活を送り自らを守るため護身術を実践を通して培っており、その実力は高い。

しかし「むちゃくちゃ」であるためシャンロンやニックにはかなわなかった。

自らを「いい人間ではない」と考えており、基本的に一人を好む。
しかし、路地裏でのたれ死になりそうだったところを興味を持ったニックに拾われ、勉強などさまざまなことを学び
チームの人間とは仲良くやっている。

ニック

本名不明、ウィザード不明、一人称不明。

セイヤ達のチームのトップ。

チームのメンバーいわく、意味不明。

キャラクター紹介（第69話現在）（前書き）

（第50話現在）とかぶる内容もありますが、結構話が進んだのである程度は分けています。

一部ネタバレを含むので「揺」まで読み終わった方の使用をお勧めします。

オリキャラが多いので、ぜひ参考にしてください。

なお、ここにはないオリキャラ（アロンとか）は申し訳ありませんが追加されるまでお待ちください……

キャラクター紹介 (第69話現在)

〃〃神議会〃〃

ささなみ
漣セイヤ

ウィザードはデステイル。一人称は”俺”

チーム「神議会」のメンバー。

背は大吾よりは低いがスバルよりは断然高い。

黒い髪は短いというよりは少し長く前髪ははねている。

白いシャツに黒いズボンと、学校の制服を着ていることが多い。

ベイサイドハイスクールにかよう高校生で、学校では部活でトランプットをしている。

家の事情により星河家に居候することになり、スバルには「兄さん」と呼ばれている。

かつて麗音に告白し、振られたことがある。

しかし麗音の本当の気持ちには気づいておらず、スバルと同じく鈍感。

バトルセンスは高い。

デステイル

セイヤのウィザード。一人称は“俺”

“死神”の異名を持つテンカイの電波体。

黒いマントで体を包んでおり、マントからは

幽霊のような下半身と腕が出ており、それらは白い電波で構成され

ている。

マントと同じく黒いフードの中にも髑髏上の白い電波の顔があり
そこでは赤い目が二つ光っている、死神のような姿の電波体。

性格は見た目に反して明るい。

音楽好きで、空気の振動が見えるので音程がはっきりとわかるため、
セイヤのトランペットを指導している。

自分の姿を大がまに変えることができ、セイヤは電波変換しなくても
戦うことが出来る。

久住 美影

ウィザードはスラーとマダラ。一人称は”私”

チーム「神議会」のメンバー。

アキンドシティからスバルの学校に転校してきた女の子

短い黒髪にカチューシャをしており車椅子で生活している。

身長は低い。

普段は物静かな性格であるが、怒ると早口の関西弁へと変貌する。

天才的なプログラミング技術を持ち、その実力は自分で自立型ウィ
ザードを一から自分の好きなように作り上げられるほど。

また、既存のプログラムをほかの電波体に入力することもでき、デ
スタイルなどはそのおかげで少しパワーアップしている。

特技は高速のタイピング。

意外と料理が上手で、特に包丁さばきの腕はプロにも劣らない。

スラー

美影のウィザード。一人称は”私”

頭に生えた一本の羽は虹色に光っており、顔は水色。

体を覆うようにしている大きな翼も顔と同じようなきれいな水色を

しており、オレンジ色のラインが通っている。

尾羽に当たる部分からは通常のウィザードと同じように水色の電波が四角の形をして出てきている

オペレーター的美影と同じく物静かで礼儀正しい。

その力はウォーロックに何かを感じさせるほど、相当なものだが、美影のプログラミングによりその力を制限しており基本的に本気では戦わない。

(実はデスティルやマリアらと同郷。PCプログラムにより電波の体を人工のウィザードのようにしている。)

マダラ

美影がプログラムした人工ウィザード。一人称は”マダラ”

語尾に”です”をつけてしゃべることが多い。

赤茶色の体で、一本ある尻尾の先は白くなっている。

瞳は黒で、4本の足先からは水色の電波が炎のように揺らめいている。

自分の姿を変える能力を持ち、人間の姿になると電波を抑え、よほど感知能力が鋭い電波体でない限りほかの電波体をも欺くことができる。

ただし、自分の体が電波であるという事実を変えようがないため、ビジライザーをかけても姿が見える。

美影が後に改良し、人間の姿になるとリアルウェーブの応用で実際に物に触れたりすることができるようになっている。

どんな人間にもなれるが、人間としてのマダラの姿は茶色の髪の毛をしており、先がくりんとカールしている女の子。

目は大きくぱつちりと開いており、瞳の色は黒。

黄色い服に白いミニスカートをはいていた。背はスバルと変わらな
いか少し低いのである。

無邪気な正確だが泣き虫で、ウォーロックを怖がっている。

戦闘用の姿はマダラ・バーニング。
変身する際は全身が青い炎に包まれ、9本の長く黄色い尻尾が生えてくる。

尻尾の先には水色の炎が燃えている。

全身も黄色い毛並みをした大きな狐の姿をしており、足も尻尾と同じようにその先で

水色の炎が揺らめいている。

ウィルス相手なら簡単に青い炎で一蹴するほどの実力。

リー・シャンロン

チーム「神議会」のメンバー。

2メートルを軽く超えるような大きく筋肉もついた体を黒い中国服にまとった男。でも年齢は18歳。

その頭はスキンヘッドで、目には力強い光が宿っている。

怒って暴走した美影を収めることができる唯一の人物。

熱い料理は熱いうちに、冷たい料理は冷たいうちに食べることがモットー。

ウィザードは不明。

サラ・マルダー

ウィザードはマリア。一人称は“私”

チーム「神議会」のメンバー。

年齢や身長は麗音と同じくらいで、顔はきれいに整っている。

しかし服装は帽子にジーンズという男の子のような服装をした金髪

の少女。

性格は結構気が強く、よくセイヤを叱っている。

シドウに対しても何の遠慮もなく罵倒できる数少ない人物。

実は過去に”元サテラポリスアメロツパ支部副支部長”という肩書きを持っている天才。

しかし、現在はそれを捨てており自身もそのことを疎ましく思っている。

料理が大の苦手で、こっそりと練習している。

頭がいいため、たまにセイヤに勉強を教えている。

マリア

サラのウィザード。一人称は“私”

“女神”の異名を持つテンカイの電波体。

白に赤が混じったような色の電波の体をもつが、体の部分を

白いワンピースのような装甲で覆っており、手の部分も白い手袋のようである。

頭の部分には天使の輪のようなものが光りながら浮かんでおり、ポニーテールのように

頭から背中の中ぐらいいんかけ電波が流れている。

アシッドのことを気に入っている。

風を起こすことで、風の反響から電波体が周りに何体、そしてどのあたりにいるかがわかる。

サラと違い丁寧な口調で、性格もいいため周りからの信頼は厚い。言われた仕事はテキパキと片付ける有能な面もある。

ジャン・J・ジョーカー

ウィザードはギール。一人称は”オレ”

チーム「神議会」のメンバー。
黒いコートを着た少年。

ある過去から、路地裏で孤独で貧しい生活を送り自らを守るため護身術を実践を通して培っており、その実力は高い。

しかし「むちゃくちゃ」であるためシャンロンやニツクにはかなわなかった。

自らを「いい人間ではない」と考えており、基本的に一人を好む。

しかし、路地裏でのたれ死になりそうだったところを興味を持ったニツクに拾われ、勉強などさまざまなことを学び

チームの人間とは仲良くやっている。

ギール

ジャンのウィザード。一人称は”わい”

”雷神”の異名を持つテンカイの電波体。

銀でできたようなリングに4つ、等間隔に黄色い電波が固まって球体のようになりくっついている。

その4つの電波のうち一つに赤い目、口がニタニタした表情を浮かべている。

顔の部分は他の電波に移ることが出来る。

基本的に軽い口調で、語尾をだらしなく伸ばすこともある。関西弁が少しだけ口調に出る。

演出のために、電波変換の際は必ず雷を落とす。

ニツク

ウィザードはオルグ。一人称は”僕”

セイヤ達のチーム「神議会」のトップ。

ドクターのもとで行動する「王国」のメンバーの一人。

クロウ

巖のウイザード。一人称は無し。

“ 獣王 ” の異名を持つテンカイの電波体。

茶色の電波の体をもつクロウはウォーロックに少し似ている。

大きく違うところは装甲が深紅であること、そして大きな牙が生えていることだ。

「ガルルル……」など、獣のように唸るだけでしゃべることはできない。

しかし、巖と意思を疎通することはできるようである。

フォース

緑の電波の体をもつが、肩の装甲以外これといったものは付いていない。

姿もこれといった形はなく、球が少し細くなったような姿をしている。

やることはとつとと済ませたい主義で、能力は高い。

体が変化し、腕のような形の電波が伸びる。その電波の先が大きくして、口のように大きく開き

電波体を取り込むことが出来る。

体内で回復させて出すこともできるが、その能力は体内にちゃんと取り込んでから出す。

取り込んだ能力は自らの体を変化させることで一部使用することが出来る。

ドクターのもとで行動する「王国」のメンバーの一人。

”暴王”ゲインと鮫崎タイガが融合した姿であるので、事実上すでに電波変換したようなものである。

「フォース・シャーク」や「フォース・レックス」など、複数の戦闘用の姿を持つ。

さめざき
鮫崎

タイガ

フォースの本当の姿。

はねたくせのある青い髪に、少し日焼けしたからだ。

ジャケットを着ておりよく見るとそれはサテラポリスの制服のエンブレムなどを一部引きちぎったものである。

かつてはシドウの親友であり共に活動したサテラポリスだった。

かつてサテラポリスで起こったある事件により、タイガはその事実を知るため立ち入り禁止の施設に入り込んだが

見つかつて連行され、Project - TCの、電波変換人間実験の実験台にされた。

それ以来生身の人間ではなく電波体となってしまった。

妹がいたが、事件の時から安否は不明。

Project - TC、およびそれから生まれたアシッドを激しく憎んでいる。

“実験”のことをシドウは知っていながら隠していたと考えており、もはやシドウのことを完全に敵視している。

レルド・グラディエ

ウィザードはガンツ。一人称は“ワシ”（公式の場では“私”）

スーツ姿で襟にはD国のシンボルである剣をかたどった国旗のバッジをつけており、

髪は所々にウエーブがかかる白髪でひげを伸ばしている。
グファツファという特殊な笑い方をする老人。

威厳のある凜とした声で話すが、その本性は傲慢な男。
実は元軍人で、剣術は相当の腕前。そういう意味では、ガンツに最も合ったオペレーターといえる。

ドクターのもとで行動する「王国」のメンバーの一人。

ガンツ

グラディエのウィザード。一人称は無い。

“霸王”の異名を持つテンカイの電波体。

剣の形をしており、刀身の部分はオレンジの電波で剣の柄とつばが交わる部分に

赤い目が光る電波体。

無口で、全くしゃべらない。よって意思の疎通は目で判断するしかない。

西園寺さいおんじ ユリ

ウィザードはカルム。一人称は“私”

ストレートの黒髪で瞳は大きく、背は高い方ではない。

意志の強そうな唇が肌の白さをより際立たせている。

我がままで意志の強い、西園寺グループ総裁の令嬢。ようするにお嬢様。

執事である筑紫を困らせることもしばしばである。

年はスバルと同じなのだが、スバルどころかルナよりも断然頭はよく、ひそかに誇りに思っている。

相手と戦う前に資料を集めたりなど、几帳面なところもある。

ドクターのもとで行動する「王国」のメンバーの一人。

カルム

ユリのウィザード。

“魔王”の異名を持つテンカイの電波体。

赤い電波の体をした電波体で、目つきが鋭い。

黒マントのようなものを肩からさげており、十本の指にそれぞれ灰色の指輪をはめている。

同じような輪が腰にも斜めについている。

「引力」を操る能力を持ち、その応用で重力をも操る。

〵〵協力者〵〵

かなで
奏 麗音

ウィザードはナイト。一人称は”私”

髪が長い美人で、高校生ながらも人気の高い歌手である。

その歌声は澄み切っていて聴く者の心も響くと評判。

そして、ミソラの先輩でありミソラが目標としている人の一人でもある。

ミソラからはかなりなつかれており、また麗音自身ミソラのことを気にいっているため

二人でよく話もするしメールのやり取りはもちろん、二人でどこかへ出かけることもある。

かつてセイヤから告白された際、断っているが本心はそうではなかった。
しかし本心をなかなか言い出せず、またセイヤにも気付いてもらえないちよつとかわいそうな人。
ある事件をきっかけに、今回の出来事に巻き込まれていく。
料理が苦手で、中学生の頃の調理実習で黒焦げのパスタを作ったことがある。

ナイト

麗音のウィザード。

紺色の電波に胸、肩には鎧が付いている。

頭の兜からは口元は見えないが目だけが光っているのが見える。

もともとはクロウに従い、学園祭の事件で麗音にとりついたテンカイの電波体だが

現在のナイトは残留電波を元に再構築された存在である。

そのせいか若干性格が変わっており、騎士道精神を身につけた。麗音のことを「レディー」と呼ぶ。

道野 みちの
先雄 さきお

WAXAの科学者。元はシドウと同じくディーラーに所属しており、ディーラーにいた頃はクリムゾンについて研究していた。

「WAXA」と書かれたジャケットの上に薄くて青いマフラーを巻きその顔には黒ぶちの眼鏡。首からは自分の写真がついたWAXA内でのパスをぶら下げている。

ディーラーを抜けたあと、シドウの紹介でWAXAに就職。

ノイズの可能性を信じ、現在はノイズについて研究している。ノイ

ズに関してはかなりプロフェッショナル。

プロローグ

「……さて。いよいよだ。」

とある飛行船の中、彼はつぶやいた

『グルル・・ガルウ』

「ククツ、興奮するなよ」

彼の周りには数名の影が。

「別に良いではないか。もうすぐ始まるのだらう？」

ワシらにとつて、これがどれだけ面白いことかわかるだらうが。」

『……』
「やれやれ、キサマはまた黙っておるのか。つまらん。」

「まーいーじゃーん。今日はもーこれくらいでいーんじゃなーい？」

『フフ・・そう言ってる割には顔が楽しそうですが？』

「よけーなこと言っな」

さまざまな考えを持って集まった者たち。

しかしその眼には皆光が宿っている。

「では、いざ……我らが真の王となるために。」

……歓喜という名の光を輝かせて

彼は手を挙げ宣言した。

そしてゆっくりと飛行船は降りて行った・・・

プロローグ（後書き）

はじめまして

ウージの使いと申します

なれないところもありつたない文章ですが
読んでいただけると幸いです。

第1話 日常

「ふわーっ、疲れた……。」

『おいおいスバル、学校終わったくらいで何言っつてやがる。』

「ロックはいいよね、ハンターV.Gの中でのんびりするだけでいいんだから。」

コダマタウン。

のどかな町であるこのコダマタウンの小学校で、一人の少年が自分のウィザードとしゃべっていた。

『何言っつてやがる。暇そうに見えるかは知らんがな、オレだっつて

お前のメール整理したりいろいろ忙しいんだぞ？』

「ふーん……。」

『ふーんじゃねえ！！ったく、すっかり平和ボケしやがって……。』

そう、星河スバルとウォーロックである。

彼らは電波変換することでロックマンとなり、これまでに三回世界を救ってきた。

F.M星人の事件、ムー大陸の事件、メテオGの事件……。だがこの事件を通して得たものは大きい。

「ちょっとスバル君！！」

「は、ハイ！！」

突然の大声にドキツとするスバル。

そこに近づいてきたのはスバルの大事な友達であるルナ、キザマロ、ゴン太だ。

また明日ね、スバル君。」

そう言つて3人が教室から出ると、大汗をかいたスバルは息をついた。

「あー、怖かつた・・・」

『くくつ、面白かつたぜスバル。キザマロナイスだつたな。』

「・・・」

安全になつたとたんひよっこりハンターから出てきたウォーロックに、

スバルは激しい怒りを感じた。

『？ どうしたスバル？』

「・・・いや、別に。」

第1話 日常（後書き）

・ここまで書くのにちよっとかかりました
できる限り更新していきたいですが
どうも自信ないです・・・

感想待っています

第2話 新たな同居人

「ただいまー」

『帰ったぜ』

「あら、おかえりなさい。」

迎えたのはスバルの母、あかねだ。

「あれ、父さんは？」

「まだ帰ってないわ。・・・うふふ。」

そうやってあかねは夕飯の準備に戻った
スバルとウォーロックも自分の部屋に向かう。

『おい、ライザー刑事気付いたか？』

「また刑事ドラマの・・・何、ロック警部？」

ウォーロックは刑事ドラマにはまっているが

「先輩と後輩」の話から「ライザー刑事」には自分を

「ロック警部」と（強制的に）呼ばせている。

『オフクロ、さつきすごくうれしそうじゃなかったか？』

「そう言われたらそうだね・・・なんでだろ？」

その時、玄関から声がした

「ただいまー、今帰ったぞ。」

「お帰り、大吾さん。・・・」

あかねが何か話しているようだが、部屋にいたスバルたちには聞こえなかった。

『行ってみようぜ』

「うん」

そしてスバルたちが玄関に行くと、そこにはスバルの父、大吾と一人の少年がいた。

背は大吾よりは低いがスバルよりは断然高い。

黒い髪は短いというよりは少し長く前髪ははねていた。

白いシャツに黒いズボンと、学校の制服を着ていた。

「・・・あれ？」

「おう、スバル、ただいま。」

「おかえり。その人は・・・？」

驚いているスバルに、あかねが言った。

「あのね、今日からしばらくうちに同居する子よ。」

「よろしくね、スバル君。」

その少年はにっこりと笑って言った。

そして、少し普段より早い夕食を4人で食べながら少年は自己紹介をした。

「漣^{なみのり} セイヤといます。」

このたび、星河さんにお世話になることになりました。よろしくおねがいします。」

「なるほど、だから早く帰って来いって言ったんだね。」

「ああ、そうだ。セイヤとスバルを早く会わせたくてな。」

その日の夕食はおもにセイヤが話したり質問されたりとかなりにぎやかになった。

「でも、なんでここに来ることになったの？」

「セイヤの父親は俺と同期でな、仲が良かったんだ。だけど夫婦そろって

しばらく仕事で海外へ行くことになったんだ。」

「なので、僕が日本に残ると言った時、父さんは星河さんのところで過ごすよう言ったんだ。・・本当にありがとうございます、星河さん。」

「いいって。それより、これでスバルには兄弟ができたな。」

「え？」

「スバル君が・・・弟・・・」

そしてセイヤとスバルは笑顔で向き合った。

「よろしく、スバル」

「よろしく、兄さん。」

第2話 新たな同居人（後書き）

とりあえず、新キャラ登場です

オリジナルのくせに、スバルの兄さんとなってしまうました。

少ししたら、彼女にも出てきてもらおうと思っています。

第3話 セイヤの思惑

「うう・・・もう食べられない。」
『自業自得だな。あのアニキのように早めにやめときゃよかったのにな。』

夕食はスバルの好物であるハンバーグ盛りだくさんであった。
なのでセイヤはやや多めに食べた後食事を終えたが、スバルはさらに口に運んで
食べまくった。

その結果がこのありさま・・・食べすぎで苦しむヒーローであった。

「うう・・・兄さんが正しかった・・・」

本当は「もうやめたら？」とセイヤに言われていたのである。
それでもまだ食べると言ったためセイヤはすでに部屋に入っていた。
ところがセイヤのいる部屋に着くと、中からセイヤの声がした。
どうやら電話しているようだ。

「邪魔しちゃ悪いし・・・ってうわ！ロック!？」

『アニキを知るいいチャンスだぜ！聞いちまえ!』

「・・・うん」

意外とすんなり受け入れた。

そしてスバルは中が見えるよう少しドアを開けた・・・

・・・は大丈夫？

「ああ。星河さんも奥さんもいい人だ。

ああ、そうだ。俺、弟ができたんだぜ。」

セイヤはドアに背を向けていたため、ポップアップの電話の相手が見えた。

(金髪・・・髪が長いし、女の人かな?)

(彼女だつたりしてな!)

嬉しそうね・・・のくせに

「な!? 誰がチビだ! お前よりは身長あるんだぞ!」

(うわー、気にしてるんだ・・・)

(気をつけるよスバル・・・)

「やっぱ弟はいいな。かわいいぜ。」

(よかつたなスバル。かわいだってよ。)

(う・・・ん・・・)

ちなみに何て・・・なのかしら。

「スバルだよ。・・・あの、ね。」

・・・ツクマンね

((!!??))

(い・・・今、ロックマンって言ったよね!?)

(ああ、たぶんな・・・だが、大吾のヤロウが地球のやつらに通信で話したから、

知っててもおかしくは・・・)

実・・・は・・・れくら・・・だった?

「いや、まだ見てない。今日中には見たいな。」

スバル・・・いや、ロックマンの実力を。」

それじゃ、私は・・・で。

「ああ、じゃあな、サラ。」

ピッ・・・

「さて、おいでよスバル。」

「！？ 気づいてたの？」

「そりゃ、ドアを開ける音がしたしなあ。」

スバルをセイヤがからかっていると、我慢できなくなったのか

『おいセイヤ！ ロックマンの実力を見るってどういうことだ！』

「ちよつと、落ち着きなつてロック！」

スバルはハンターからでてきたウォーロックをなだめようとするがウォーロックは止まらない。

『目的はなんだ！表に出るお！』

「だからロック、落ち着けて・・・」

「いいよ。」

ウォーロックの挑発にセイヤはあっさり答えた。

「え？」

驚くスバルに、セイヤは笑いながら答える。

「いや、さっき聞いた通り俺は君たちの力が知りたいんだ。だから・・・」

そしてセイヤはハンターを前にかざして叫んだ。

「ウィザード・オン！」

でてきたのは、セイヤのウィザードである死神のような電波体。黒いマントで体を包んでおり、マントからは幽霊のような下半身と腕が出ており、それらは白い電波だった。マントと同じく黒いフードの中にも髑髏上の白い電波の顔がありそこでは赤い目が二つ光っていた。

「俺のウィザード、デステイルだ。」

「兄さん・・・どういうこと？」

スバルの問いに、セイヤは笑顔で答えた。

「俺達もお前達と一緒に電波変換できるんだ。」

第3話 セイヤの思惑（後書き）

タイトルがいいの思いつきませんでした。
そろそろ初のバトルシーンです。

正直、自信が今一つです。

第4話 トランスコード027

自らのウィザード、デスティルを見せたセイヤに対し
スバルは驚きで固まっていた。

「電波変換ってことは・・・FM星人!？」

『いや、あんなやつみたことねえぞ・・・
なにより、周波数も違うぜ。』

びっくりしている二人にセイヤは続ける

「さあ、電波変換して君の実力を見せてくれ。

俺もちゃんとするからさ、電波変換。」

『ずいぶん楽しそうだな、セイヤ・・・』

デスティルが初めて口を開いた。

その口調は見た目より軽く、明るい性格をつかがわせる。

「まーね」

「・・・ほんとに、戦うの?」

スバルは渋っていた。

もともとやさしい性格のうえ、初めてであった相手だし何より兄な
のだ。

そんな心情を察したのか、

「そう暗い顔すんなよ。殺しあい、ってレベルじゃないぞ。

まあ、手合わせみたいなの?」

「・・・わかったよ。」

さすがに家で戦うわけにはいかないもので、二人は家を出て
ウェーブステーションに向かった。

「トランスコード！ シューティングスターロックマン！！」

「電波変換！！漣セイヤ、オン・エア！！」

ウェーブロードに上がったロックマンだが、セイヤは人間の姿のまま
ま訝な顔をしていた。

「あれ、なんで電波変換できないんだ？」

「セイヤ、サテラポリスからなんか来てるぜ。」

トランスコード027 デスティル・ボーン

『どうやらサテラポリスに登録されたみたいだな。』

「なるほど、では気を取り直して。」

トランスコード027、デスティル・ボーン！！」

電波変換したとたん、一気にロックマンの前に現れた。

『おい、まじかよー！』

「早っ……」

デスティル・ボーンはロックマンの前に降り立った。

デスティルと同じく黒いフードをつけているが、

マントは前が開いておりむしる長い黒のコートのようになっている。

体は黒いボディースーツで、胴体には肋骨を思わせるものがついて
いる。

フードからのぞく顔はドクロ、そして手も骨のようになっておりまさに死神のような姿だった。

「どう？この姿。名前はデスティル・ボーンって言うんだ。俺とデスティルで考えたんだぜ？」

デスティル・ボーンが手を前に出すと、そこに大きな鎌が現れた。

「んじゃ・・・やろうか。」

『来るぞ、スバル！！』

ウォーロックが叫ぶのにこたえ、ロックマンは構えた。

「ウェーブ・バトル・・・ライド・オン！！」

第4話 トランスコード027（後書き）

いよいよバトルです！！

それにしても、電波人間27人って
どれくらいなんですかね・・・

第5話 兄弟げんか？（前書き）

とうとうバトルです・・・

バトルカード、あんま使えていません・・・

第5話 兄弟げんか？

デスティル・ボーンは鎌を操りロックマンに斬りかかる。それをよけるとロックマンも構えた。

「バトルカード！ワイドウェーブ！」

「甘い！」

ロックマンの放ったワイドウェーブをデスティル・ボーンはあっさりよけると

鎌を振った。

「こつちも行くぜ？カブリッチョ狂想曲！！！」

するとデスティル・ボーンが振った鎌からいくつもの斬撃が飛んできた。

「くっ……受けきれない！」

ロックマンはシールドを出すが一つにあたりよろめいた。

「そらそら、まだいくぞ……」

「バトルカード！バブルフック！」

ロックマンはとっさにバブルフックを打つとデスティル・ボーンは泡の中に閉じ込められる。

「……あ。やばい。」

「今だ！バトルカード！ロングソード！」

デスティル・ボーンが動けなくなったすきに一気に距離を詰め切りかかる。だが……

「くっ……ファンタジア幻想曲!!」

ロングソードを振ったにもかかわらず、当たった感じがしない。

「え?」

「こつちだよ。」

切ったデスティル・ボーンはぼやけて消え、代わりにもう一人のデスティル・ボーンが
ロックマンの後ろに現れる。

「いつのまに……」

「あはは。驚いたか? まあわかるけど……
幻想曲は分身を作りだすんだ。しかも、その分身と場所を入れ替えることもできる……
お得だろ?」

そう言っつて鎌を振り上げる。

「さあ……」

だがその瞬間、デスティル・ボーンの前にウォーロックが現れた。そしてそのまま得意の爪を振る。

『ビーストスイング! おらあ!』

「え?」

完璧に虚を突かれたデステイル・ボーンはまともにくらっつてしまっつ。そして一気に吹っ飛ばされた。

『へっ、どうだ！驚いただろ！』

「まさかウオーロック自身がくるとはね・・・

さすがに油断したな・・・」

『悪い癖だな。直せよいいかげん。』

「うるさいなデステイル。行くよ。」

デステイル・ボーンは立ち上がると鎌を構える。
ロックマンも同様に身構えた。

「ありがとう、ロック。」

『へっ！ほら、どんどん行くぞ、スバル！』

「ハアア！ バトルカード！ヘビーキャノン！」

腕をキャノンに変えたロックマンに対し、デステイル・ボーンはジャンプした。

「行くよ・・・幻想曲。」

次の瞬間、デステイル・ボーンの姿が2人、3人・・・7人になる。

「え！？」

「幻想曲の分身は最高6人だ。俺本体を入れて7人。」

7人のデステイル・ボーンが四方八方から襲いかかってくる・・・

！！

(狙いが・・・定まらない・・・!!)

あちこちの相手にキャノンを向けるが一度でも外したら終わりだといふ焦りが
なかなか撃たせない。

だがその間にも、デスティル・ボーンは迫っていた。

「さあ・・・」

「『『『『『『誰が本物でしょうか――!!』』』』』」

「くっ・・・うっっ・・・!!」

第5話 兄弟げんか？（後書き）

ピンチです（笑）

それにしても幻想曲便利ですね・・・

次回、ついに彼女が登場します。

「助けにきたよスバル君。あの死神みたいな電波人間は……
もしかして、新しい敵……？」

ハープ・ノート目が険しくなる。

何度も敵がスバルの前に現れることでスバルが戦いに巻き込まれ、
命の危険まであったことが何度もあった。

そのため、ミソラは内心とても心配していたのだ。

「いや、なんというか……えつと……」

ロックマンは少し戸惑う。

確かに戦っているとはいえ、敵というわけでもないし……
そう考えていると、デスティル・ボーンは鎌を構えた。

『そろそろ、決着をつけてもいいのでは？』

「乱入もあつたしね。アレ使うか……」

身構えたロックマンとハープ・ノートに鎌を向ける。

デューエット
「二重奏……」

『来るぞ、スバル!!』

『気をつけて、ミソラ!』

ウィザードの二人は警戒を促すが、すでに遅かった。

コンチエルトオブカラリッチチオ
「協奏曲の狂想曲!!」

デスティル・ボーンが持っている鎌が二つになったかと思うと、

その二つの鎌を回転させデスティル・ボーンは無数の斬撃を放つ。その量は狂想曲とは比べ物にならない。

「うわーっ!!」

「きゃああっ！」

二人は防ぎきれず斬撃を受けて倒れこんだ。そこにデスティル・ボーンが近づいて言った。

「もうおわりにしようか。まあまあ戦えたし

乱入してきた彼女もいるし・・・お互いしんどいしね。

そろそろ帰らないと星河さんたちも心配するかもしれない。」

そののんきに言うデスティル・ボーンだったが、ロックマンたちはぐったりしていた。

「・・・こっちの攻撃のほうが、ぜったいむちゃくちゃだよ・・・」

「私も、そう思う・・・」

結局、しばらく休んでから帰ることとなった。

第6話 乱入（後書き）

とうとう登場しましたよ！

はやくミソラを出したかったのでほっとしました。

「協奏曲の狂想曲」は

ホントは「カプリッチオオブリコンチェルト」が正しいのですが
ふりがなとすると合わなくあるのであえてこうしました。

バトル終わってちょっとおだやかな話を書きたいと思っています。

第7話 月夜

一休みした3人はウェーブアウトすることにした。

「それじゃ、お先に」

そういつてデスティル・ボーンがウェーブアウトすると、
あとにはロックマンとハープ・ノートの二人が残された。

「それじゃミソラちゃん、ぼくたちもウェーブアウトしようか」

「うん……あ、でも、わたしここでウェーブアウトしたら
ベイサイドシティに戻っちゃう」

「そっか、なら歩こうか」

スバルとセイヤはスバルの家の近くのウェーブステーションからウ
ェーブインしていたが、

デンプクンやほかのウィザードに迷惑をかけないよう
家からかなり離れたところに来ていたのだ。

そして月夜の中、二人はウェーブロードを歩いていく。

「それにしてもびっくりしたよ。スバル君が電波人間と戦ってるん
だから。」

「しかも、結構危ないところだったでしょ？」

「あはは……まあね。」

そういえば、どうしてミソラちゃんはこんな夜遅くにここまで来て
いたの？」

スバルの問いに、ミソラはちょっと驚いた顔をする。

「あれ、きいてない？」

「うん、まったく」

スバルの返事にミソラは説明する。

「いちおう、これから向かうことをスバル君のお母さんに伝えただけ……」

ここに来たのは、二つ目的があったんだ」

「え、なに？」

「うふふ……とりあえず、ナイショ」

「なんだよそれ……」

月夜に二人が笑顔で話す声が静かに流れた。

『いい感じじゃない、ミソラ』

『まったく、おめえとはあまり会いたくねえんだがな……』

『あら、じゃあ毎日来てあげましょうか？』

『勘弁してくれよ……』

ウィザードの会話もオペレーターに気付かれないようもつと静かに流れる。

やがてスバルの家の近くに着いた二人は、ウエーブステーションで地上に戻ると電波変換をとりて人間の姿に戻った。

「……遅いよ。歩いて戻ってくるなら、せめてメールしてくれたって……」

『だから先に家に入っていいんじゃないかって言ったのに……』

家の前では寒い中外で待ちぼうけを食らったセイヤが不満そうな顔で二人を待っていた。

「ただいまー」

「あら、おかえり。」

「あら？ミソラちゃんも一緒にいたいね」

家に入った3人をあかねが迎える。

「ごめんなさいねミソラちゃん。ちょうどスバルたちと入れ違いになっちゃって……」

あかねがミソラに謝るが、ミソラは構わないとあかねに伝え、3人はスバルの部屋に入った。

「それじゃ、そろそろ目的を教えてあげようかな」

「いったいなんなの？ミソラちゃん」

「まず一つ目は、今度ベイサイドハイスクールである学園祭で私もライブをやるからスバル君たちも来ない？って誘うこと」

その言葉にセイヤは驚く。

「ベイサイドハイスクールって、俺が行ってる学校じゃん！聞いてないよ？」

「そりゃそうだよ、サプライズだもん……って、えーと」

セイヤが今更誰かわからなかったことに気付き戸惑うミソラにスバルはセイヤを紹介する。

「ああ、しばらく僕の家に住むことになった連 セイヤっていうんだ。
だ。

だから一応、ぼくの兄さんになるんだって、父さんが言ってた」

第7話 月夜（後書き）

なんかベタな展開ですが勘弁してください……

そして、とうとう敵も動き出します。

第8話 陰の動き

飛行船にて。

「……では、そろそろ派手にやるか。」

彼はそう呟き、

「来い、巖」

呼ばれた部下は彼の前に行く。

いわお りょうすけ
巖 諒介。

右頬には大きな傷があり、その目つきも鋭い。

首からはジャラジャラとしてアクセサリーを着け、その髪は真っ赤である。

見た目はチャラチャラした若者といった感じだが、かなりの不良である。

「なんだよ。俺になんか用か」

「ああ、そろそろお前も暴れたがっていると思ってるな。」

彼のその言葉に巖はニヤリとする。

争い、喧嘩……そういったものが大好きなのだ。

「ククツ……んで、どこだよ。」

「場所はベイサイドハイスクールだ」

「はあ？何で学校に行かなきゃならねえんだよ？」

「そこに“あいつら”の一人がいることが分かった。そいつをつぶしてもらいたい。」

さらに幸運なことに、例のあれもそこにひとつあるらしいからな

「つぶす」の言葉に巖はさらに笑みが広がる。
そして彼はつぶじた。

「おまえとクロウだけでは動きにくそうだから……
誰か部下を連れて行け」

「……ケツ、そんなもん必要ねえと思うがな。
まあいいが、ウィザード・オン」

そして巖はウィザードであるクロウを出した。
茶色の電波の体をもつクロウはウォロックに少し似ている。
大きく違うところは装甲が深紅であること、そして大きな牙が生えていることだ。

『グルルウ……』

「クロウ、連れていくならどいつだ？」

『グルル、グルア、ガルルル』

「なるほどな……わかった。来い、ナイト!!」

さらにもう一体の電波体が巖たちの前に現れる。

紺色の電波に胸、肩には鎧が付いている。

頭の兜からは口元は見えないが目だけが光っているのが見える。

『呼んだか?』

「お前も俺達と来い、邪魔者はお前に任せる。」

『ああ、わかった……』

巖は彼に向き直るとめんどくさそうに言う。

「これでいいだろ。もう行くぜ」

「ああ……だが、実行は少しあとだ」

「なんでだよ!?!」

不満そうな巖を彼はなだめる。

「今度、学園祭があるようだな……その日には例のあれからは人が離れる。

ナイトが騒ぎを起こしている間に、お前がそれを回収すればいい」

「ケツ……わかったよ、ドクター」

立ち去って行った巖がいなくなると、ドクターと呼ばれた彼は笑みを浮かべた。

「さあ、期待しているぞ…… “獣王” クロウよ」

第8話 陰の動き（後書き）

とうとう敵も動きます。

次は少し間話入れるか
すぐ学園祭にするか考え中です。

感想待っています。

第9話 転校生

翌朝

『おい、起きろスバル!』

「うーん……むにゃ」

『起きなさいミソラ!! 時間見て時間!』

「……スバル君……ぐう」

『起きろよセイヤ、朝から宿題するんじゃないのかったのか?』

「くうー、あと少し……」

昨日の疲れからか全員爆睡。

ウィザードたちは自分のオペレーターを起こそうと必死だった。

それから10分後、スバルの家にルナ、ゴン太、キザマロがやってきた。

「どうせ、今日も寝坊してるでしょうね……」

「もしかしたら、ってこともあるんじゃないですか委員長?」

「それにしても腹減ったぜ……」

そんなことをしゃべりながらスバルの家に着くと
チャイムを鳴らす。

いや、なっただかならないか次の瞬間……
バゴン!!

「きゃ!」

「いってきます!」

『急げセイヤ!』

パンをくわえ、さらに手にはもう一つのパンを持って
セイヤが勢いよくドアを開けてウェーブライナーの駅へ走って行っ
た。

「な、なんだっただんですか今の人？」

「というか、あんな人いたかしら……きゃ!？」

バゴン!

「いってきます!」

『急ぐのよミソラ!』

今度はミソラが口にパンを頬張り
セイヤと同じく慌てて走って行った。

「い、今のは……ミソラちゃん？」

「なんでスバルの家に……」

「これは、説明してもらおう必要が……」

バゴン!

「もう、なんなのよさつきからあ!」

「いってきます!」

『だから起きろって言っただろっが!』

今度はスバルが家から駆けだしてくる。

「あ、おはよう!」

そしてそのまま走って行こうとするスバル。
ゴン太、キザマロが止めようとした瞬間、背後から殺気を感じて二人は振り向いた。

「この私を……あんなバゴンバゴン激突された私を……まさか置いていくわけじゃないでしょうね！スバル君！」

「い、委員長!?!」

「待ちなさいスバル君！」

鬼のような形相でスバルを追いかけてダツシユするルナ。
あわててゴン太とキザマロも追いかける。

「ちょっと、待ってくださいよー」

「ヒイ、ハア、待って……」

結局、教室に着いた後スバルはルナにつかまり雷のような説教を受けた。

それは、育田先生によると職員室まで聞こえる怒鳴り声だったそう
だ……

「まあ、朝からすごかったが、みんなはあんなに騒ぐなよー」

はい（約一名ふくれっ面で）

「では、今日は……転校生を紹介する!!」

おおー！

「では入っておいで二人とも！」

そして入ってきたのは……

「み、ミソラちゃん!？」

とたんに教室が驚愕と歓喜の声で嵐のようになる。
そんな生徒たちを育田はいさめる。

「コラコラ、うるさいぞ!

もう一人転校生がいるんだ、静かに!」

そしてもう一人入ってきたのは……

「え?」

みんな一気に静かになる。

何是なら入ってきた女の子は……車いすだったからだ。

その女の子は短い黒髪にカチューシャをしており、

その表情は決して笑顔とはいえないがどことなくさびしそうな感じも受けた。

身長は低いようだ。

「ベイサイドシティから来ました、転校生の響ミソラです!

よろしくお願いします!」

「アキンドシティから来ました、久住美影くすみ みかげです。

よろしくお願いします。」

その後、ミソラがどこに座るかで男子（スバル、ツカサ、ジャック
除く）が

自分の隣を主張したが、ミソラの

「私、スバル君の隣がいいです！」
発言にうなだれた。

そしてその日、スバルには憎しみとつらやみのこもった目線が
ずっと向けられたという。

第9話 転校生（後書き）

なんか、またしてもやっぱりの展開に……
でも、一緒に住みます宣言した時点で
やっぱりこつなりますよね……

ちなみに新キャラ、本格始動は少し後です。

第10話 先輩（前書き）

結局学園祭に突入してしまいました……

第10話 先輩

「おい、あいつとフォースはどこへ行った？」

ドクターは飛行船の中で部下に尋ねた。

「あの方はどこかわかりませんが……
フォース様ならおそらく展望デッキに」

「そうか、わかった」

そういうと彼は展望デッキへのぼった。

そこで一人の電波体が星を見ていた。

緑の電波の体をもつが、肩の装甲以外これといったものは付いていない。

姿もこれといった形はなく、球が少し細くなったような姿だった。

「なんだ？」

「……明日の任務。クロウとナイトだけで行かせるつもりだったが
いやな予感がしてな」

「だから？」

「お前も行け」

そう言うとドクターは降りて行った。

残ったフォースはさつきまでのように星を見上げる。

「ケツ、ナニサマノツモリカネ……」

「まあいいさ、別に体を動かすいい機会だと思えばいい。」

一人しかいないはずのデッキに、二人の声が流れた。

翌日。

「うわ、すごいなあ……」

『えらく豪勢だな、オイ』

スバルとウォーロックは大きな看板のかかった門の前にいた。
《ベイサイドハイスクール学園祭》

人はかなりおりとても混雑している。

客層も年齢が偏らず大人から子供まで大勢だ。

ミソラは用意があるため先に来ており、そのためスバルは
一人ウォーロックと来ていた。

「ミソラちゃんの出番っていつかな？」

『さあな。ただ、中庭コンサート、ってそこに書いてあるけど
あっちじゃないか？』

「あ、ホントだ。じゃあそっちに行ってみようか。」

そしてスバルは歩いて行った。

一方、控室。

ミソラは自分ともう一人の今日のサプライズゲストと一緒にいた。

「うー、緊張するなあ。」

「まだもつちよっと時間があるから、ゆっくり緊張をほぐせばいいよ。」

そうミソラにアドバイスするのは奏かなで麗音れのん。

髪が長い美人で、高校生ながらも人気の高い歌手である。

その歌声は澄み切っていて聴く者の心も響くと評判だ。

そして、ミソラの先輩でありミソラが目標としている人の一人でもあった。

(だって、奏先輩と初めて一緒に歌うんだよ……
そりゃあ緊張するって……)

そう考えているとハープが話しかけてきた。

『ミソラ、そういえば……』

「なあに、ハープ？」

『スバルにミソラの出る時間と場所、ちゃんと教えた？』

「え………あああっ！！しまった、忘れてたあ！！」

慌ててメールを打ち出すミソラ。

何とか無事メールを送信してほっと息をついたミソラを見て、麗音はほほえんだ。

「ふふ、おつちよこちよいだねえ。」

「うう………すいません」

「別に謝ることないよ。それより……」

そうやってちよつと意地悪な顔で笑う。

「もしかして、そのスバル君、っていうのは………彼氏かな？」

「／／／！！？ や、そ、そんなことはそのなんていうかえつとで
すねつまりその／／／」

「わかりやすいなあ。やっぱり彼氏なんだ。」

「ち、違いますよ!」

「じゃあ、嫌いな人?」

「いやその、別にそういうわけじゃないけどでもえっと」

年齢が違う。

それはつまりこういいう話でいかに相手の気持ちを知ろうとする場数が違うということなのだ。

「でも、さ」

「?」

ふと神妙な顔をした麗音にミソラは首をかしげる。

「もしミソラがその子を本当に好きなのなら……」

自分に素直にならないと、あとで一生後悔するよ?」

それは親友のスズカからもハーブからも言われていたことであつたが今の言葉は何か雰囲気違った。

「え、と、どういふことですか?」

尋ねるミソラに、麗音は悲しそうな笑顔を見せる。

「それはね、私は素直になれずに、結局ものすごく後悔してるってこと」

「え……」

驚くミソラを見て、次に時計を見ると

麗音はまた口を開いた。

「まだ時間はたくさんあるし……」
ミソラの背中を押すためにも、参考までに話そうか？」

本当はあまり話したいことではないだろう。

過去の苦い思い出だということはひしひしと伝わってくる。

にもかかわらず、それを自分のために話そうかと言ってくれたのだ。
断ったら失礼だろうなと思い、ミソラは

「はい。お願いします」

まっすぐ麗音を見て言った。

第10話 先輩（後書き）

またもや新キャラです。

でも、この麗音には少し思い入れがあります。
だから、ちゃんと麗音の気持ち伝わるように
書けたらいいなと思います。

第11話 後悔

ミソラのまっすぐとした目線に麗音は少し微笑んで、
そして麗音はミソラにぽつりぽつりと自らの過ちを話し始めた……

あれは、私が中学生の時のことだった。

私には好きな人がいた。当時はそんな意識なかったんだけど。

まあスバル君にあやかかってS君とでも呼ぼうかな？

(えー)

まあまあ、じゃあ続けるね。

最初は別に意識なんかしてなくて、ただのクラスメートだった。

でも一緒に過ごしている中で、私は彼と一緒にいるとなぜか心が弾むのを

感じるようになっていた。今のミソラもそんな感じじゃないのかな？
でも、その時私はまだ気付けていなかったんだよね……

そして修学旅行の時に、大きな出来事があった。

……彼が私に、告白してきた。

え？なんて告白されたかって？

いや、さすがに恥ずかしくて言えないよ……

その時、私は素直に答えるべきだった。

「本当は、私もあなたのことが好きなんです」って。

だけど、私はその頃、ちょうど歌手のオーディションに合格した知らせが
来たばかりでね。まだ誰にも話していなかった。もちろんS君に
も。

その頃は中学校も残りわずかで、付き合うつとしたら
高校に入ってから、っていうことだった。

でも私は、高校はオーディションに合格したから
その専門の学校へ行こうと考えていた。

……その学校、その時住んでいた街とは離れていたから
遠距離恋愛になることが目に見えていた。

だから、私は答えることができなかった。

……ひよっとしたら、あんまり会えないから自然と別れてしまっ
んじゃないかって

私は怖くてたまらなかった。
彼を失いたくは、なかった。

だから結局、私は「他に好きな人がいる」なんてはぐらかして断っ
てしまった。

……ホント、バカみたいでしょ？

彼を失わないよう正しい道を選んだつもりだったのに。

私は、自ら彼を失う道を選んでいた。

まだそのときは、別に好きだというわけでは、なんて自分に言い訳
してたけど。

芸能界に入っつて、たくさんかつこいい人や優しい人と話して。時には一緒に打ち上げとかで食事をするときもあったけど

かつて私が感じていたものが、そこにはなかった。だから私、やっと気付いた。

「ああ、私は彼のことが本当に好きだったんだな」って。

それからずつと後悔の連続。

なんで、私はあの時断つたんだらう？

なんで、私は自分の気持ちに気付かなかつたんだらう？

いや、気づいてたのに、気づかないふりをしていたのかもしれない。

だから、受け入れるべきだったんだ。

彼の告白も、自分の本当の気持ちも。

それが私の、後悔。

今でも忘れられないよ、あのころの温もりと、二人でバカやって笑顔だった日々は……

「そう、だったんですか……」

ミソラはうつむく。

もし自分が思いを伝えられなかったら。

こうして聞いてみると、それがどれだけ大事なことがよくわかった。

「でも、奏先輩は……」

そう言いかけた口を閉じる。
いくら自分が納得できるような答えを出そうとしても、
麗音にとってそれは自分が素直になれなかった、ということに直結
するからだ。
どんな理由であろうとも。

そんな悲しそうなミソラに、麗音は声をかける。

「でも、ミソラはまだ大丈夫。

自分が素直にならなきゃいけないことに気づけたなら。

まだ違う選択肢が残っているんだよ。

私が選べなかった、選択肢が」

「……ハイ」

そして麗音は再び時計を見た。

「さ、そろそろウォーミングアップしようか」

「わかりました。あ、ちょっと外に行ってきます」

そういつて外に出たミソラが、ハンターをしっかり握りしめていた
ことに

麗音は気づいていた。

そしてミソラが出て言ったドアに向かってつぶやく。

「ミソラ、あなたはきつと間違わずに済む。だから私のようににはき
つとならない。

私は……スバル君同様、彼がここにいるのを知っている。

ひよっとしたら見にくるかもしれない、なのに……

私は、どんな顔で会えばいいのか、わからないんだよ……」

第11話 後悔（後書き）

今回は、麗音の話ということで
少し書き方を変えてみました。

どうだったでしょうか？

感想待っています。

第12話 それぞれの思い

麗音がミソラに自分の過去を話す少し前のこと。

中庭についたスバルたちはそこでしばらくコンサートを見ることにした。

先ほどミソラから中庭でミソラのサプライズコンサートがあるというメールが来たのだが

その時間はまだだったけれど、教室などに行く時間はなかったからだ。

そんなわけで生徒たちが歌ったり演奏しているのを見てみると、後ろから声をかけられた。

「よっ、スバル。やっぱり来てたかー」

「あっ、兄さん。あれ、その手に持つてるのは？」

セイヤは制服を少し着崩したような服装をして

やはり着崩したネクタイをつけており、その手にはトランペットを持っていた。

「ああ、一応俺もコンサート出るからな」

『こいつ、いつも同じ所で失敗するんだけどなー』

そう言ってセイヤのウィザード、デスティルがウィザード・オンする。

「デスティルは空気の振動が見えるから音程もわかる。

加えて音楽好きだから、練習をよく見てもらってるんだ」

「へえ、そうなんだ。がんばってね！」

「ああ、がんばるよ。といっても、君の彼女ほどうまくはないんだけどね……」

その言葉にスバルは真っ赤になる。

「ち、ちがうよ別に僕とミソラちゃんはそういつわけじゃ」

「まあ、少しでも気があるんなら早めに言ったほうがいいよ？」

あんな大スターなんだから、いつ手がとどかない存在になってもおかしくないんだから」

そしてセイヤは手を振ると去って行った。

「まったく、何言ってるんだよ……」

そもそも、仮に僕が言ったところでミソラちゃんが僕のこと好きって保証はないのに……」

(うわぁ、コイツマジで気付いてないのか……大変だよなミソラのやつ)

ウォーロックがため息をついたことに鈍感すぎるスバルは気がつかなかった。

そして時間は過ぎていく。

それぞれの思いを抱えて。

く控室近く

『ミソラ、どっしするの?』

「う、勢いよく出て来たはいいんだけど……どっしりよ」

『まったく』

ミソラはハンターを前におろおろしている。

「と、とにかく……今日、コンサートが終わったら、私はスバル君に素直になる！」

そしてミソラは（半分勢いで）スバルにメールを送った。

（控室）

『みつけた』

「え？」

ミソラがなかなか帰ってこないのので先にウォーミングアップを始めようとした麗音は驚いて声を上げた。

ふりかえると、そこには一人の電波体がいた。

『人間にとりつくなら心にスキマのあいた人間か、周波数が合う人間が』

いいと聞いてはいたが……どちらにも当てはまるやつがいるとはな』

その紺色の電波の体をもつ電波体は言う。

そう、ナイトである。

「な、なに……？」

近づいてくるナイトから離れようとする麗音だったが、場所が悪かった。

ナイトはちょうど、麗音とドアの間にいた。

それはつまり、壁際に移動するしかないということ……

麗音の背中に壁が当たる。

「…………ツ!?!」

『さあ、お前の体…………貸してもらおうぞ!』

「い、いやあッ…………」

〈校門〉

「ククッ、ずいぶん人がいやがる…………」

巖はにやにやしなから校門をくぐった。

「さあ、暴れてやろうじゃねえか。

ククッ、楽しみでたまらねえよ…………」

『ガLLLLLLLL…………』

〈コンサートリハーサル室〉

『またテンポがずれた!』

もうすぐ本番だぞ、大丈夫か!?!』

「ああ、大丈夫…………たぶん」

『たぶんじゃねえ!ホラ、もう一回48小節目から!』

セイヤはデスクトップにしがかれ必死でリハーサルをしていた…………

〈屋上〉

「風が涼しいな…………」

『へッ、電波体ノクセニ』

「そういなよ。」

さて、やることはとつと済ませたい主義なんだがな」
フォースは屋上から学校の様子を見渡していた。
そしてポツリとつぶやく。

「Project TCさえなかったら……こんなところにはいなくて済んだのにな……」

（中庭）

「あれ、ミソラちゃんからメールが来てる」

ちよつと話したいことがあるの。コンサートが終わったら会えないかな？

「いったい何なんだろうね、ロック」

「さあ……」

にしても、なんか退屈だな。こつ、なんかスリリングなこととか起きねえか？」

「そんな物騒なこと考えないでよ……」

スバルとウォーロックは、演奏を聴きながらのんびりと話をしていた。

ウォーロックが言ったことが本当になるうとしていることに、まだ二人は気づいていなかった。

第12話 それぞれの思い（後書き）

なんか少し引つ張りすぎだったかな？

次回からバトルを少しづつ入れていきたいと思います。

第13話 荒れる学園祭 ～開幕～

巖は体育館前にある広場にきた。

ここでは食事ができるスペースがつくつてあり、それにあわせ生徒たちが出店を出していた。

「たこやき、いかがですかー」

「うどんおいしいですよー」

屋台からは客引きの音がする。

昼過ぎということもあり、たくさんの人が集まっている。それを確認すると、巖はハンターをとりだした。

「来い、クロウ」

『グルルル』

そして軽く息を吸い込むと、一気に吐き出した。

「電波変換!!」

声に反応した何人かが振りむくと、そこには獣のような姿をしたものがいた。

全体的に黒い体をしており、腕と足には巨大なツメ、肩には深紅の装甲が付いている。

頭からは腰まであるような長い茶色のたてがみがあり、その毛は鋭くかつている。

黄色くぎらついた目、そして口には鋭い牙があった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

咆哮を上げる獣を見た人々はいつせいに逃げ始める。
そこに獣は飛び込むと、近くにあったテントをツメで破壊した。

「ククツ、やっぱりこの力は最高だぜ！！
この、“クロウ・ビースト”の力はよ！！」

そう叫びながらクロウ・ビーストは次のテントに向かって腕を振り
斬撃を放つ。

あたりは大パニックになっていた。

一方。

「ずいぶんと騒がしいな……クロウか？」

一応、騒ぎを起こすのは私の役目だったと思うが。しょうがないな
……」

そう呟いているのは麗音だった。
いや、それは的確ではない。

確かに口を開き歩いていたのは麗音だが、実際はナイトが
その体に乗っ取っていた。

「私は、アイツを探すとするか。一応、騒ぎも起こせるから
任務をこなすことにもつながるしな」

麗音に乗っ取ったナイトはターゲットを探しまた歩き始めた。

スバルは、突然の騒ぎに驚いていたが、すぐに表情を変えた。

「なにか、あつたみたいだね」

『おおっ、オレが暴れるチャンスが来たか？』

「ロック、喜んじゃ駄目だよそこは……」

そして広場のほうへ走って行った。

『どうする、セイヤ？』

「さすがにコンサートどころじゃなくなりそうだから……
様子を見に行ってみようか」

『わかった』

セイヤたちも、騒ぎの起きたほうへ走って行った。

第13話 荒れる学園祭 ～開幕～（後書き）

いよいよ学園祭バトル勃発です。

感想待っています。

第14話 荒れる学園祭 ～再会～

ミソラは騒ぎが起こったことに気付くと真っ先に控室のほうへ走りだした。

『ミソラ、どこへいくつもり!!』

「先輩のところへ戻らなきゃ！」

早く戻らないと先輩にまで危険が及ぶかもしれない！」

『わかったわ。急ぎましょう』

逃げ惑う人々とは逆方向へ走りだすミソラ。

少し走った時、誰かがこっちに歩いてくるのに気がついた。

「あれは……先輩!？」

ゆっくりと歩いてきた麗音はミソラに気がつく

じっとミソラを見つめた。

その目に光はない。

「ちがう、か……」

麗音の口から出た声にミソラははっと顔をこわばらせた。

普段の声とは違って少し重たく、何より雰囲気違っていったのだ。

「先輩……じゃ、ない……!？」

「おや、この人間の知り合いだったか？」

バれてしまっは仕方がないな。だが、邪魔されても困る」

「ミソ、ラ……?」

か細い声で本物の麗音は声を出す
が、それでもナイトは麗音を操り手を前に出す。

「騒がれてはこちらの行動に支障をきたすかもしれない。
おとなしく倒されてもらうよ」

「ニゲテ……ミソラ……」

『くるわよ、ミソラ……』

「よくも、先輩を……」

ミソラは歯ぎしりしてナイトをにらみつける。

「電波変換……」

そして麗音とミソラが光に包まれる……

電波変換してハーブ・ノートになったミソラの前には
騎士のような姿をした電波人間がいた。

全身が鎧に覆われており、右手には長い槍を持っている。

紺色の鎧の肩の部分には槍を模した紋章があり、

兜の顔の部分にある縦線の隙間からは無気力な目が見えていた。

「これが、ナイト・バトラーだ」

そう言うナイト・バトラーにハーブ・ノートはギターを構える。

「先輩から離れて……」

「ダメ……、アブ……ナイ……」

麗音の声が出たかと思うと、ナイト・バトラーは槍を構え突進して
きた。

その勢いに驚いて手が止まったハーブ・ノートは直撃を食らい飛ば

される。

「キャアアア！」

「いくぞ、ソニックライド！」

落ちて来たところにさらに突進を食らい、またハープ・ノートは弾き飛ばされる。

(まずい……このまま食らっていたら、体がもたない!!)

そう考えながら飛ばされるハープ・ノートを、誰かが受け止めた。

「え!?!」

「スバルじゃなくて悪いね」

受け止めたのはデスティル・ポーン。電波変換したセイヤだった。ハープ・ノートをおろしデスティル・ポーンは相手を見る。

そのとたん、無気力だったナイト・バトラーの目が見開かれる。

「サザ、ナミ……?」

「!?!」

その声を聞いたデスティル・ポーンも同じようにその場に立ち止まる。

そして、静かに告げる。

「悪い、ミソラ。」

「ここは俺に任せて、スバルのところへ行ってくれないか」

「でも……」

「頼む」

その声に何か辛そうな響きをハープ・ノートは感じ取った。
この感覚をさつき一度感じていたハープ・ノートは

「わかりました……お願いします」

後を任せ、作り出した音符に乗って飛んで行った。

後に残ったのはデスティル・ポーンとナイト・バトラーの二人。

「……ひさしぶりだな、奏」

「ソナナ、ナンデ……」

「おや？知り合いか？」

だが、こちらもようやく探していた相手が見つかったようだ。

“死神”デスティルよ」

ナイトのことなど二人は聞いていなかった。

今、思いがけない形で。

セイヤと麗音は再会を果たした。

第14話 荒れる学園祭 ～再会～（後書き）

セイヤと麗音の関係、

気づいていた人も多いのではないのでしょうか？

次は主人公にもでてきてもらいます。

第15話 荒れる学園祭 く共闘く

その頃もう一人の来訪者、フォースは……

「ここだな」

「第2資料室」と書かれた部屋の中にフォースはいた。辺りには様々なものが展示されており、いくつか説明がついたものもある。

本来は倉庫であつたのだが、校長の計らいにより生徒は希望すれば閲覧することが可能だつた。

そんなものを見て回る中、フォースはあるものに目をとめる。

「ん？これは……」

それは恐竜の頭のような形をしたものだつた。

説明には、最近海の底から発見されたものであると書かれていた。

「すさまじい電波を感じるな……なんだ？

だが、持って帰るわけにもいかないな」

そう言つて辺りを見まわすと、フォースは目当ての物を見つけた。

「あつた……これだ」

それは赤い光を放つ手のひらサイズの球体だつた。

強い光を発するその周りには少しだけノイズが浮いている。

それにフォースが手を伸ばそうとすると、とたんに

二人の警備ウイザードが現れる。

「お前、今それを盗もうとしたな？」
「おとなしくしてもらおうぞ」

そういうウィザードを前にしてもフォースは全然気にしない。

「オレガヤルカ？」

「いや、なんのためにタイミング見計らって入ったと思うんだ？
この程度が二人ならオレで十分だ」

「なにをごちゃごちゃ言っている！」

そう言う警備ウィザードにフォースは苦笑する。

「いいこと教えてやるよ。よく耳をすましてみなよ」

ウー！ウー！ウー！

学校中にサイレンが鳴っている。

クロウ・ビーストが暴れ出して警報システムが作動したのだ。

「つまり、オレがここで何をしようとしても。

なっている警報はもうさらに鳴ることはない。したがって、応援も
呼べないのだ」

その言葉に驚く警備ウィザード達にフォースは呟く。

「じゃあそろそろ……消えてもらおうか」

ようやく広場にたどりついたスバルは、その光景にたじろぐ。

「な、なんなの、これ……」

それは見るも無残な光景。

たくさんあったテントはすべてばらばらに切り裂かれている。

学生達在必死になって作ったであろう屋台も

バラバラにされガラクタと化している。

そんな瓦礫の山の上で一人咆哮を上げる電波人間がいた。

クロウ・ビーストはスバルに気がつくと目を細める。

「なんだ、お前？」

「せっかくの学園祭を、よくも台無しにしたな！」

スバルはハンターをつけた手を天に掲げる

「トランスコード！ シューティングスターロックマン！」

電波変換したロックマンの青い体を見ると、クロウ・ビーストは口笛を吹いた。

「ヒュウ。これが、噂のロックマンか。

話に聞いてはいたが、本当にガキだったとはな」

ロックマンはクロウ・ビーストの話は聞き流し構える

「ウェーブバトル！ ライド・オン！」

「はあ、はあ……」

ハープ・ノートは音符に乗っているにもかかわらず息切れしている。

実は、操作には結構な集中力が必要であり
長い間スバルを探して飛んでいた分少し疲れていたのだ。
そのとたん、何か壊れたような大きな音と煙が出ているのに気が
ついた。

「あそこか！」

そしてハープ・ノートは急いでそこに向かった。

「うわあっ！」

ロックマンは屋台の残骸にたたきつけられる。

体制を整えようとするロックマンの前に一瞬でクロウ・ビーストが
現れる。

「ブレイククロー！」

「！？ く、この……」

ロックマンはシールドを出すか

「意味ねえよそんなもん！！」

クロウ・ビーストが振りおろしたツメはシールドを砕きロックマン
を切り裂く。

「バトルカード！ プラズマガン！」

なんとかマヒさせようとするロックマンだがクロウ・ビーストは
あっさりとよけてしまう。

『チツ、やりにくいやるうだぜ』

ウォーロックが毒づくのも無理はない。

クロウ・ビーストの最大の特徴は攻撃ではなく、そのスピード。

あまりのハイスピードにロックマンは対応できず

なかなか攻撃をあてることができない。

「オラ、ジェットファンゲ！」

そして距離を取ろうとしてもすぐ詰められる。

牙をむけ突進してきたクロウ・ビーストにロックマンはかみつかる。

「ぐああ！」

「ケツ、雑魚が！」

そのままロックマンを蹴り飛ばすとクロウ・ビーストはツメを光らせた。

「そろそろ消えな、この」

「シヨックノート！」

突然降ってきた音符をクロウ・ビーストはまともに食らってしまう。

「ぐわっ！なんだこれはあッ！？」

「今だよ、スバル君！！」

シヨックノートでクロウ・ビーストはマヒしてしまい動けない。

それに気がつくともロックマンは腕をクロウ・ビーストに向け

「バトルカード！インパクトキャノン！」

「ぐおおおお！」

ようやく強い攻撃をあてられたロックマンの横に
ハーブ・ノートが降り立つ。

「ミソラちゃん！」

「援護するよスバル君！ほら、あいつまた来る！」

ダメージを受け、マヒが解けたクロウ・ビーストはかなりいらついでいた。

「この野郎が！もう許さん！」

「ためえら二人ともスタボロにしてやるよオツ！！」

「行くよ、ミソラちゃん！！」

「うん！」

そして再びロックマンはクロウ・ビーストに向かっていった。

第15話 荒れる学園祭 ー共闘ー (後書き)

本当はフォースの話は前回で出すつもりでしたが長くなったのでこっちに移しました。

そしたらこっちが長くなってしまいました……

第16話 荒れる学園祭 信頼 (前書き)

話数間違っていました。

申し訳ありませんでした。

第16話 荒れる学園祭 〱信頼〱

ガキイツ！ キン！！ ギカアン！！！！

鎌と槍がぶつかっては離れ、鋭い金属音を立てる。

デステイル・ボーンとナイト・バトラーは自らの武器を用いて接近戦をしていた。

「とつとと奏から離れる！」

「それは駄目だな、こつちにもやることがあるんでね！」

再び激突する両者。

デステイル・ボーンは離れて距離をとると、鎌を振った。

「狂想曲！」

ナイト・バトラーにたくさんの斬撃が襲いかかる。

しかしナイト・バトラーも槍を構えると

「フン！ ガトリングストーム！！！」

目にも見えない速さで持っていた槍を連続で突き出す。

それはまるで機関銃のようにデステイル・ボーンが放った斬撃を撃墜していく。

すべての斬撃を突くとナイト・バトラーは叫んだ。

「その程度の斬撃じゃ、仮に私に届いたとしても私の鎧は斬れないな！」

もつとも、下手に大技を出してこの鎧ごと斬ろうとしたら……」

そう言って自分を指さす。

「この人間も斬られてアウトだが？」

「ちつくしょう……」

こぶしを握り締めてデステイル・ボーンは悔しがる。

(強すぎてダメ、弱すぎてダメ。)

あーもう、なんでこんなめんどくさいのが相手かなあ？)

一応、ミソラにやらせてくれと言ったのは自分ではあるが、頭の中で文句を言っているとナイト・バトラーが向かってきた。

「鎧の内部から攻撃でもしない限り、お前は望む形で私には勝てないぞ！」

この人間を見捨てればいいじゃないか、勝ちたいなら！」

「そんなの、できねえから困ってんだろっが！」

なんとかナイト・バトラーの突進を押し返すデステイル・ボーン。だんだん息があがってきたデステイル・ボーンを無気力な目は見つめていた。

「サザナミ……」

その弱々しい声を聞くと、デステイル・ボーンはドクロの仮面の下で笑う。

「まってる、必ず助けるからー!!」

「そうか、できるものならやってみるよー!!」

そして二人はまた戦う。

(サザナミ……)

体が勝手に動く中、麗音はぼんやりとセイヤのことを考えていた。

(なんで、私を助けようとしているの……?)

私はあなたを受け入れなかったのに……)

考えても、わからない。

「ナンデ……?」

「相変わらず、鈍感だなあ」

その声に答えるように、鎌を振りながらデスティル・ボーンは言う。

「俺は(確かに振られたんだけど)お前を見捨てるほど

ひどい人間のつもりはないし。

そもそも、俺がお前を助けようとすることに疑問があるわけないだ
ろっ?」

「サザナミ……」

「もうおしゃべりはいいだろ? ガトリングストーム!」

今度は攻撃に転じたナイト・バトラーが再び槍の突きを連発してく
る。

「だから、さ……」

デスティル・ボーンも鎌を構えた。

「鎮魂歌レクイエム!!」

そう叫んでデスティル・ボーンが振った鎌から
狂想曲のように大量の、斬撃ではなく怨霊の顔をした青紫色の炎が
飛ぶ。

「な!?!」

炎はナイト・バトラーの槍をもともせず
一気にナイト・バトラーに激突する。

「ぐうつ!?!」

「斬撃じゃないから、お前にも効くだろ?
だから俺を信じる、麗音」

「!?!」

名前で呼ばれたことに麗音は息をのむ。

(漣、もしかして本当に……)

ああ、また私は忘れていたみたいだ……)

麗音は少しずつ自分を取り戻していく。

(私はあの時決めたじゃないか、次は受け入れようって。
受け入れるんだっただら……信じなきゃ。任せなきゃ)

「?」

少し体が動かしづらくなったことにナイト・バトラーは気づき首を
かしげる。

だがその一瞬のすきをデスティル・ボーンは見逃さなかった。

「さあ、そろそろ終わらせようか!！」

そういつてナイト・バトラーに鎌を振り上げた。

第16話 荒れる学園祭 〱信頼〱 (後書き)

更新少し遅くなりました。

このところ多忙でした……

次回で、デスティル・ボーンVSナイト・バトラーは決着です。

第17話 荒れる学園祭 笑顔（前書き）

とうとう、累計ユニーク数1000人を超えました！
読んでくださった方々、ほんとうにありがとうございます！

第17話 荒れる学園祭 笑顔

「うおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

デスティル・ボーンが振りおろした鎌は、ナイト・バトラーが身をかばおうと突き出した腕をよけ鎧の胸に直撃する！

「ぐああっ！！！」

「なんだよ、効いてるじゃないか！」

その反応にデスティル・ボーンは思わず抗議する。

しかし、そんなデスティル・ボーンに構うことなくナイト・バトラーは立ち上がった。

「私自身に効くとはいつても、多少だ。

私をこの人間から引き離そうと思ったら……それなりの攻撃が必要だぞ？」

「だから奏に危害が及ぶ、つてわけか……

じゃ、次行くぜ。 プレリュード 前奏曲！」

デスティル・ボーンが叫ぶと持っていた鎌の刃が折れ曲がった状態から

まっすぐになる。

いや、まっすぐというわけではない。まるで金属という特性を失ったかのように

しなりをもっていたのだから。

刃の鞭となった鎌を構え、デスティル・ボーンはナイト・バトラーに接近して攻撃を仕掛ける。

「はあああああつ！」

デスティル・ボーンが腕を振るたびに、鞭も同じように動き
ナイト・バトラーを攻撃していく。

しかし、いつまでもくらっているわけでもなく

「なめるなよ、この！」

ナイト・バトラーは槍を構え反撃を仕掛ける。

「ならば、とっておきのこれをくらわせてやるっ！」

ナイトランスライド！！」

持っていた槍が真っ黒に染まり巨大化していく。

槍の直径がナイト・バトラー自身よりも少し大きいくらいになると、
その巨大な槍をつかみナイト・バトラーがあのだ突進力で向かってき
た！

「くらえええっ！」

「断るっ！」

デスティル・ボーンは即答すると刃の鞭をふるう。

そして巨大な槍を受け止めるのではなく、受け流すように鞭をあて
ていく。

次の瞬間、デスティル・ボーンは突進してきた槍をよけナイト・バ
トラーの後ろに回る。

「……………！？ しまった……………」

ナイト・バトラーが気づいた時には、すでにデスティル・ボーンは

鞭を振りおろしていた。

「ぐうっ！だが、この程度のダメージを重ねても、さっき言ったように……！？」

バキイイーン！

ナイト・バトラーは突然異変に気付いた。

鎧の胸の部分に大きなヒビが入り、砕けたのだ。

「な、なぜ……」

「作戦通りだ。」

デステイル・ボーンは鞭を元の鎌の状態に戻す。

「そうか……そういうことか……！」

ナイト・バトラーはすべてを理解する。

デステイル・ボーンは前奏曲を使った時、全身を攻撃しているように見せかけて

そのほとんどを鎌が直撃したナイト・バトラーの胸の部分にあてていたのである。

そしてさっきの攻撃も狙いは胸で、蓄積ダメージが今効いたということだ。

「だが、それがどうした！この程度では私は……」

反撃しようとしたナイト・バトラーだったが、急に動かなくなった。

「な、どういうことだ……？」

「漣」

その口から、麗音の声がした。
今までと違い、その声は生気が宿っていた。

「私がこいつを抑える。だから……助けて」

「ああ……わかった！」

「ち、ちくしょう！動け！動けえ！！」

叫ぶナイト・バトラーだったが、デスティル・ポーンは鎌の刃の先を
鎧の日々の中に入れ込んだ。

「これで、終わりだ……！！ 鎮魂歌！！」

次の瞬間、ナイト・バトラーは光に包まれた。

「お前、自分で言ったよな？内部から攻撃でもしない限り、って。
だったら、こうだあ！！」

「く、くそおおおおおおおおおおおお！！！！」

鎧の内部から青紫色の炎があふれ、ナイト・バトラーの鎧は砕け散
った。

そして、断末魔とともにナイトは消え麗音が倒れこむ。

電波変換を解いたセイヤは倒れこんできた麗音をまるで抱きしめる
ように受け止めた。

「最後のは……危なかったんだ、けどな……」

「気にするなよ。……約束通り、助けたよ」

ふと、自分がセイヤに寄りかかっていることに気付いた麗音は顔を
真っ赤にして

離れようとしたが、激しい疲労感に襲われ動くことができなかった。しかしセイヤはそれに気付いていなかった。

「あれ、どうした？」

「ううん、なんでもない。……それより、その

「？」

「……ありがとう」

そして麗音は目を閉じた。

(やっぱり、漣のことが私は好きだ。

せっかくまた会えたんだから……今度、こそ……)

長い間初めての電波変換をしていた疲労に加え、気が緩んだ麗音はとうとう気絶してしまった。

「あ、おい奏！まったく、心配させて……

それにしても……」

セイヤは気絶した麗音の顔を覗き込む。

「なんともまあ、こんなにも笑顔で寝ちやうとはね……」

そこには、満面の笑みを浮かべ眠る麗音がいた。

第17話 荒れる学園祭 〽笑顔〽 (後書き)

ようやく決着です。

この二人、自分的にとても大好きなキャラです。

次は、メインの二人にも頑張ってもらいます。

油断大敵。

気がついたらクロウ・ビーストは今まさに攻撃を放とうとしていた。

「ハーミットマシンガン!!」

鋭くとがった無数の毛が四方八方に飛ばされた。

慌てて二人は防御しようとする。

「シールド!」

「ショックノート!」

しかし、ハープ・ノートのショックノートはあっけなく相殺される。

「ウソ!この毛、そんなに威力があるの!？」

『ミソラ、危ない!』

「キヤアアアアアアアアアッ!!!」

そのままハープ・ノートは無数の毛に襲われてしまった。

「ミソラちゃん!」

『おい、スバル、こっちもまずいぞ………』

ロックマンも危険だった。

あまりの数にシールドが限界を迎えつつあったのだ。

そして、とうとうシールドは砕け散る。

「うわああああっ!」

「ハッ、ざまあみろ!」

クロウ・ビーストはたいそうご満悦だった。
最初のニヤニヤ笑いが再び口元に広がる。

「どんどんいくぞー！」

そうやってクロウ・ビーストはいつきにハーブ・ノートとの距離を詰める。

「ブレイククロー！」

「キヤアアアッ！」

ツメで切り裂かれ倒れるハーブ・ノート。

そんな彼女にクロウ・ビーストは再びツメを振り上げる。

「これで消えるー！！」

「ミソラちゃん！」

今にもやられそうなハーブ・ノートを見てロックマンはクロウ・ビーストにむかって

「バトルカード！ ダンシングブレード！」

剣を思いつきり投げつけた。

その剣は見事クロウ・ビーストが振り上げた左手にヒットする。

「ぐああああっ！」

急に左手を襲った激痛にクロウ・ビーストはもたえ苦しむ。

そのすきにロックマンはハーブ・ノートにかけより回復させる。

「くっ……」

「ククッ、今のインパクトブレスはさすがに効いたか？
なにせ15分に一回の必殺技だからな。それなりはあるのさ。」

ロックマンはソードを出して応戦するが、その足どりはフラフラしている。

いっぽう、ハーブ・ノートはあることに気がついていた。

(15分……？それって、まさか……)

「ハーブ」

『なに？ミソラ』

「……を……したいんだけど、できる？」

『無理じゃないけど、時間があるわね……』

「わかった」

そしてハーブ・ノートは声を張り上げた。

「スバル君！あと10分、時間を稼いで……！」

第18話 荒れる学園祭 〽咆哮〽 (後書き)

最近更新が遅れるうえに不定期ですみません。
もう少し頻繁に更新したいです。

第19話 荒れる学園祭 ー理由ー

「10分!? いや、ちょっと……」

「任せたよスバル君!!」

聞いているのか聞いていないのかはともかく、ハーブ・ノートは口ツクマンに

クロウ・ビーストの足止めを任せると作業を始めた。

「ハッ、10分で何ができるって言うんだよ!!」

クロウ・ビーストは再びたてがみを立て始めた。

「くらえ、ハーミットマシ……」

「バトルカード! エレキソード!!」

ロックマンは攻撃をしようと動きの止まったクロウ・ビーストに一気に接近して

エレキソードで斬りつける。

当然、マヒさせるために。

「またこれかよ、チクシヨウガアア!」

(時間かせぎには、こっちが楽そうだからね……)

一方、ハーブ・ノートは必死でギターをいじったりしていた。

「こんなかんじ?」

「ええ、でもまだもう少しね。」

……私たちがもつ中にあの能力があるから、あとはあれに対応でき

るよう

このギターを調節することが必要よ。それと……』

そしてハーブは白く輝く球体をひとつ出現させた。

その球体はやはり白く輝く電波でハーブ・ノートのギターとつながっている。

「これは？」

『イヤホン、といえいいのかしら。』

そのままあれをしたら、あなたやロックマン、さらにはこの学校にも被害が及ぶわ。

さっきの思い出してごらんなさいよ』

「なるほど、確かにね……」

『この球体を、あのクロウ・ビーストとかいうやつにどうにかしてあてなさい。』

そうすれば後はあなたの作戦通り……』

「ってわけだね。了解！」

そして手に球体をもつと、クロウ・ビーストとロックマンのところにへむかっで行った。

ジジ……ジ……

「悪いが、これはいただくぜ」

そう言ってフォースは目当ての赤く光る球体を回収した。

「じゃあな」

フォースはその部屋から一瞬で消え、別の場所に向かった。その地面には警備ウイザードが二人とも倒れており、今まさに消滅するところだった……。

「スバル君！」

ハープ・ノートが戻った時、ロックマンはプラズマガンをクロウ・ビーストに向かって撃っていたがなかなか当たらず苦戦していた。クロウ・ビーストはそのスピードでロックマンの攻撃をすべてかわすとツメを振り上げた。

「ブレイククロー！！」

「ぐうっ！！」

ブレイククローはシールドが通用しないため、一気に接近されるともうかわすことができない。さらに攻撃を加えようとするクロウ・ビーストにむかって

「パルスソングー！！」

ハープ・ノートはギターをかき鳴らし音波を放った。

「があ！？」

「み、ミソラちゃん！」

「さつき15分に一回、って相手が言った時、思ったんだ。

あれほどの大音量なら相手だけじゃなく、自分にも多少なりとも影響があるんじゃないか、って。それはつまり、15分に一回って言うのは……」

「自分の耳があ音量に耐えられるぐらいまで回復しないとイケないってこと……」

ロックマンの指摘にハープ・ノートは頷いた。

「私、ハープ・ノートの能力には聞いた音を録音する能力もあつてね。

だから耳がまだ弱つているときに録音した大音量を再生すれば、って思ったんだ。

獣ならなおさら耳が敏感なはずだしね

でもあんなもの再生しようとしたらギターが壊れかねなくて。だからスバル君に

時間を稼いでもらつて強化してたの」

「じゃあ、あの白い電波は？」

「あれはイヤホンみたいなものでね。普通に音を再生したら

クロウ・ビーストが吠えた時みたいに私やスバル君、そして周りにまで

危害が及ぶからあのイヤホンの電波を使ってクロウ・ビーストだけが自分の咆哮をもう一回聴けるようにしてあげたの」

ふと見ると、よほど効いたのかクロウ・ビーストは電波変換が解け巖とクロウに分かれていた。

巖は気絶してピクリともせず、クロウもまた弱つてところどころがデリート寸前になっていた。

「とにかく……」

「勝った、ね」

二人は向き合つとにっこり笑つと

「イエーイ！」

ハイタッチをしてみた笑つた。

第19話 荒れる学園祭 ー理由ー(後書き)

全然バトルがうまく書けません。

というか、やっぱり文章見直すとひどいですね……

そろそろ学園祭編も終わりとなります。

いかがだったでしょうか？

感想待っています。

第20話 荒れる学園祭 〱終幕〱

「スバル、大丈夫かー」

「あ、兄さん！何とか、大丈夫だった！」

スバルとミソラが喜んでいたところに、セイヤが麗音をおんぶしてやってきた。

麗音は気絶してセイヤの背中で眠っていたが、特別目立つ外傷はなかった。

ミソラはすぐに麗音の元へと駆け寄った。

「先輩！よかった、無事で……」

セイヤがそばにあったベンチに麗音を寝かせると、3人は今回の戦いについて

自分の活躍や相手のことについて話し始めた。

「今回はミソラちゃんお手柄だったね」

「えへへ、ありがとう」

「おいおい、俺だってがんばったんだけどな……」

セイヤは少しむっとしたようにすると、スバルは少し表情をまじめにする。

「しかし、今回の敵……FM星人じゃないしなあ……」

『ああ、まちがいないぜ』

「ホント、どういことだろ……」

「……………」

その一方でセイヤは黙っていた。

(話したほうが……いいかな、やっぱり)

「実は……」

「やれやれ、結局駄目だったか」

セイヤの話に割り込んできたその声に3人が振りむくと、弱ったクロウの隣に一人の電波体がいた。

「お前は誰だ!」

「オレか? オレはフォース、一応こいつらの仲間だ」

そう言うとフォースはクロウのほうを見る。

「獣王とか言われたやつがこのありさまか。まったく、みっともないやつだな。

とりあえず、デリートされるとまずいから……」

すると、フォースの体に変化し、腕のような形の電波が伸びて来た。その電波の先が大きくなったと思うと、次の瞬間口のように大きく開いた。

「キャプチャー」

『グルル……ゴアアッ』

クロウはすぐにその口の電波の中に飲み込まれてしまい、その電波もまたもとのようにフォースの体に戻って行った。

次にフォースは驚いて固まっていた3人を無視すると巖をたたき起した。

「おい」

「う、ぐ……」

「目的のものはもう手に入れた。ナイトはデリートされたみたいだし、クロウはデリートされるとまずいから俺の体内に保護した。引きあげるぞ」

そして周波数変換をして、フォースは消えてしまった。その後を慌てて巖が追い走り去っていく。

3人はそれをただ見ているだけしか出来なかった。

「まだいたんだ……」

『それより、目的のものってなんだったのかしら?』

「気になるよね……」

また考え込むスバルとミソラだったが、セイヤはハンターを覗き込んだ。

「デステイル」

『ん?』

「やっぱりあいつらか。スバルたちには話したほうが……」

『いや、今はまだ早い。もっと見極めた後で、だ』

「わかったよ……」

顔を上げると、セイヤの目には静かになった学校の風景が映った。

「結局、学園祭……どうするのかな?」

「うおー!……」

「マジかよ、本物だ!!」
「スゴイ、写真写真!!」

数時間後、とりあえず中庭にてステージが修復されると、せっかくだからということとでサプライズだけは行われることとなりステージの上ではミソラが歌い始めた。

）
）

ウェーブロード　ひろい世界
よぞら　みあげ　ひとりぼっち
キズナ　さがして　ただ　さまよう

）
）

「シューティング・スター、だね」
『やっぱり、お前がいるからこの曲を選んだんだろうな……』
「？何か言った、ロック？」
『……別に』

ミソラが歌い終わると、ステージに今度は麗音があがってきた。

「マジかよ、奏　麗音も来てるのか!？」
「スゴイ、なんでこんな高校に!？」

観客のざわめきはさらに大きくなっていった。

「あいつ、体調大丈夫なのか……?」

『出ると言ってきたかなかったからな……』

セイヤの心配をよそに、麗音は歌い始めた。

くく

どんなに歩いても 見える風景は同じ
抜け出そう 抜け出そう

そのために私は歩いて行くんだ

どんなに小さな 一歩でも

くくく

歌い終わると麗音とミソラは礼をする。

ワアアアアアアアアアアアアアアアアア!

観客からの拍手がやむと、ミソラと麗音は顔を見合わせ大きな声で
言った。

「今日は来てくれてありがとう!」

「最後に、今日特別に二人でのオリジナル曲をみなさんに贈ります

!..!」

く 本番2時間前のことく

「ねえミソラ、今日二人でやるはずの曲だけだよ」

「なんですか?」

「ここの歌詞をこんな感じにして、ここをこんな風に変えない?」

「いいですけど……どうしてですか?」

「いやほら、今日せっかく会えたって言うかミソラちゃんも決心したし私もここで一つ自分の思いを素直に歌にするのもいいかなって
いうか」

(先輩、とてもあたふたしてる……)

「いいですよ　せっかくですから、ね」

「うん、よろしくね」

そしてミソラがギターで前奏を弾き始め、最初は麗音がソロで歌い始める。

～
～
～
～

ずっとずっと　迷っていた

自分が解くはずの方程式を　肝心の自分が解けなくて

～
～

次にミソラが歌う。

あなたの顔が浮かぶたび

私の思想は　かき乱されてゆく

息を吸うと、今度は二人で一緒に歌いだした。

どんなに思っているかなんて 恥ずかしくって聞けないよ
でも 私はあなたが好きだから

想いぶつけ 素直に伝えるよ
だからキミに うけとめてほしい
私の 素直な 想いを

〃
〃

2番まで歌いきると、二人はもう一度大きく礼をした。

「みんな、今日は本当にありがとう!!」

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

夕暮れの中、歓声と拍手はしばらく続いていた。
セイヤとスバルも、二人に大きな拍手を送っていた。

後日、響 ミソラと奏 麗音の二人で歌ったこの「素直に」という
曲は

あつというまに大ヒットし、わずか1週間でランキング1位となり
記録に残るほどの売り上げを出し大ヒット曲となった。

「今度は2曲目を!!」との要望の声も大きくテレビでたびたび二
人の
インタビュー映像が流されたが、二人の答えは決まって

「次に二人で歌うのは、お互いが“素直に”なった後です!!」
「
だったという。」

第20話 荒れる学園祭 〱終幕〱（後書き）

学園祭編、終了です。

歌のシーンがあまりうまく書けませんでした……

あと、「シユールディング・スター」以外は

一応オリジナルの曲です。

歌詞がめちゃくちゃですみません……

次は、メインを離れ少しゆっくりとした話を書こうと思います。

第21話 賑やかな？夕食

「ねえ、ミソラ。頼みがあるんだけど」

「？ なんですか、先輩？」

トラブルが起きたとはいえ、無事に学園祭でのコンサートを終えて
控室でゆっくりしていた時、麗音がミソラに話しかけてきた。

「ミソラってさ、今スバル君の家に住んでるんだよね？」

「はい、あと、セイヤさんも……って、まさか……」

「うん。つまり………ってわけなんだけど、ダメかなあ？」

麗音が自分と同じ気持ちを抱えていることが分かっていたので、ミ
ソラはすぐに
ハンターをとりだした。

「わかりました、きいてみますね」

そして数分後、

「先輩、オツケーだって返事が来ましたよ」

「うそ、やったあー!!」

二人はしばらくはしゃいでいた。

カタカタカタカタカタカタ……

少し離れたところで、キーボードをたたく音がしていた。

「無事、解決しましたね……さすがというべきでしょうか」

『それはロックマンのことですか？それとも』

「どちらもよ。いや、ハーブ・ノート 響 ミソラも評価するべきね」

目の前にあるリアルウェーブでできたキーボードを少女は高速でたたきながら

横にいる鳥のような自らのウィザードと話していた。

「そつでしよう？スラー」

スラーと呼ばれたウィザードは頷く。

頭に生えた一本の羽は虹色に光っており、顔は水色。

体を覆うようにしている大きな翼も顔と同じようなきれいな水色をしており、オレンジ色のラインが通っている。

尾羽に当たる部分からは通常のウィザードと同じように水色の電波が四角の形をして出てきていた。

『今回の戦い、分析はどうですか？』

スラーは自らのオペレーターに尋ねた。

「ロックマンとハーブ・ノートのコンビはなかなかのもの……いい仲間を持っているわね」

答える少女はキーボードにはいつさい目を向けず周りに表示されているいくつものディスプレイを見ながらも、相変わらずの超高速でキーボードをたたいていく。

「でも、まだ力不足……そんなところね」

車いすにもたれていた体を持ち上げると、少女 久住 美影はスラーとは反対のほうを向き、ずっとそこに立っていた男に声をかける。

「あなたもそうおもうでしょう？ シャンロン」

「ああ……」

2メートルを軽く超えるような大きく筋肉もついた体を黒い中国服にまとった男は頷いた。

その頭はスキンヘッドで、目には力強い光が宿っている。

「いちおう、サラにも報告しおいたほうがよさそうですね。

今日はもう引きあげましょう」

そして二人はその場から去って行った。

「ただいまあゝ」

学園祭から疲れて帰ってきたスバルとセイヤ。

「ああ、もうベッドにダイブして眠りたい……」

「いや、夕食は食べようよ……」

そんな話をしながら二人は疲れた体を引きずり食卓にたどりつく。

ムシャムシャムシャ

「……」

そして二人はあっけにとられてその場に立ち尽くした。

「あ、おかえりスバル君」

「おかえりなさい、スバル」

食卓にいたのはあかねとミソラ、そして麗音だった。

麗音はミソラに夕食と一緒にスバルの家で食べたいと頼んでいたのだ。

だが麗音がいたことに衝撃を受けたセイヤはともかく、スバルはそんなことでは驚かない。

彼が本当に驚いたのは……

「ミソラちゃん。……その、お皿は……」

スバルの目はたくさんのチャーハンが盛られたミソラの皿に向いていた。

その横、つまりスバルとセイヤの席であろう場所には、チャーハンが普通というよりは少し少ない量が盛られていた。

「ん？多い？」

「この二人、よく食べるからスバルたちの分が結構少なくなっちゃったのよねえ……」

その言葉に二人の目の色が変わる。

「奏!!」
「はい!?!」

セイヤが帰ってきて慌てて頭の中でこれからのことをシミュレートしていた麗音はいきなりセイヤに呼ばれ慌てて返事をした。

「ミソラちゃん!!」
「ふあ、ふあに!?!」

チャーハンを食べていたミソラは思わずそのままスバルに返事をしました。

「頼むから……」

二人の声は少し震えている……ように聞こえた。

「どうか、チャーハン分けて!!絶対これだけじゃ足りない!!」

スバルの家まで送ってもらったミソラと麗音と違い、一連の騒動で荒らされた学校の片付けや整備を手伝い、さらにたいそう混雑していたウエーブライナーに乗って帰ってきて身も心も疲れ果てていた二人は悲痛そうな表情で頼んだ。

「……はあ!?!」

もっとうとう、ロマンティックというかそんな言葉を期待していた女性二人は

見事に期待を打ち碎かれる。

「この、鈍感男どもおおお!!」

「えええっ、なんで!?!」

しばらく騒ぎが収まらなかった星河家であった。

第21話 賑やかな？夕食（後書き）

更新遅くなってすみません。

さらに悪いことに、8月の頭はしばらく更新できません。

せめて今のうちに何とか更新したいです……

本当にすみません。

「せつかくだから、散歩行こうか」
『は？いやいや、なんでまた……』
「せつかくだから、散歩行こうか」
『いや、でも、やっぱり……』
「せつかくだから、散歩行こうか」
『……ハイ』

(やりすぎた……笑いすぎたな、こりゃ)

怖くなったウォーロックはおとなしく散歩について行った。

そして二人は展望台へと向かった。

休みの上に朝早くのため、人はちらほらとしか見当たらない。
当然、星を見るための展望台に早朝は誰もいなかった。

「こうしてみると、夜明けの空っていうのもいいね」
『宇宙オタクが何を言ってるんだか……』

ブツブツ言うウォーロックだったが、幸いスバルには聞こえていないようだった。

その時、どこからか口笛が聞こえてきた。

くくく

やがてそこに、一人の少年がやってきた。

年はスバルと同じくらいで、短い黒髪にはねた前髪。

表情はとてもニコニコとされていて、あどけなさを残している。
服装は黒い服で揃えられていた。

「やあ、おはよう」

「う、うん、おはよう」

少年に挨拶され、スバルはちょっと遅れて挨拶を返した。しかしそれを気にすることなく、少年はもつと良く空を見ようと柵のところへと近づぐ。

「明るい空だね。ぼくとは大違いだな」

自分の服装のことを指してか、少年はそんなことを言う。

だがわけもわからずぽかーんと少年を見ていたスバルの横に、突然ウォーロックがウィザード・オンした。

『スバル、こいつは……マズイ』

「え、なにが？」

『気づかないのか？あのどす黒い……』

「何か言ったかい？」

少年は振り向いてウォーロックを見つけると、うれしそうにニッコリと笑った。

「あ、今日はラッキーな日だな。面白いものを見つけた」

「……！！」

その時スバルはようやくウォーロックの言っていることが理解できた。

少年のその笑顔は珍しい、かっこいいものを見てうれしそうにする子供の笑顔ではない。

その目はまるで獲物を見つけた野生の獣のように気味の悪い笑みを浮かべていた。

「ハデス……」

少年が呟くと、横に一人の電波体がウィザード・オンした。その電波体は真っ黒な電波の体をしており、目はぎらぎらと光っている。

手首には紫の腕輪、肩と背中には同じく紫のギザギザとした装甲がついていた。

「なに、この感じ……」

スバルは少年から感じる雰囲気にもれそうになっていた。

少年は笑顔にもかかわらず、背筋が凍りそうなオーラを出していた。

「さあ、電波変換しなよ」

「え？」

突然準備体操を始めた少年にスバルは戸惑った。

しかしそんなスバルのことは全く気にせず少年は再度言った。

「だから、電波変換して、って言ってるんだよ。できるんでしょ？
それでさ、ぼくと戦おうよ」

「な、なんで……」

「なんでって、電波変換した電波人間と戦う機会なんてそうそうないからね」

ありえない。

そう思って動かないスバルに少年は少しいらした声で言った。

「戦うのが嫌なの？でも、嫌だっていうんだったら……」

そしてまた気味の悪い笑顔を見せる。

「この町、ぶっ壊すよ」

「……!」

言い残してそのまま電波変換し、少年はウェーブロードにあがってしまった。

とうとうスバルは決心し、腕を空に掲げる。

「トランスコード！ シューティングスターロックマン!!」

ロックマンがウェーブロードに上がると、そこにいたのは少年が電波変換した姿。

全身黒いボディースーツの上に肩や手首などに濃い紫の装甲があり両腕の装甲から肘の装甲にかけて黒いひも状の電波がらせん状になっている。

顔の部分は薄いピンクの透明なマスクが付いており、そこからは少年がやはり気味の悪い笑顔を見せている。

そしてその周りには小さくて黒い球体が3つ浮かんでいた。

「さ、始めようよ」

「……」

ニコニコとしながらも激しい殺気を放つ少年を前に、ロックマンも構えた。

「ウェーブバトル……ライド・オン」

第22話 夜が明けて（後書き）

いきなりまた戦闘です。

ただ、これはそんなに長びきません。

あと、名前を明かすと能力がわかるので
しばらく「少年」で通します。

ご了承ください。

第23話 最悪の少年

「君はいつたい何者なんだ!？」

ロックマンの問いかけに少年は笑みを浮かべて答える。

「え、教えない」

「な……」

衝撃的な即答にロックマンは言葉を失う。

「まあ、どうしても知りたかったら、そうだなあ……」

戦いが終わるとき、君が意識を失っていたら教えてあげるよ
『てめえ、オレ達をなめてるのか!！』

ウォーロックの声に少年は肩をすくめた。

「や、だってぼく負ける気ないから。だから君も」

そして少年のにこにこした笑顔がさらに影を増す。

「死なないでね？」

「……ッ!！」

次の瞬間、少年は一気に距離を詰めて来た。

「バトルカード! インビジブル!！」

とっさにロックマンは自分の姿を消し相手の攻撃を防ごうとする。

しかし、当の少年はというと……距離を詰めただけで、最初から攻撃するつもりなどなかった。

「へえ、そんなことをしてぼくの攻撃をよけようとしていたわけか」「しまった……」

相手に自分の手を見せてしまったロックマンは一気に攻める方針に変えた。

「なら、バトルカード！ デスサイズ！！」

そういつてロックマンは鎌を少年に向かって投げつける。

それに対し、少年は右手を上げ手のひらをロックマン、いやデスサイズのほうに向けた。

すると少年の腕がまっていた黒い電波が手のひらの前で×状になるように動き、さらに

浮遊していた球体のうち一つが少年の手のひらと×状の電波の間に入り込んだ。

「じゃあ、こつちもいくよ……」

次の瞬間、球体が紫色の光を放ち始めて

「クロスシュート！！」

電波と全く同じ形をした黒いものがビームのようにデスサイズのほうに飛んで行き、デスサイズを弾き飛ばしそのままロックマンのほうへむかって行った。

「まずい！」

ロックマンは慌ててシールドでそれを防いだ。

「ふう……」

「あれ、ぼくの攻撃は次に移ったよ？」

×状のビームを防いで油断したロックマンの前には、さっきとは別の球体が浮かんでいた。

そして目の前で再び同じような紫色の光を放った。

「うわあ！……あれ？」

光に包まれたものの、特にダメージのようなものはない。

だが、ここでロックマンは気づくべきだった。

少年が両手の電波を今度は直線にし、残っていた二つの球体の光をそれぞれ電波に当てていたことに。

上からあてられた光は電波を通じて少年の両手に当たる。

すると少年の両手にはそれぞれ黒いのがった棒のようなものが握られていた。

「ふふ、やっぱり甘いね君は」

そして両手の棒をロックマンに向かって投げつけた。

「ダブルネイルズ！！」

「え！？」

不意を突かれたロックマンはとっさに顔を腕で覆い防ごうとしたが、棒は二つともロックマンの後ろの地面に突き刺さった。

そのまま少年はロックマンのすぐそばからクロスシュートを放った……。

星河家では、セイヤが目を覚ましていた。

「ふわ〜あ………」

セイヤが目をこすっている

ピンポン！ピンポン！ピンポン！ピンポン！

チャイムが猛スピードで何度もなった。

そのあまりのうるさに、ミソラや星河家に泊まることにした麗音も起き出す。

「う〜ん………」

「な、なに………」

今だ寝ぼけている二人に変わり、セイヤがドアを開けるとそこには息を切らして

長い金髪を振りみだした少女がいた。

年齢や身長は麗音と同じくらいで、顔はきれいに整っている。

しかし服装は帽子にジーンズという男の子のような服装だった。

「サ、サラ!？」

驚くセイヤだったがサラは慌てて話し始めた。

「とんでもないことになったわよセイヤ!!」

「な、なに……?」

サラのかみつくような勢いに押されたようなセイヤだったが、サラの次の言葉に表情をこわばらせた。

「あの、“最悪の少年”が……少年院から脱走したそうよ」

第23話 最悪の少年（後書き）

ついにサラ登場!!

……って場合じゃありませんね

ロックマンはいったいどうなるのか……
次話に続きます。

第24話 意外な再会（前書き）

更新遅くなって申し訳ありませんでした。

これからまたちよくちよく更新しようと思うので
よろしくお願いします。

第24話 意外な再会

「なんだって!?!」

セイヤは表情をこわばらせてそう言った。

「本当よ。でも、どうやって脱走したのか、その具体的な方法はまだ分かっていないわ。

でも、おそらく……」

「電波変換、だろうな……」

サラの言葉をセイヤが引き継ぐ。

いつのまにか二人の雰囲気はとても重たいものになっていた。だが、その雰囲気はミソラによってかき消された。

「す、スバル君!?!」

寝ぼけてうろつろしていたミソラが急に大声を上げた。

「どうしたの?」

「スバル君が……いないんです!?!」

パニックを起こしかけているミソラを見て、

「ちょっと待ってね……マリアー!! ウィザード・オンー!!」

サラは自分のウィザード、マリアをウィザード・オンした。

『どうしたのですか? サラ』

「頼みたいことがあるのよ」

マリアは白に赤が混じったような色の電波の体をもつが、体の部分を白いワンピースのような装甲で覆っており、手の部分も白い手袋のようである。

頭の部分には天使の輪のようなものが光りながら浮かんでおり、ポニーテールのように頭から背中の中ぐらいいにかけ電波が流れている。

「大至急、スバル君を探して！」

『ハイハイ』

そう言うとマリアは目を閉じて辺りの電波を感じ始めた。

次の瞬間、一瞬風が吹いた。

マリアはこの風の反響から電波体が周りに何体、そしてどのあたりにいるかがわかるのだ。

目を開けるとマリアは焦った声を出してサラに告げた。

『展望台にウォーロックの電波！！あと、そのすぐ近くに……ハデス！？』

しかも、両方とも電波変換してる！！』

『ハデスだと！？』

セイヤのハンターからデスティルがやはり焦った声を出してウィザード・オンした。

『バカな、あいつの周波数はまれにみるようなレベルで、とても人間が電波変換できるほど同調できるものじゃない！どういうことだ』

『とにかく、急いで展望台に行くぞ！』

すでに着替えていたセイヤとサラは展望台へと走って行った。

「…………へえ」

「う…………ぐ…………」

少年はすごいな、と驚いたように口にした。

「あんな至近距離から撃つて、よく生きていられたね？」

しかし、ロックマンの電波変換はすでに解け、スバルとウォーロックは

ウェーブロードから地面に倒れこみ苦しそうにうめいていた。

ウェーブロードから地上のスバルの横に少年は降り立つと笑顔を浮かべてスバルをほめた。

「いや、よくがんばりました。死ぬだろうなと思ったけど、さすがヒーローは違うね。」

そして少年はしゃがんでスバルに顔を近づけると笑って付け加えた。

「これでまあ、ぼくの勝ちだけど意識は失ってないみたいだからね。ご褒美にお望み通り名前を教えてあげるよ。といっても、本名はないようなものなんだけど……………」

ちよっと困ったように笑うと、

「一応、今はアロンで通しているんだ。二ホン人だけどね」
そういうと、スバルに背を向ける。

「ではこれで。もっと強くなったら、また遊んであげる」

次の瞬間、少年の姿は消えていた。

(ちくしょう……)

スバルは自分の弱さに悔しがっていた。

(こんな強い相手が出てきても、このままじゃ……)

「スバル！？しっかりしろ！！」

どこからか声が聞こえてきたが、もう限界だった。

スバルは目を閉じると、気絶して倒れたまま動かなくなった。

「う……ッ……」

スバルが目を覚ますと、スバルはベッドの上に寝かされていることに気がついた。

「おっ、起きたかスバル！！」

スバルが目を覚ましたのを見て、そばにいたセイヤがうれしそうに

声を上げた。

「スバル君！！よかったよう……」

次の瞬間、ミソラの超アップ。

「うわああーみ、ミソラちゃん、近いよ……」

「あ、ゴメン……」

真っ赤になる二人。

急に恥ずかしくなったのかお互い言いたくても言いだせない、そんな雰囲気になってしまっていた。

だが、その沈黙は

カシャン……サクサク、カシャン……サクサク

とのんきで聞き覚えのあるような音によって遮られた。

「え？」

「こ、この音は……」

その音はどンドンスバルたちのいる部屋に近づいていき、ドアが開いた。

カチャ……

「ん……あれ？あ、すみません、部屋を間違えました。」

『ぼんやりしているからですよ』

セイヤを見て入ってきた入院患者の服を着た青年が謝る。

その手には食べかけのうまい棒。脇に松葉づえを挟んでいる。

第25話 素敵な方

スバルの病室に入ってきたのはかつてディーラーとの戦いで死んだと思われていた

サテラポリスのエース、暁 シドウだった。

『……ってことは、まさかアイツも……』
『呼びましたか？ウォーロック』

シドウの横に白い体をもつシドウのウィザード、アシッドが呼び掛けに応え
ウィザード・オンした。

『チツ、やっぱりめえも無事だったのか』

舌打ちするウォーロックにシドウは肩をすくめた。

「まあ、無事ってわけでもなかったんだけどね」

「暁さん、いつたいあの爆発の後、何があったんですか？」

「ああ、それは……」

シドウが説明しようとしたその時

「ちょっと、話の腰を折るようで悪いんだけど……」

おずおずと話に入ってきたのはセイヤだった。

「この人……誰？」

セイヤの問いにミソラが答える。

「あっ、この人はサテラポリスの暁 シドウさんです。

アシッドと電波変換して、アシッド・エースになるんですよ!」

「ちよつとちよつと、一応それは機密事項……」

「ああ、いいですよ、それなら知っていますから。……トランスコード」001」、ですよね?」

秘密にしようとしたことをあっさり知っていると聞いたセイヤに対し、シドウは疑いの目を向ける。

「なぜ、知っている?そして、君は誰だい?」

「俺ですか?俺はスバルの家に現在居候している一介の高校生です」

スバル、という言葉でシドウの顔から緊張が消えた。

「なるほどね、そういうことか。じゃあ、本題に戻るぞ」

そう言って、シドウは話し始めた。

「あの爆発で、俺はかなりのダメージを受けると同時に、ものすごい量のノイズを浴びて

ノイズウェーブに飛ばされたんだ。そこでダメージが回復するのを待ちながらエースプログラムで少しずつ浴びたノイズを無害にしていくのにかなり時間を費やした。

そして、何とか現実世界に戻り、この病院に入院してリハビリをしていた、というわけだ。

……それにしても、スバルこそどうしたんだ?そのひどいけがは」

スバルはミソラと顔を見合わせると、頷いてゆっくりと口を開いた。

「実は……」

その時、ドアをノックする音と共に外から声がした。

「入るわよー」

そう言うて入ってきたのはサラだった。

「セイヤ、そろそろいいかしら？」

「ん……いや、その前にスバルの話聞いておきたい」

その言葉にサラは頷く。

「そうね、私も聞いておきたいわ」

『あの少年と……ハデスのことについて、ですね』

サラのウィザード、マリアがウィザード・オンして確認した。全員の視線を浴びていることに気付くと、スバルはできるだけ詳しく説明した。

アロンと名乗った少年、彼のウィザードであるハデス、そしてロックマンが

手も足も出なかったハデスと電波変換したアロンの力……すべてを聞き終えた全員の顔はみな沈んでいた。

「厄介な相手だな……」

「また、スバル君が戦うことになるなんて……」

セイヤ、ミソラがそれぞれ呟く。

「スバル、その少年のことなんだが……」

ふと、シドウがスバルに尋ねた。

「スバル、いやウォーロックでもいい、なんというか、その……彼の雰囲気は

どんな感じだった？」

「え？」

首をかしげたスバルに変わり、ウォーロックが答える。

『相当ヤバい雰囲気だったな。ただ、気になるのはあいつの感情からFM星人がものすごく引き寄せられるような深いコドクの“闇”を感じたことだ。それに、なんかあのソロとかいうやつと似たような感じだった』

「やっぱり、そうか……ありがとう」

礼を言うシドウの顔はかなり深刻そうだった。

(どうやら、報告にあったとおりみたいだな……)

一方、サラとマリアは納得したような顔をしていた。

「やっぱり、というところかしら」

『そうですね。そろそろ行きましょうサラ、セイヤ。ではまた会いましょう、その白いウィザードさん』

サラとセイヤを促すと、マリアはアシッドに手を振って外に出て行った。

彼らが出て行った後、

「今の女の子、どこかで見たような気がするんだけどなあ……………」

再びつまみ棒を食べながら考え込むシドウの横でアシッドがぼつりと呟いた。

『今の、ウィザードの方……………』

「ん？」

シドウ達はアシッドのほうを見る。

『なかなか……………素敵な方でしたね』

『……………!?!?』

アシッドの言葉に、その場にいた全員が驚愕する。

「アシッド、お前……………」

驚きのあまりつまみ棒を手から落としたシドウが口を開く。

『何ですか?』

「お前……………」

まだノイズが残っているんじゃないのか? いや、それともどこかのシステムに異常が……………」

『……………怒りますよ? シドウ……………』

第25話 素敵な方（後書き）

まさかのアシッドです（笑）

少しでも遅れを取り戻したいので
今日は2話更新します。

第26話 対策会議と暗い路地裏

とあるレストランにて。

カタカタカタカタカタカタ……

「遅い、遅い、遅い……」

「いらいらするな」

キーボードをたたきながらブツブツ言っているのは車いすに座っている美影である。

その横では、美影をなだめるシャンロンが目の前にある料理をゆっくりと口に運ぶ。

「だが、もったいない。冷めたら料理が台無しだ」

そこへ、のんきな声がかかる。

「ゴメン、おそくなった」

「まったく、ちゃんとメール読んでよね……」

美影の向かい側にサラ、シャンロンの向かい側にセイヤが座る。

「遅いで二人とも!!何しとったんや!!」

美影が突然叫んだので二人はびっくりして美影を見た。そしてさらに美影の叫びは続く。

「このアホ!!特にセイヤ!!メール見とらんってどういふことや

「!!」

「や、その……」

メールには大至急集まってほしい、という内容が書かれていたのだが
セイヤはスバルの看病をしていて気がつかなかったのだ。

「もういいだろう」

言い訳の仕様もなくあたふたするセイヤに対し、シャンロンは落ち
着いた様子で
美影をなだめた。見事な貫録がでていた。

「それより、用は何なの？」

サラが尋ねると、落ち着いた美影は全員を見渡して（セイヤだけは
睨みつけて）
再び口を開いた。

「この前、セイヤの学校で起きたクロウの事件。そして今回新たに
わかった

“冥王”ハデスにオペレーターができたという事実。

この二つが実際に目に見える形となった以上、対策を考えたほうが
いいと思っただんです」

そう言いながら、美影は再びキーボードやディスプレイを表示して
猛スピードでキーボードをたたき始める。

「セイヤ私だけじゃ少し不安だから、もう一人、希望になりうる口
ツクマンの周囲に
配置することにしました」

「ハイハイ！！私が行く！！」

サラが手を挙げて立候補したが

「ダメ」

即座に却下された。不機嫌になるサラを見てセイヤは苦笑した。

「星河スバルの家にはセイヤ、学校には私がいるから家でも学校でもない場所に配置すると考えると……」

ブオン

次の瞬間、拡大されたディスプレイが机の上に表示される。

「今、こういうのを考えています」

全員がそれを見て

「なるほど……すごいなあ」

「悪くない」

「……まあ、いいわ。それにしてもさすがね、あなたは」

その内容に全員が賛成した。その様子を見て美影はにっこりとほほ笑んだ。

「ところでね」

そこでセイヤがきよろきよろして辺りを見渡した。

「ジャンは来ないのか？」

その問いにシャンロンが腕を組んで答えた。

「あいつは今、アメロッパだ」

同時刻、アメロッパのとある路地裏で。

「うっ、うわああああ!!」

派手な服装・髪型をしいわゆるゴロツキの男が思いっきり突き飛ばされ、

ゴミ箱に激突する。

ガツシャアアアアン!!

派手な音を立てて、ゴミ箱はあたりに中身をぶちまけた。倒れたゴロツキの周りには、同じようにやられて苦しそうにうめく5、6人のゴロツキたちが倒れている。それを黒いコートを着た少年が見下ろして、いや見下していた。

「……弱い。弱いくせに、ピーピー騒いでくだらないことしてんじやねえよ」

そしてちらりと横を見る。そこでは一人の女の子が震えて泣いていた。

実はさっき、ゴロツキたちはこの女の子を囲んでお金を出せと脅迫していたのだ。

そこへ通りかかった少年を、ゴロツキたちが見つけカモにしようとしたところ

見事ぼこぼこにされ返り討ちにされた。というわけだ。

「お、覚えてるよ!!」

ゴロツキたちが逃げて行った後、女の子が少し落ち着きを取り戻して

「……ありがとう」

涙目でそう言ったあと少年に頭を下げ帰って行った。

その後ろ姿を見送って少年 ジャンは大きく息を吐いた。

『意外やなあ。お前が人助けとはなあ。』

やっぱり、ニックやほかのやつらの影響やろうなあ』

「そう、だろうな。ニックやシャンロンには初めて肉弾戦で負けたしセイヤ、サラ、美影はいいやつだしな……オレとは違う」

かなり軽い感じの口調でしゃべりながら、ジャンの横に彼のウィザードがウィザード・オンした。

銀でできたようなリングに4つ、等間隔に黄色い電波が固まって球体のようになりくっついている。その4つの電波のうち一つに赤い目、口がニタニタした表情を浮かべている。

「そつだろ、ギール」

ジャンが問いかけると、ニタニタした顔と目は別の電波の部分に移った。

『ああ、その通りだねえ。』

まあ、お喋りはここまでにしようかあ。お客さんだよお」

ジャンが振りかえると、そこには一人の少年が立っていた。緑色の紙をした、おとなしそうな表情の少年。その少年は驚いた様子で言った。

「ゴロツキをどうにかするように依頼されていたんですが……あなたがゴロツキさんですか？」

至極真面目な質問に思わずジャンは吹き出してしまった。

「クツ、アハハハハハ！いや、ゴロツキにさん付けってなんだよ。ちなみにゴロツキは俺がぶちのめしたら尻尾を巻いて逃げて行ったぜ！アハハハハハ！」

あまりに笑い転げていたので、ジャンはだんだんと少年の表情に暗い影が差していくことに気付いていなかった……ように見えた。

「1Jの……」

そして少年はこぶしを握りつかみかかろうとして走り出す。

「調子に……乗るなあッ！！」

しかし、つきだした手はあっさりとかまれ、一気にねじられる。

「うっ……」

「殺気丸出しにしすぎ。最初に見たときはものすごく見事に殺気のない、あどけない少年を演じていたが……」

ジャンは少年に賛辞の言葉を贈る。
いろんな危険な事態をくりぬけ、殺気を持つ人間はすぐにわかる
ようになっていたからこそその賛辞だった。

「へっ、あんなアマちゃんが殺気など持つわけないからな……」

少年はにやりと笑うと叫んだ。

「電波変換!!」

まばゆい光が走るとともに、少年の姿が二人に別れた。

一人は白、もう一人は黒い体をしていた。そしてその腕は二人とも
片腕が太くて黄色い腕をしていた。

「いくぞツカサ!!こいつをぶちのめしてやる!」

「駄目だよヒカル……」

黒いほうは今にも襲いかかろうと眼をギラギラさせていたが一方で
白いほうはそれを必死に抑えようとしている。

「どういうことかな?一人が電波変換して二人になるなんて」

『教えてやるうか?』

言い争っていた二人の間に一体の電波体が現れた。体はギールと同
じく黄色い電波だが、

そこには顔が二つ付いている。

『こいつは二重人格者なんだよ。メインがツカサ、もう一つの人格
がヒカルだ。そして元、ふたご座のFM星人であるこの“雷神”ジ
ェミニ二様と電波変換してジェミニ・スパークとなるんだ』

『雷神、やと?』

ジェミニの一言に反応してギールが姿を見せる。

『一応わいも雷神として名乗ってるんでなあ。一つ白黒つけたほうがええ』

「それもそうかな」

そう言ってジャンは叫んだ。

「いくぞギール!電波変換!!!」

次の瞬間、ジャンがいた場所に突然雷が落ちた。

第26話 対策会議と暗い路地裏（後書き）

新しいオリジナルキャラ、ジャンの登場です。

少しオリジナルキャラ多すぎかな、とは思いましたが
もっと出す予定です……

どうかご了承ください。

次回、ツカサ（&ヒカル）VSジャンです。

第27話 雷神VS雷神

雷が落ちたところには、一人の電波人間が立っていた。

まるで羽衣のように電波をまとい、足の部分にも電流が走っている。背中にはギールのような巨大な輪があり、4つの丸い太鼓のようなものがついていた。

顔はジャンだが、頭の部分にもやはり電気が角のようになっていた。

「ふうつ。いつもいつも思うんだけど……」

そして自分の足元を見る。真っ黒に焦げた地面を。

「電波変換するたびに雷を落とすのは、さすがにやめてくれないか

……」

『あかん。演出も大事やからなあ』

ため息をつくのと、その電波人間はゆっくりとジェミニ・スパークのほうを向いた。

「では、見せてやるよ……。このギール・ボルトの力をね」

「ふん、喋っているひまがあるのか!」

いつの間にかジェミニ・スパークBがギール・ボルトフラッシュの後ろで腕を剣に変化させていた。

「行くぜ、エレキソード!!」

しかし、完全に決まったと思ったその剣は完全に空を斬る。

思いがけないことにジェミニ・スパークBは目を疑う。

「どづいつ……」ことだ
「それは、こづいつことだ」

ジエミニ・スパークBの横に、電気のように体を変えたギール・ボルトが空中から降りて着地した。少し肩をたたくと口を開く。

「この通り、電速……まあ、そんな言葉あるか知らんが、とにかく、それくらい早く動くこうと思えば動けるんだ。で、さっきの剣もかわしたわけ。言つたる？
お前は殺気を丸出しにしすぎなんだ」

少し得意そうなギール・ボルトに向かって声がかけられる。

「でも、君も油断してるでしょ？」

そう言ったジエミニ・スパークWが太い腕をギール・ボルトに向かつて構える。
ホワイト

「ロケットナツクル！」

ジエミニ・スパークWがそう叫ぶと腕がギール・ボルトの方へ勢いよく飛んで行った。

「ああ、これは避けられないな」

そう言うとギール・ボルトは左手を握り締めた右手に添えると、一気に力を込める。

すると右手に大量の電気エネルギーが凝縮され光り出す。

「スパイクナツクル！」

ジエミニ・スパークWのロケットナツクルをギール・ボルトは電気エネルギーを込めた右こぶしで殴りつけた。バチッ！と鋭い音がしてロケットナツクルは弾き飛ばされる。

「くっ……ヒカル！」

思った以上の力を見せるギール・ボルトにジエミニ・スパークWはジエミニ・スパークBを呼んだ。

「一気に攻めきらないと、負ける……！」

「おう、やっと本気出してきたか、ツカサ？」

言いつつもジエミニ・スパークBはジエミニ・スパークWの元へ移動する。

「いくぜ」

そして二人は各々の黄色く太い腕を合わせる。

「「ジエミニサンダー……！」」

合わさった腕から強烈な電撃がギール・ボルトに襲いかかった。

「電撃だから、避けられないだろう！」

「これで、ぼく達の勝ちだ」

肩で息をしながらも、二人は勝利宣言をした。

ギール・ボルトの指先に、電気エネルギーが集中する。

「これが電撃というものだ!!!ギールサンダー!!!」

そして一気にギール・ボルトは電撃を放った。

ギールサンダーはジェミニサンダーよりもはるかに大きく、また黄色いジェミニサンダーと違い青白く光っていた。

「ぐ……!?!」

「うわあああああつ!!」

ギールサンダーをまともにつけ倒れこむ二人のジェミニ・スパーク。そのダメージで電波変換が解け、一人の姿に戻ったツカサにギール・ボルトは話しかけた。

「これで俺の勝ち、ってわけだ」

『これこそ雷神の力。そう言っただろお?』

ツカサは何も言えなかった。

そんな彼に手を振ると、

「じゃあな。機会があればまた会おう」

ギール・ボルトは再び電気のような姿になると“電速”で上へと飛び上がりすぐにどこかへ猛スピードで言ってしまった。

「くう……強かった、ね……」

「そうだな……クソッ」

ツカサの呟きにヒカルはツカサの心の中で返事をする。

あとには、負けを悔しがるツカサが一人残されていた。

第27話 雷神VS雷神（後書き）

戦いのシーン、結局うまく書けなかったうえに
えらくあっさりしたものになってしまいました。

次回は、美影の計画が始動します。

その家の外では、ウエーブロードを通ってアメロッパからやつと到着したギール・ボルトがひきつった笑いを浮かべ立っていた。

まあみなさんお気づきの通り、先ほどの雷はギール・ボルトである。

「また、無駄に雷落としやがって」

『気にするなよお。せやけど……』

ギール・ボルトは家を見上げる。

「ここ、確か美影の家だよ……。オレは間違えているような気がしてたまらないんだが……」

そう思うのも無理はない。その家からは狂ったように笑う声がずっと聞こえてくるのだから。

結局、ため息をつくときール・ボルトは家に背を向けた。

「……もう今日はホテルでいいや……」

翌日。

「はあ、はあ、はあ……」

スバルは必死で走っていた。

……家に忘れた学校の宿題を取りに帰るために。

別にそこまで急ぐ理由なんてない……はずだったのだが、よりによって今日だけは違った。

先生達が会議があるということで、通常より早く完全下校ということ

とになっており、生徒が入れないよう校門を閉める、というのだ。つまり。急がないと取りに帰っても校門がしまったらアウト。スバルは「宿題未提出」ということになってしまふのだ……。

『急げスバル！あと10分！！』

「うおおおおおっ！」

やっと家に戻って宿題を手にとると、スバルは来た道を全力疾走で戻り始めた。

……そして数分後。

「な、何とか間に合った……」

スバルは疲れ果てよろよろとして家に再び帰っていた。だがそれで注意が足りなかったのか、スバルの足が石につまずいた。

「あっ！」

バランスを崩し転びそうになるスバルを

「おっと！」

とっさに後ろからつかんでスバルが転ぶのを防いだのはセイヤだった。

スバルがセイヤにお礼を言った後、二人は一緒に家に戻って行った。

「さっきは危なかったなあ。これからは気をつけるよ？」

「ハイ……」

ロックマンとして日ごろ動くことが多いからか、家に着くころには体力は結構回復しており息も落ち着いていた。家に着くとドアを開け元気に叫ぶ。

「ただいまあ〜！」

「あ、おかえり」

そう返事したのはリビングですに座り本を読んでいた……セイヤだった。

「……………」

「……………」

「……………あれ？」

目の前にはセイヤが一人。

そして横にもセイヤが一人。

……………どう考えても、おかしい。

「なっ！」

「なんで俺がもう一人いるんだ！」

リビングにいたセイヤは立ち上がると叫ぶ。

「オレが本物だぞ、スバル！誰だこの偽者は！」

「違う！俺が本物だ！」

負けじとスバルの横にいたセイヤも言い返す。スバルはというと完全にわからなかった。

「ど、どつちなの……」

睨みつける二人のセイヤだったが、ここでリビングにいたほうのセイヤがあることに気付く。

「あ」

そしてハンターをとりだすと前に出した。

「ウィザード・オン」

当然、セイヤのウィザードのデスティルがウィザード・オンする。それを見ると

リビングにいたセイヤはもう一人のセイヤに詰め寄る。

「さあ、お前のウィザードを見せてみる！」

「……っ!!」

もう一人のセイヤの顔に初めて焦りが浮かぶ。

(すごい、兄さん……)

スバルが感心していると、偽者のセイヤの体が揺らぎ出す。

まるでテレビのチャンネルが変わった時のように、ザザ……という音を立て偽者は姿を変えた。

やがて変化が止まる。

「え!？」

その姿は女の子だった。

赤茶色の髪の毛をしており、先がくりんとカールしている。

目は大きくぱつちりと開いており、瞳の色は黒。

黄色い服に白いミニスカートをはいていた。背はスバルと変わらな
いか少し低いのである。

『ば、ばれたのです……』

次の瞬間、ダッシュで逃げる偽者。

『待て！！追うぞスバル！！』

「ええっ！」

ウォーロックがウィザード・オンして飛び出していったのをスバルは慌てて追いかけて行った。その様子をぼかんと見ていたセイヤは、
ここであることを思い出した。

それは先日、美影が見せたディスプレイの内容。

「あー、なるほど。そういうことね……」

『お前も追いかけていないのか？』

デスタイルの問いかけにセイヤは笑って首を横に振った。そしてデ
スタイルに説明する。

「別に構わないさ。あれは……美影が送りこんできたやつだ」

第28話 偽者騒動（後書き）

またもや新キャラです。

この人物について、すでに何かに気づいた人もいるのではないでしょうが。

でもわかりやすいかな……。

次回は鬼ごっこ（？）です。

第29話 追う者と追われる者

『はあ、はあ、はあ………』

なんとか星河家から逃げ出した女の子は全力で走ったので肩で息をしていた。

『疲れたのです……。これでも電波体なのに………』

そう、女の子は実は電波体。名前はマダラといった。

『下校途中の星河スバルに接触するという作戦はうまくいったのです。でも、まずはセイヤに化けて様子をうかがおうとしたのは失敗でした……。まさかマダラより先にセイヤが家に帰っているとは思わなかったのです………』

「見つけたよ！」

マダラがブツブツとつぶやいて今回の反省をしている間に、いつの間にかスバルとウォーロックはマダラに追いついていた。マダラはハッとして振り返る。

『しまった、油断したのです………』

と、そこへウォーロックがウィザード・オンする。

『おいてめえ、いったい何者だ！てめえがセイヤに化けた時、オレは何の違和感も感じていなかった！あれはどういう………』

『ヒッ！………』

怒ってどなるウォーロックだったが、それを見ていたマダラが小さく悲鳴を上げた。

その反応にあれ？とウォーロックは首をかしげる。

(おい、こんな反応したやつが前にもいたよな……?)

少し考えていたウォーロックだったが、それがだれかに気付くことになりとした笑みはその顔に広がった。

『な、何をするつもりですか……?』

その問いには答えず、ウォーロックは少しマダラに近づく。するとマダラはウォーロックに予想通り、ウォーロックが近付いてきた分後ろに下がった。

『く、来るなです……わた、私も本気を出すのですよ……?』

『……………』

さらに近づくウォーロック。

『だから、来るなと言っているのですっ……………』

自分の読みが当たっていると確信したウォーロックは大きく口をあけると

『ガオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

『ひぎゃああああっ!!』

思いつきり吠えた。マダラもそれに対し見事な悲鳴を上げる。

そしてまたダッシュして逃げ出した。今回は先ほどと違い、逃げた

理由はただ怖かっただけなのだが……とにかく逃げた。

『聞いてないのです……。あんなに怖いウィザードがいるなんて聞いていないのですよ……』

マダラが実際に聞いたのは

「星河スバルのウィザード、名前はウォーロックって言うんだけどそのツメはなかなか強くて、実際それなりの実力はあります。ただ、少し気性が荒くてすぐケンカ腰になりますけどね」

ということだけだった。

『気性が荒いといつても、まさかあんなに怖いだなんて……』

逃げながらまた泣きそうになるマダラ。頭を振るとマダラは自分に言い聞かせるように呟く。

『そうだ、マダラなら逃げることは簡単なのです。マダラにはこの力があつたのです！』

後ろにいるスバルたちが離れていることを確認すると、マダラは自身の姿を別人に変えた。

そしてそのまま人込みの中に紛れる。

『これで見つからないのです！また今度、遊びましょうね』

勝ち誇って呟くマダラだった。

一方、スバルたちはマダラらしき人影が人ごみに紛れるところまでは見ていたが、人ごみの中にマダラの姿を見つけることができなかった

った。

「おっかしいなあ……………」

『あの電波体、どこ行きやがった……………』

ウォーロックの言葉にスバルは驚く。

「ええっ！？あの子、電波体だったの!？」

『よく考えてみるよ、普通の人間が他人にああも簡単に変身できるか?』

変装するならまだしも、ああも簡単に変身することはまずできない。ウォーロックの主張にスバルは頷いた。

「なるほどね……………。確かにウォーロックの言うとおりだ」「
『だが、これからどうする……………?』」

早くしなければ偽者が逃げてしまつが、追いかけてようにも姿が見当たらない。

マダラはすでに姿を変えたので当然と言えば当然であるが。

「どっしよっ……………ん?」

ここでスバルはあることに気がついた。

(までよ?あれをうまく使えばいいんじゃない……………)

そう考えたスバルは“あれ”を手に持つ。

そして……………

『なるほど、その手があったか！やるじゃねえか、スバル！』
「見つけた……！」

マダラを見つけ出したスバルは後を追って走り出した。

少し先のほうで、一人のサラリーマン風の男が歩いていた。その表情はどことなく疲れているような表情だった。

『もう、見失った頃ですね……』

そう、この男こそマダラが変身した姿だった。

(あとはこのまま帰るだけなのです……。あー、疲れたのです)

ほくそ笑む男の背に誰かの手が当たる。

『ん？』

「追いついたよ……！」

そこにいたのはスバルだった。まいたと思ったスバルが目の前にいるという事実にはマダラは激しく動揺する。

(な、なんでマダラだとわかったのですか……？)
『な、なんのことがね？』

しらばっくれる男の前にウォーロックがウィザード・オンする。

『がおおおっ！！！』
『にゃあああっ！』

驚きのあまり変身が解け元の女の子の姿に戻る。

『やっぱりな！』

『し、しまったのです………』

また走り出して逃げるがスバルはマダラが変身してもすぐにどこにマダラがいるのかあててしまう。マダラは肉体的にも精神的にも疲れていった。

『ど、どうして変身が見破られるのですか………？』

第29話 追う者と追われる者（後書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。

次回、追いかけて決着です。

第30話 賢い使い方（前書き）

前話から出てきている”あれ”っていったいなんでしょう？

この話で答えは明かしますが興味があれば考えてみてください。

第30話 賢い使い方

『ちくしょう、また見失ったぜ!!』

「逃げるの速いね……」

スバルたちはマダラを何度も追い詰めてはいたが、そのたびに逃げられていた。

『お前がさつさと捕まえないからだ』

「そうはいつでも……女の子じゃん」

『かーっ、このお人よし……』

ウォーロックはスバルをあきれたような目で見た。実際あきれていた。

『とにかく、もう一度追いかけるぞ。早くしろ』

「うん、わかった」

そう言ってスバルは“あれ”を使う。

「見つけたよ。今度は……あの男の子だ!」

そういつて自動販売機をじっと見ている男の子に声をかける。

「……ねえ、そろそろおとなしく……」

『するわけにはいかないのですよ!』

さっと動いた男の子はまたもや人の多いほうへ走っていく。

『このバカ！また逃がしたのかよお！』

「一応、説得しようとしたんだけど駄目だった……」

ため息をついたスバルは再び走って行った……。

『それにしても、どういうことですか……？』

一方のマダラはというと、いまだにスバルが自分の正体を見破る、その方法が分からなかった。

『もしかすると、この町に住んでいないでたらめな人間の姿になったからかもしれないのです……。そうだ、きっとそうなのですよ！』

マダラは姿を変えると逃げるのをやめた。そして逆にスバルを待つ。

『これなら、どうですか……？』

「あ、あれ？」

何とか追いついた、と思ったらマダラの姿がない。

「おっかしいな……」

『まさか、逃げられたのか！？』

と勝手に責めるような口調になるウォーロック。

「いや、そんなはずは……」

「あれ？スバル君？」

首をかしげるスバルの前に、ひょっこりと姿を見せたのはミソラだった。ミソラはいつもの屈託のない笑顔で笑いながら話しかけて来た。

「ねえ、何してるの？」

「ああ、今はね……」

そういうスバルの顔は少しにやついていたが、当のミソラは気づかない。

その時、ウォーロックが口を挟んできた。

『……おい、気づいてるだろ、スバル？』

「うん」

「？」

二人が何を言ってるのかわからないミソラにウォーロックが

『オレは今、あのいやな感じが全くしない』

そう嬉しそうに言った。さらにウォーロックは続ける。

『おい、お前……ハーブはどうした？』

「……………」

急に黙りこむミソラ。その顔からだんだん血の気が引いていく。

「えっ、えっと……ハーブ？琴？ええと、これ？」

そう言っただけで見たのは背中に背負っていた……“ギター”だった。

『……もう、決定的だな……』

「だね……」

ミソラはもう何も言えず、手が震えていた。

『うっ……』

そしてミソラの声が少し変化していく。そんな相手にスバルはゆっくりと話し始めた。

「もう、ばれたってわかってるよね？偽者さん」

『ミソラに変身したのは失敗だったな！お前は人間のふりを完璧にしようとしすぎて、

逆にウィザードの電波まで消しちまったんだよ！』

「さらに言つとね、君が誰に変身しようとも絶対にわかるんだ」

そう言っただけで、スバルはかけていたビジュライザーをはずして見せた。

「これ、電波世界が見えるようになるメガネなんだけど、これをはけるとウェーブロードや電波体が見える代わりに、普通の人間は見えなくなるんだ」

その言葉にハツとした表情を見せるミソラ　　もとい、マダラ。
その表情を見てスバルはゆっくりと微笑む。

「もうわかったでしょ？これをかければ、君が人ごみに逃げようと普通の人間は見えなくなつて、電波体の君が変身している人間が浮き彫りになる、つてわけ。そして今、目の前の君も……」

再びビジライザーをかけなおすスバル。

「はっきり見えているんだ。これをかけても、かけなくても」

『くっ……そういうことだったのですか……』

悔しがるマダラの前に

『てめえの負けだあ！！』

『いやああああああつ！！』

ウォーロックがいきなりウィザード・オンし、それにびっくりしてマダラは悲鳴を上げた。

……ミソラの姿で。

「なんだ？」

「あれ、ミソラちゃん？」

「でも、声なんか違ったよね？」

「つておい、今悲鳴あげたんじゃないか？」

周りが気づいてざわざわとし始める。

「何やってるんだよロック……」

『わ、悪い………つて見る、スバル！』

スバルがウォーロックの指さすほうを見ると、ミソラの姿はいつの間にか揺らいで

一体のウィザードの姿に変わっていた。

女の子の姿になった時の髪の色のような赤茶色の体で、一本ある尻尾の先は白くなっている。

瞳も女の子の姿と同じく黒で、4本の足先からは水色の電波が炎のように揺らめいている。

「これが、本当の姿なんだ……」

『ふえええええん！』

感心するスバルは無視して泣きながらマダラは逃げていく。その様子をポカーンとしていたスバルにウォーロックが怒鳴った。

『おい、早く追いかけるよ！また逃げられるぞ！』

「あ、ごめん！」

走り出したスバルはマダラが曲がった角を同じように曲がると急に立ち止まった。

そこにいたのは一人の少女。

車いすに座ったその少女の膝の上で、マダラが小さく丸まって震えていた。

『ウォーロックやっぱり怖い……。ウォーロックやっぱり怖い……。』

何度もそう呟いているマダラをちらりと見ると、美影は少し凄みの利いた声でスバルに言った。

「この子をあまりいじめないでくれる？私の大事な子供なんだけど」

第30話 賢い使い方（後書き）

と、いうわけでビジライザー使ってた。

この話、というかエピソードは流星3やってて思いついたことで
どうしても変身するキャラが必要になり、生まれたのがマダラです。

マダラは今のところ唯一、この話を書いている途中で思いついたキャラです。

今回はもう少しマダラについて説明を加えるつもりです。

第31話 マダラ

膝の上で震えるマダラの頭をやさしくなでながら、怒気を含んだ声で美影はスバルに質問する。

「一体どうして私の大事なマダラが泣いているのか、説明してくださいませんか」

鋭い視線にひるむスバルだったが、代わりにウォーロックが反論する。スバルが目でやめたほうがいい、と合図していることにウォーロックは気づいていなかった。

『どうしたもこうしたも、そいつ知り合いに姿を変えてスバルと一緒に家に入ろうとしたんだ。怪しむのは当然じゃないのか？』

「ふーん」

ウォーロックのすじが意外と通った反論を美影は一言で一蹴した。そして再び美影が攻撃する。

「じゃあ、いくら怪しいからといって相手が泣くほど怯えてもたためらわず追いかけることはもともと相手に非があつたらしいって言うのですか？違うというのなら、あなた達にとやかく言われる筋合いはありません」

『むう………』

美影の反論には何も言えず、ただ歯を食いしばることしかできない。

「まあ、こちらにも非があるのではないか、という主張は納得でき

るものがあります。

それならば私がこの子について説明しましょう」

すかさずスバルが手を上げる。

「質問！さつき自分の“子供”って言うてたけど、あれってどういう意味？」

「簡単なことですよ。私がマダラをプログラミングした。それだけのことでありませんか」

「ええっ！」

さらっと自分がウィザードとなる電波体を作ったことを口にしたが美影本人は

なんとも思っではないらしい。

しかし、そんなことできるわけない一般小学生であるスバルは大いに驚いた。

一方、やっとウォーロックが我慢できるほどに回復したのかマダラは美影の膝の上から床に飛び降りる。

『もう、怒ったのですよ……。本格的にやっつてばこぼこにしてあげるのです……』

「こーら、マダラ。あなたもあなたです。さっさと帰ってくればよかったのに」

臨戦態勢になるマダラには優しく注意する美影。

『だって、あいつら姿変えても見破る道具を持っていたのです。だからずっと追いかけてまわされていたのです……』

またウォーロックに追いかけられたことを思い出したのだろう、マダラの目に再び涙があふれてくる。

「それは大変だったわね……」

美影がマダラをなだめていると、突然着信音が鳴った。

「電話？……ああ、セイヤですか」

「え？」

スバルが驚いて声を出したのにはスルーし、美影は画面を出してセイヤと電話が出来るようにする。

「おう美影。とうとう完成したみたいだな、例のウィザード」

実はレストランに集まった際、美影がみんなに見せたものは……もちろん、そんなことがこうもうまくいくとは思っていなかったが……マダラ的设计図だったのだ。

「ええ、完成しました。でも、せっかくスバルの警備をさせようと思っただらさんざん怖い思いしたみたい」

「そうだな、ウォーロックがものすごい勢いで追いかけていったからな」。

でもさ、それでいろいろ成長したんじゃない？主にスピードとかさ。

「確かに、少しはトレーニングになったのかもしれない……」

嫌そうながらもセイヤの意見に肯定するマダラ。

「あと、スバルいるだろ？飯は俺が用意しとくからゆっくり帰って

おいでーって言うておいてね」

そう言うて電話は切れてしまった。

「やれやれ、自分から切りましたね……」

ため息をつく美影にスバルは慌てて尋ねる。

「ちょ、ちょっと！なんで兄さんから電話が来るの？もしかして知り合い！？」

パニックになりかけているスバルの質問に美影は丁寧に答えていく。

「まあ知り合いといえば、そうなりますね。といっても詳しく説明するのは難しいんですが……」

そこへウォーロックが割り込んできた。ずっと何もできなかったので相当いらいらしているようだ。

『大体、目的は何なんだよ！それがわからないまま協力するなんてゴメンだ……』

『そこまでです』

美影に近づいていったウォーロックの前に、今度は美影のウィザード、スラーが現れ道をふさぐ。そしてスラーは続けた。

『どつしても、というのなら私と美影で相手になりますが……』
『つっ……』

スラーが発した雰囲気のようなものにのまれウォーロックは黙って

しまった。それを確認するとスバルはウォーロックをウィザード・オフシ美影達に言った。

「とりあえず、今日はこれで帰るよ。また明日ね」

そう言つてスバルは家に帰つて行つた。

残された美影達は少し話をする。

「どうだった？感想は」

『やっぱりきてよかつたです』

その答えに頷くと美影はマダラに新しい仕事を伝える。といっても内容は明日からスバルの警備を目立たないように行つ、というだけのもの。

「とりあえず、明日も引き続きスバルの周りも確認しておいてね」
『はい』

一方、スバルたち

『あの、最後に出て来たウィザードだけだな……』
「どうしたの？」

スバルの問いかけにウォーロックはゆっくりと答える。

『あいつ、相当な力を持つてるぜ。でも、なんか電波変換してもそれほどの実力しかない、って感じがしたぜ』

「そっか」

スバルは空を見上げながら考えていた。

(セイヤ兄さんに美影ちゃん、そしてサラさん……一体、何が狙い
なんだろう……?)

第31話 マダラ（後書き）

またもや久しぶりの更新です。

最後にスバルがいった通り、そろそろオリジナルキャラの目的とかを明確にしていかなきゃかなー、と思っています。

物語を進めるためにも、次回はある二人に登場してもらいます。

（すでにこの話で登場済みの二人です）

第32話 ありえない再会（前書き）

ついに11700アクセス突破です！

本当に読者の皆さん、ありがとうございます！

第32話 ありえない再会

夢を見ていた。

なぜ夢とわかるかというと、今日の前にいるのは失った親友だったからだ。

「一体どうということだ!!説明しろ!」

そう言っつて俺の胸ぐらをつかんで叫ぶ。

「オマエは知っていたんだろっ!なぜ俺に言わなかった!

この計画は危険すぎると、なぜ!せめて言っつてくれれば……あいつは……妹は……」

言えるわけがない。

上から徹底して戒厳令が引かれていたのだ。だからこの計画に直接関係していない限り、言いたくても言えなかった。

「おとなしくしろ!命令違反で逮捕する!」

「なっ!この、離せええええ!!」

命令に背き、勝手にこの施設に入り込んでいたため目の前で俺の親友は他の隊員達に羽交い絞めにされどこかに連れて行かれる。

(頼む、やめてくれ……っ!)

俺の心の叫びなど、もちろん通じるわけがない。

連れていかれる親友は、最後に俺に向かって叫んだ。

「俺は……絶対に認めない！！絶対にだ！……暁い！」

『……………』

「どうした？フォース、お前さつき病院の電腦に入り込んで、いったい何を調べていたんだ？」

飛行艇の中で、ドクターはずっと黙っていたフォースに尋ねた。しばらくしてからフォースは口を開く。

『少し、昔のことを思い出していただけだ。……しばらく、外に出ている』

「いいだろう」

フォースが周波数変換で消えるとドクターはふと右のほうを見る。そこには自分の机があり、さらにその机の上には写真が飾ってあった。その写真をじっと見つめながら、ドクターは一人静かに呟く。

「やっぱり、あいつも俺と同じなんだな……。そうは思わないか？」

ふと我に返って首をふる。

「……………何やってるんだ。まだ死んだわけじゃないんだ……………」

その目には、決意の炎が揺らめいていた。

「う、うう……」

『ずいぶんうなされていましたね、シドウ……』

アシッドに気遣うような声にシドウは笑って答える。

「ちょっと、昔の夢を見ていてね……心配させたならすまない」

『いえ、気にしないでください。それより、早く準備を済ませてください』

「ああ、わかった」

今日をもって、シドウは病院を退院するのだ。リハビリは順調に進んで無事退院することが出来たのだ。

「でも、スバルは俺より先に退院しちゃったんだよなあ」

不満そうに呟きながらもテキパキと作業を進めていく。そして、ついに時間となった。

「今まで、お世話になりました」

「いえいえ、これからもお仕事がんばってください。……くれぐれも無茶はしないように」

「はは、気をつけます」

「では、おだいじに」

医者に挨拶をするとシドウは外に出てうーんと背伸びをする。

「とりあえずサテラポリスにでも行くこうかな？」

『それがいいでしょう。……！』

アシッドは突然目を厳しくして警戒態勢に入る。
シドウはどうしたのかと思ひ尋ねた。

「どうした、アシッド？」

『何かが近付いてきています。……この反応は電波体、サテラポリ
スに登録されている電波体ではありません』

「おいおい、退院したばかりだぜ……」

口調はのんびりとしているがその目は鋭さを増している。アシッド
のサーチ能力をシドウは信頼しているのでそれが間違いではないと
わかっているからだ。

次の瞬間、二人の前に一人の電波体が現れた。

『……………』

突然現れた電波体にシドウは警戒したまま睨みつける。

緑色の電波の体を持つその電波体も同じくジッとシドウを見つめる。
先に沈黙を破ったのはシドウだった。

「お前は何者だ？」

その問いに対し、電波体はやれやれとため息をついた。

『やはりわからないか。私の名は……フォースだ』

「フォースだと……」

シドウはスバルの話に出て来た、学園祭でのバトルの後現れてクロ
ウを取り込んだ電波体がフォースという名前だったことを思い出す。

「聞いたことはあるが、あいにく思い出せなかったよ。何しろ初対面だからね」

『同じく』

皮肉も込めて返すとフォースはさらにため息をついた。

『やれやれ。どちらもあったことがあるというのにね……まあ「001」は記憶が抜けていてもしかたはないか』

アシッドがまだ実験段階の際の呼び名「001」。それを知っていたことにアシッドは驚く。

『なぜ知っているのですか？』

『簡単さ、俺達は会ったことがあるんだから』

そういうフォースの雰囲気は少し変わる。

『それじゃ、これならどうかな？……まさか顔は忘れていないよな？』

次の瞬間、バチバチっとフォースの体の電波が弾けたかと思うと、電波の体をゲートとして通り抜けるように少しずつ人間の体が出て来た。

手、足、体、顔と出てくると電波はその体に吸い込まれるようにして流れていく。

はねたくせのある青い髪に、少し日焼けしたからだ。ジャケットを着ておりよく見るとそれはサテラポリスの制服のエンブレムなどを一部引きちぎったものだった。

『久しぶりだな……暁』

一方のシドウは目の前にいる人物の姿が信じられなかった。
それは今日夢に出て来た男。

すべてを失ってずっと行方をくらましていた男。
そして自分とコンビを組んでサテラポリスで働いていた親友。

「なんで、お前がここにいるんだ……………鮫崎」

少し体から緑色の電波を出しながら、シドウと同じくらいの年の青
年…………鮫崎 タイガはククツと笑っていた。

『なんでって……………退院祝いさ』

そういう鮫崎の顔は、笑顔ではあったがその目は憎しみに染まっていた。

第32話 ありえない再会（後書き）

更新遅くなって申し訳ありません。

ついに出ましたフォースの秘密！

少しずつメインストーリーへと展開していきたいと思います。

次回、両者激突です。

第33話 復讐

目の前に現れたタイガは憎しみをむき出しにしていた。

『どうした暁。驚きで言葉も出ないか？』

「……………死んだんじゃないか、って俺はずっと不安でたまらなかった。生きていただけでも嬉しいよ……………」

それはシドウの本心であり同時にタイガへの呼びかけでもあった。しかし、そんなシドウの心遣いは逆効果だった。

『生きていただけでも、だと……………』

ふざけるなっ！！俺が今、どういう状態かわかった上でその言葉か！それとも鈍感だから気付きませんでしたとも言つつもりか、おい！！』

怒りをむき出しにして叫びながらタイガは自分の腕を上げてシドウに見せる。

その腕にはフォースの時と同じような電波が流れている。

『見ての通り、今の俺は電波体なんだよ！人間じゃないんだ！！』

「……………っ！？」

シドウが自分の鈍感さにここまで情けなさを感じたのはこれが初めてだった。

そこへアシッドが口を挟む。

『あなたの目的は何ですか？まさか怒りをただぶつけるためだけではないでしょうっ？』

『……当たり前だ』

そう言っただけでタイガは指をシドウにつきつける。

『俺の目的は復讐だ。それ以外の何でもない。』

だから今、ここで俺と戦うんだ暁。おまえを倒して、そのウィザードをデリートするためにな』

タイガは腕を横に突き出すと叫んだ。

『チェンジ。タイプ“シャーク”、オン！！』

刹那、タイガの体が強烈な光と電波に包まれる。

そして再び姿を見せたタイガの姿は変わっていた。

全体的に青いボディに、腕にはそれぞれサメの背びれを模したブレードが付いている。

背中にも大きなサメの背びれが付いており、頭にはサメの顔を模したプロテクターが装着されている。そして口の部分には鋭い歯が連なった模様と形をしたものが口からほほを覆っていた。

「……いくぞ、アシッド」

『了解しました』

シドウもまたアシッドと電波変換して白い姿をしたアシッド・エースになる。

向き合った二人に緊張が走る。

『本当の力である“フォース・シャーク”の力を手にした俺に、まがい物のお前が勝てるのか？』

「ああ、勝てるさ。勝てると思うことが大事なんだよ」

アシッド・エースの言葉にフォース・シャークはいらいらした様子で吐き捨てる。

『それを蛮勇って言うんだよ。とにかく、お前をここで倒して、あのウィザードを消すことで……』

次の瞬間、フォース・シャークの体が地面に沈む。

「な、どこに行った……?」

『後ろです、シドウ!』

アシッドが叫んだときにはすでにフォース・シャークは体を地面から出し

今まさに腕のブレードをアシッド・エースに向かって振りおろそうとするところだった。

『……Project・TCを、否定してやるっ!』

「ぐあああああっ!」

体を切り裂かれ、痛みに声を上げるアシッド・エース。

(そういえば、俺さつき退院したばかりじゃないか……
これは少し、まずいかもしれない……)

そう考えたアシッド・エースはアシッドブラスターを構える。

「ワイドショット!」

勢いよく飛んでくる水の刃に、フォース・シャークも腕を振って水

の刃で返す。

「アクアブレイド！」

バシャアアン！

激しくぶつかった水は飛び散って消える。

『そんなものか、お前の攻撃は！』

そういつてフォース・シャークは再び地面の中に潜る。
すると地面から今度は3つのサメのひれが出て来た。

「何をする気だ……」

その答えはすぐに分かった。

3つのひれはまったくバラバラな動きで、そしてものすごいスピー
ドで

アシッド・エースのほうへと向かってきたのだ。

「わっと……」

慌ててよけるシドウだがすぐに考えを改める。

「いや、わざわざあるいてよける必要はないんだ」

呟いてシドウは思いっきりジャンプする。

「地面から来るなら、飛べば届かないだろ！」

やった、と思つてアシッドブラスターを構えたアシッド・エースだ

つたが、
急にアシッドが慌てた声を出した。

『シドウ、今すぐウイングブレードを使ってください!!』
「へ?なんで?」

ウイングブレードは攻撃力の高い攻撃力を持つシドウの切り札の一つで

できればタイミングよく使いたかったのだ。

サメのひれはむしろここから少し離れるように動いているんだから、使う必要は……

『あのヒレは少し距離を取っただけです！

着地した瞬間、一斉に襲いかかるために!!』

「そういう、ことが……っ!」

シドウはようやく理解した。確かに、自分が着地するあたりから3つのひれは同じ距離をとっていた。

「ウイングブレード!!」

背中ofバーニアから勢いよくエネルギーを吹きだすアシッド・エース。

空中で発したことで、少し距離を移動する。

着地した瞬間、ヒレの猛攻が外れたのを見てアシッド・エースの背に冷や汗が流れた。

(さすがはタイガ……。このままじゃ、まずいぞ……)

第33話 復讐（後書き）

お久しぶりです。

更新遅くなって申し訳ありませんでした。

夏休みの宿題、文化祭の用意、その他もろもろが容赦なく襲ってきて
だいたい時間がなかったんです。

落ち着いたころにはもう少しペースを上げたいです……

第34話 過去の実験

何とかひれを交わしたものの、その猛攻は激しくアシッド・エースは体力を少しずつ奪われていた。

『うまくよけやがって……。とりあえず、ほめてやるよ』

地中から地上に戻ったフォース・シャークは口では褒めるが、その言葉の裏には侮蔑が込められている。

『だい息も上がっているみたいだしなあ……。天下のサテラポリスなんてそんなものさ。』

ましてやまがい物が本物に勝てるわけがない』

「それは……。本当の電波体、ってことかよ」

アシッド・エースは苦しそうに答える。

そんなアシッド・エースを見てフォース・シャークは目つきを鋭くする。

『……。正解でもあり、不正解でもあるな』

一気に距離を詰めると、フォース・シャークは腕のブレードをアシッド・エースに向かって振りおろす。

『だが、そんなことはどうだっていい！大事なのはそのウィザードを消すことだ！』

ガキーン！ギン！

フォース・シャークが腕のブレードで攻撃するのに対し、アシッド・エースはアシッドブラスターからソードを出して応戦する。しかし、アシッド・エースの得意技であるロックオンソードは相手と距離をとって初めて

その本当の威力が出せる。

相手との距離を一気に詰めて斬ることで相手に防ぐ暇を与えないからだ。

だがこの近距離ではただのソードを使っているようなものだった。

「くっ……」

『オラオラオラオラあ！腕が動いていないじゃないか！』

アシッド・エースはだんだんと追い込まれていく。

一方のフォース・シャークはというとその勢いはとどまることを知らない。

アシッドを消す。

彼はそれしか考えていなかった。だからこそ、迷わず、確実に攻めることが出来たのだ。

「いったい……何があつたんだ？何がここまで君を変えてしまったんだ？」

『……まさか、忘れたとは言わないよな？あの日、俺はお前につかみかかって言ったはずだ。それを忘れたというのかっ！！』

怒りをさらに膨らませるフォース・シャークにアシッド・エースは慌てて訂正する。

「違う、俺が聞きたいのはお前がつかまってどこかへ連れて行かれてからのことだ。」

その時お前はまだ人間だったはずだ。何があったんだよ……」

悲痛そうなアシッド・エースの声に、フォース・シャークは黙りこむ。

やがて、攻撃をしながらも少しづつ話し始めた。

『俺は…… Project - TCの、電波変換人間実験の実験台にされた。』

お前達が多くの子供たちにしたようにな』

「なっ……!？」

電波変換人間実験？

「確かに、数人の子供たちに協力してもらってはいたが、それはあくまで脳波の解析だけだ。実際に電波変換をしたりしたのは大人のはずだ……」。

なぜ、子供たちが？」

戸惑うアシッド・エースにフォース・シャークは怒鳴る。

『脳波の解析だけ!？なら、なぜ子供たちの中にあんな目があった子が出て来たんだ!!』

あまりに意思が変貌して危険人物になった子もいれば神経にダメージを負った子、

そして……ッ!!』

その先は言われなくとも分かった。

だが、何かおかしい。

かつてタイガがシドウにつかみかかったとき、確かにこう言った。

「この計画は危険すぎる」と。

確かに、肉体への負担は大きい。

しかし、だからこそ子供たちにはあくまで人間の脳波や発する微弱な電波を測定し、

それをサンプルに電波変換が出来る電波体の作成に役立てる程度の協力しかしてもらっていないはずだ。

(どういうことだ……?)

その時、アシッド・エースは急な激痛に襲われた。

「がはっ……!？」

胸をおさえようとするアシッド・エース。

攻撃を食らったわけではない。と、いうことは……

『時間切れか。たとえお前でも、まだ克服はできていなかったようだな。』

だから、まがい物は俺に勝てないと言ったんだ』
「くそっ……」

やがてアシッド・エースの電波変換は解け、胸をおさえたシドウとアシッドの二人に別れてしまった。

フォース・シャークは胸をおさえ荒い息をするシドウには目もくれず、そのまま

アシッドのほうへ歩いていった。

『001。俺が、お前と初めて電波変換した時のことを覚えている

か？』

『…………ええ』

アシッドは頷く。

『あの時、俺は無理に電波変換させられた。

その結果がこれさ。体がふ化に耐えきれなくなったうえに強力な電波を無理に浴びさせられね、そしてこの電波の体になったのさ。』

タイガは話しながら少しずつアシッドに近づいていた。

途中シドウを通り過ぎるとおもっきり蹴りつける。

「ぐあッ…………」

そして、ついにブレードのついた腕を振り上げた。

その光景はまるで死神が鎌を振り上げたよう。

『これで…………消えるオッ！！』

無慈悲な刃がついに振り落された。

第34話 過去の実験（後書き）

また遅くなってしまいました。
なかなかうまくいきません……

次は少し物語を進めるつもりです。

第35話 次の段階

刃が振りおろされた、まさにその瞬間。

ピー！ピー！ピー！

雰囲気をぶち壊すような電子音が鳴った。

続いて、音声だけの電話。だがその声は機械を使っているのか、やたらと高い

妙な声だった。

おい、戻って来いフォース

アシッドを切断する寸前だったフォース・シャークは派手に舌打ちをする。

『チツ……よりによってこんな時に……』

悪い。だが、多少厄介なことになったんだ。お前、まだ巖にクロウを戻してないだろう？

かなり暴れていて何とかしたいんだよ。ま、したいことはそのあとだ。

そろそろ次のステップへ進まないといけないしな

その言葉をフォース・シャークは苦々しげに聞いていた。

だが、あきらめたように首を振ると腕をおろした。

その背中に何か人型のような電波が現れたのをシドウは見る。

フォース・シャークはそんなシドウに吐き捨てる。

『処刑は延期してやるよ。だが、今この瞬間。』

俺がお前達を消すことが出来たことを忘れるな。
そして、お前の罪も消えることはない！わかったか暁シドオオオオ
オオオオウ！！』

眩しい光が目を覆ったかと思うと、フォース・シャークの姿は消えていた。

シドウはただ、肩で息をしてそこに座りこむことしかできなかった。

「遅いんだよ！さあ、とつとつとクロウを出してもらおうか！」

話に聞いていた通り、巖はかなり興奮していた。
フォースはイライラするのをおさえ、答える。

『返してやるよ。だからその口を閉じる。うるさくてイライラする
すでに通常の電波の姿に戻っていたフォースは体から腕のような形
の電波を伸ばし、その電波の先が大きくなったと思うと、次の瞬間
口のように大きく開いた。』

『解放。出て来い、クロウ』
『グルルルルルルル……』

その口から電波体、クロウが出てくる。
その体にはロックマンとハープ・ノートとの戦いで受けた傷はない。
確かに回復されたようだ。

「おおつ、元気になってるじゃねえかクロウ！！
これでまた思う存分暴れるってもんだ。楽しみだぜ！」

しかし、それを制止する声があった。

「お前はしばらくおとなしくしている、巖」

その言葉に巖は憤慨する。

「ハア？なんでだよ！ウィザードも戻ったし、別にいいじゃねえかよ！」

声はまだ続く。

「単純な話だ、今のお前は力不足。実際、お前はたかだか子供二人にボロボロにやられていたんだぞ。だからこそおとなしくしているというんだ」

「く……ッ……」

反論できない巖は踵を返した。

「ならせめて、この辺のウィルス狩りぐらいやらせてもらっせ。

イライラを晴らしたいし、久しぶりの電波変換になるからリハビリになるだろうし、

何より多少は特訓にもなる。文句ねえな？」

「いいだろう」

歩き去る巖の背を見ながらぽつりと呟く。

「少しはましになったか……あの敗北は、やつ自身自分の手で挽回

したいのだろうな」

『挽回、か……』

フォースはそこで声の主　通称ドクターと向き合う。

『で、次はどうするんだ？』

「次か……」

ドクターは一度そこで言葉を切ると再び口を開いた。

「今度、D国のグラディエ大臣がニホンにくるだろう？」

『ああ……そうだったな』

フォースが頷くを見て、ドクターは続けた。

「その時、ビッグホールで演説をするんだそうだ。そこを……」

『なるほど……だが、ビッグホールは後の予定ではなかったか？』

ビッグホールの“あれ”を回収するには、必要なものがあったのだろうか？』

フォースは首をかしげる。ドクターの話は、計画の変更を意味していたからだ。

「もちろん、それは大臣が来る前に終わらせる。だから色々あるとすることがある。お前を呼んだのもそのためだ」

『そうか……』

とはいえ、どこか不満げな雰囲気を残すフォース。

やはりアシッドを消せなかったのを根に持っているのだろう。

そんな心情を呼んだのか、ドクターは付け足した。

「まあ考えてみる。後に回せば、このビッグホールも、その前に行かなくてはならない場所も警備が厳しくなるだろう。だったら、先に行ったほうが楽じゃないか。」

それに、どのみちビッグホールではわざわざ外国から来た大臣が演説を行うんだぞ？

サテラポリスが警備についても、おかしくないと思うんだがなあ……

……

『！！』

その言葉にフォースは反応する。

(なるほど……そこで全ての決着をつけても、悪い話ではない……)

『わかった。それで構わない』

「そうか。ではまた詳細は後日だ。」

ドクターは自分の部屋に戻っていく。
フォースは一人その場に残っていた。
その体の電波から……獣の顔のような形をした電波が現れて、またフォースの中に戻った。

『キャプチャー
吸収した力を試すいい機会じゃないか……』

『コンドモオレノデバンハナサソウダナ……』

『我慢してくれよ……。どのみち、今の俺達は二人で一つだ。
まがい物に引導を渡すのは俺じゃない』

ニヤツと笑う。

『俺“達”だ』

第35話 次の段階（後書き）

今回は謎めかした感じで書いてみました。

あれだのそれだのかなりぼかしてあるので

読みにくいと感じた人もいるかもしれませんが。

ビッグホール編が終わるころには秘密を明らかにできるかもしれませんが。

フォースの時に出てくるカタカナ言葉も気になるかと思います。

本当は前話で少し明かすつもりだったのですが、やめました。

その分、今回もまたフォースを戦わせますので、その時に分かるようにしようかと考えています。

第36話 WAXAにて

「」

『ずいぶんとご機嫌ねミソラ』

「まあね」

ミソラは鼻歌を歌いながらスキップをして進んでいく。

今日、シドウからサテラポリスへ来てくれというメールがあったのだ。

サテラポリスへの召集があったということは……

「スバル君に会うの、楽しみだなあ……」

自然と頬が緩む。

そして自然と足が先を急ぐ。ミソラはスキップせずにはいられなかった。

で、サテラポリス本部にて。

「えーーーーーーっ!」

ミソラは大声で叫んでいた。

その前で困ったような顔をするのは一人の老婆。

「ごめんなさいねえミソラちゃん」

謝る老婆の名前はヨイリー。赤いふちのメガネをかけ、背も低いほうだが

その筋では名を知られた有名な科学者である。

ヨイリーは困ったような笑顔をしながらミソラに謝った。

「今回遊撃隊からはミソラちゃんだけしか呼んでないのよ。だからスバルちゃんは今日は来ないわ」

ミソラは茫然としてその顔は脱力した顔になる。

目は点になって焦点が合わず、口はぼかんと開いていた。それは今までミソラがアイドルとして撮った写真のどれにも載っていない表情だった。

漫画ならその後ろには「ガン！」という文字が出てきそうだ。

「そんなぁ……」

「ケツ、いつまで落ち込んでるんだよ」

ミソラが顔を上げると、そこには元ディーラー幹部、ジャックとクインティアがいた。

ミソラが転校したことでクラスメイトとなっているジャックはあきれたような顔をしていた。だが、その横のクインティアはどこか心配した顔をしていた。

「……それにしても、シドウ遅いわね。そろそろ退院してここにきてもおかしくないんだけど……」

そう、ミソラ達を呼んだ当の本人、シドウがこの場にいないのだ。ミソラも首をかしげていると、部屋のドアが開いた。

「あ、やっと来た！……って、あれ？」

そこに入ってきたのはシドウではなかった。

帽子の下の長い金髪をなびかせ、ジーンズをはいた足をせかせかと動かしこちらのほうにむけて歩いてきたのは……サラであった。

「あなたは、あの時の……」

ミソラは、スバルが入院する前に星河家を訪れセイヤと何か焦ったように話をしていた時のことを思い出す。

「お久しぶりです、ヨイリー博士。メールで頼まれたとおり、二人をここへ連れてきました。現在は控室のほうにいらっています」
「ありがとうサラちゃん。さて、あとはシドウちゃんだけね……」

ヨイリーはどこか心配そうな目でじっとドアのほうを見つめていた。

「……………」

『なぜ、入らないのですか？』

当のシドウはというと、WAXA 中にサテラポリス本部もある

の前で立ち尽くしていた。

「……………」アシッド

『なんでしょっ』

シドウからは普段の元気いっばいな雰囲気は全くと言っていいほど出ていなかった。

その分、ものさびしい雰囲気を出している。

「俺は……バカだったな。タイガに何もしてやれず、そして対抗できなかった。

それに、俺はまだ完全にはタイガに何があったのかがわかつちやいない。なぜタイガが電波体になったのかも曖昧なままだしな……」

『……………』

二人の間に気まずい空気が流れる。

だが、ウェーブライナー駅の近くの壁にあるノイズウェーブの入り口から突如ウイルスがあふれて来た。

『シドウ！ウイルスです！』

「……………あ、ああ」

しかしシドウはなかなか電波変換をしようとしな。ただ胸をおさえているだけだった。

『何ももたもた……いや、まさかシドウ……』

「ああ、そうなんだよな……」

先ほど、フォース・シャークと戦った時でさえ、体力はぎりぎりだったのだ。

退院直後のシドウにとって、戦いのあともう一度電波変換というのはさすがにきつかった。

「くそ、どうすれば……………」

バキュン。

その音がシドウの耳を掠めたかと思うと、ウイルスの数体が突如ノイズまみれになって苦しみ出す。

『ギ、ギギ……』

バキュン。バキュン。

その後も次々にウイルスたちはやられていき、残りのウイルスは慌てて退散した。

「今のは……？」

シドウが後ろを向くと、そこには一人の青年が立っていた。

「WAXA」と書かれたジャケットの上に薄くて青いマフラーを巻きその顔には黒ぶちの眼鏡。首からは自分の写真がついたWAXA内でのパスをぶら下げている。その腕は真っ赤なノイズの塊に包まれていた。

そのノイズの塊は砲台のような形を作っている。

「お帰りなさい、シドウ。みんなあなたを待っていますよ」

「ああ、すまない道野」

道野^{みちの} 先雄^{さきお}。

シドウと同じ孤児院で育ったWAXAの科学者にして、元ディーラー
ー 研究員。

そしてシドウと同じくタイガの友人であった。

第36話 WAXAにて（後書き）

最近久々に展開に悩んでいました……

正直な話、グランドホール編の次の敵はどんなやつで、どんな能力を持っていて、

どんなことをしてどういう風に終わるかがほとんど決まっているのですが

グランドホール編はまだ敵がどういうやつでどういう能力を持っているいて

どう戦うか、しか決まっていません。

本来道野ももうちょっと後で出すつもりでした。

ただ、せっかくWAXAの話なのでいっそのこと出しちゃえと思っただ次第です。

次でWAXAは終わって、ぼちぼちグランドホール編へ進みたいと思っと思っています。

第37話 語りと説明

「お見舞いに行けなくてすみませんでした」

「いや、別に気にしなくていい。それより、さっきのは……」

シドウが尋ねると、道野は得意そうに腕を見せて答えた。

「あ、すごいでしょ？ Arm（腕）だから、仮にAプログラムって呼んでいます」

「……まだ、ノイズの研究をしているんだな」

シドウの言葉に、道野は大きく頷いた。

「はい、今でこそ危険視されているノイズですが、何か有効な使い道があるはずなんです。

Eースプログラムが完成され実用化されれば、将来ウィザードの暴走の危険もないでしょうし」

楽しそうに目をキラキラと輝かせてノイズの将来性を語る道野。

その姿を見て、タイガとのやり取りで傷ついたシドウの心も少しやされた。

「そろそろ行ったほうがいいですよ。みんな待っていましたから」

「ああ。じゃ、行ってくる」

道野と別れ、再び歩き出したシドウにハンターからアシッドが話しかけて来た。

『持つべきものは友人ですね。……たとえ将来別れる時が来るとし

ても

友人を持つといつも助けてくれます」

「お前にそんなことを言われるとは思わなかったなあ」

苦笑しながらシドウはある部屋に入る。

そこにはヨイリーを始めミソラ、ジャック、クインティア、そしてシドウにとっては驚くべきことにサラがいた。

「あら、やっと来たのねシドウちゃん。ずいぶん待ったわよ？」

「……人を待たせる男は嫌いなんだけど」

クインティアの言葉に再びぐさぐさと心に何かが刺さるシドウ。ハンターの中ではアシッドがやれやれとため息をついていた。

「あ、ああ悪い。そうだヨイリー博士、呼んだ二人は来てくれましたか？」

「とつくに来てるわよ。さっさと案内してやること終わらせなさい」

きびきびと答えたのはヨイリーではなくサラだった。仮にもサテラポリスのエースである

暁 シドウにこの態度はすごい。

しかしそんなオペレーターとは対照的に、ウィザードの MARIA はウィザード・オンして

サラの横に現れると優雅な笑みを浮かべた。

「お久しぶりですね、白いウィザードさん」

「え、ええ……」

それにこたえるアシッドはどこかきこちないようになっている。

「おやおや、なんか面白いことになってるなあ」

「早く行ってちょうだい。あ、サラちゃんはちよつと残ってくれるかしら?」

「ハイ、構いませんが……」

ヨイリーはシドウの背中を押し、部屋から追いつ出す。

「じゃ、後は頼んだわよ」

部屋のドアを閉めると、ヨイリーはサラと向き合った。

同じようにサラもじつとヨイリーの目を見つめる。

「とりあえず……座ろうかしら。あなたも腰をおろしてちょうだい」

「ハイ……」

腰を下ろす二人。

しばらくの沈黙の後、最初にヨイリーが口を開いた。

「……もう、戻ってくるつもりはないの?」

「……」

黙ってしばらくしてからサラはゆっくりと頷いた。

「ハイ。もう、私にはわからなくなっただんです……。私は人を助けるためだと思ってこの世界に入りました。でも、私は救うことができませんでした……」

「……全てを救うことが出来る人なんて、ほとんどいないに等しいわ。」

あなたがそこまで思いつめる必要はないのよ?

……責任があるのは私達であって、あなたではないのよ」

暗い雰囲気が部屋を包む。

やがてヨイリーは首を振って息を吐いた。

「……引きとめて悪かったわね」

「いえ、お気遣いありがとうございます……」

立ち上がって外へ出ようとするサラの背中に、ヨイリーは尋ねた。

「最後に一つだけ。……今、あなたの周りにはだれかがいる？」

立ち止まったサラは少し笑みを浮かべて答えた。

「ええ。大切な仲間と、……私の人生を捧げると誓った人が」

「そう。一人で悩んでいるのでなければ、もう私から言うことはないわ」

今度こそ、サラは部屋を出て帰って行った。

一方、控室に向かったミソラはシドウに愚痴を言っていた。

「どうしてスバル君呼ばなかったんですか？」

「いや、あんまり大勢いる必要はなかったからなあ……」

「じゃあなんで私が？」

あるドアの前にたどりつく一行。

シドウはノックをして「お待たせしました」と一言。
「どうしてかって言うのだな……この二人両方と面識があるのはお前だけだったんだよ」

部屋にいた二人を見てミソラはびっくりする。
確かに、二人ともミソラの知る人物であったが……

「え！？なんでここに!？」

驚いたミソラをよそに、シドウは全員に座るよう促す。
そして、今回のこの集合についての説明を始めた。

「今回皆様に集まってもらったのは、ご存じのとおり残留電波から電波体を再構築するためです。これは我々の Project - TC にも実に有益な実験です。ご協力を感じします」

普段のダラーっとした態度とは違い、実に丁寧に説明するシドウ。
そのギャップにミソラは驚いてポカーンとしていた。

「一応、成功例はあるのよね……ただ」

そういったクインティアは来ていた二人のうち、一人のほうを見る。

「あの人の電波体は、成功例のある電波体やわたしたちと電波変換したFM星人とは
電波の周波数が違うらしいわね。大丈夫なの？」

その言葉を聞いてえっ、とする表情をする相手に慌ててシドウが補足説明をした。

「いや、すでにその点はクリアしてあります。先ほど、同じタイプの電波体をウィザードに持つ人に来ていただき、少しデータをとりました。なので対処は可能ということですよ」

それを聞いてほっと胸をなでおろしたのを見ると

「ハイ、質問！」

「なんだい？」

シドウは手を上げたミソラのほうを向いて尋ねる。

「なんで私は呼ばれたの？」

その問いにシドウはあー、説明していなかったなと呟いて答えた。

「今から残留電波を電波体に再構築するわけなんだけど、ここにいる全員が電波変換が可能であるウィザードにすることを希望しているんだ。ジャックとクインティアは問題ないだろうけど、あとの二人は自分で電波変換した経験がない。だから、忙しいとは思ってその指導をお願いしようと思ったんだ」

「えーっ!?!」

ミソラが驚くのも無理はない。ミソラ自身は自力で電波変換できるとはいえ、それを人に教えるというのは初めてのことなのだ。

「もちろん、俺達も指導はするがやっぱり知り合いから習ったほうが精神的に楽だろう？」

頼む、お願いできないか」

さすがにそこまで言われると根の優しいミソラは

「わ、わかりました……」

あっさり承諾してしまった。

「では、さっそく行きましょうか！」

シドウが宣言すると、みな立ち上がった。

第37話 語りと説明（後書き）

これでひとまず終わりです。

次はビッグホール編へ滑りだします。

……その前に、戦わせておきたい二人には戦ってもらいたいと思います。

第38話 現代の建物と古代の遺跡で

それから二日後。

無事に残留電波再構築は行われ、ウィザードを作ることも何とか可能だろうということになった。

そしてこの日にはミソラだけではなくスバル、ミソラ、ゴン太と遊撃隊メンバー全員が集められていた。

ちなみにメールの最後に「全員参加すること」とあったのはスバルがいなくて怒っていた

ミソラへのささやかな対応であった。

「今度こそ、スバル君が来るー!!」

そのメールを見てミソラがベッドの上でしばらくぴよんぴよんはねていたのは

やはりハープしか知らない事実である。

集まった3人を見渡してシドウは言った。

「よう、お前ら、久しぶりだな」

楽しそうに言うシドウにスバルは当然の質問で答える。

「今日はいったい、どういう用件なんですか？」

「ああ、それか。おまえたち、今度ニホンにある国の大臣が来るっ

「て知ってるか？」

当然ニュースなど見るはずのないゴン太は首を振る。

「だいじんかあ。牛井は来ないのかなあ」

（来るわけないだろ！）

心の中でツツコミをいれるシドウ。

一方のスバルとミソラはというと、少しは知ってる、という顔をしていた。

「まあ、ニュースでしたから……」

「みんなその話題でもちきりだったからなあ」

そんな反応を見た後、シドウは本題を切りだした。

「そこでだな、大臣が演説をするビッグホールにおいて、遊撃隊に警備をしてほしいという話がある。いや、むしろ指令か？」

「『ええ』……『っ！？』……」

一同はびっくりして大声を上げた。

遊撃隊といえどそもそもは小学生。そんな自分達が外国から来た大臣の警備を

命じられるとは……。

「わ、私たちがですか……」

「おう。何か不都合なことはあるか？」

全員を見渡すが反対意見はない。

満足そうな顔をしてシドウは続けた。

「じゃあ、話をつづけるぞ。警備といつても、実際に大臣と一緒に行動するわけじゃない。

演説中、ホール内を巡回して何か仕掛けられていないか調べたり悪影響を及ぼしそうな電波体がないかどうか調べるだけだ。そう難しい仕事じゃない」

「あ、でも……」

ふと疑問に思ったスバルが口を開いた。

「それって僕達3人と暁さんだけですか？もしそうなら少なすぎるんじゃない……」

遊撃隊に白羽の矢が立ったのは言うまでもなく電波変換が出来るからであり、スバルもそれを理解していた。だからこそ、他に人がいないか確認したのだ。

電波変換が出来る人間は極めて少ないとスバルは聞いていた。

「一応、ヨイリー博士がかけあってくれて何人が助っ人に来てもらうことになっている。

だからスバル、心配はいらないよ」

「わかりました」

そしてシドウは一通り簡単な説明をすると最後にこう締めくくった。

「具体的な担当地域は後日決める。その時、だれとだれが組むかも併せて決めたいと思う。

では諸君、これにて解散！」

WAXAでシドウが話を終えた時……
とある遺跡に二人の姿があった。

『ここになにがあるっていうんだ？』

「まあ、いろいろだ」

そこにいたのはフォースとドクターだった。
あちこちを見ながら二人は遺跡の中を進む。

「ここであつてドクター・オリヒメが様々なものを盗んでいった、
つていう話を聞いたな。

まあ、パツと見じゃ何も残ってないように見えるだろうな」

『じゃあ、どこに探し物があると？』

その質問にドクターは壁を指さして答える。

「電波世界……もしくは、そこを通らないといけない場所さ。
なぜなら……このムー文明は古代から電波体が存在していたそうだからな」

『まあ、確かに……』

話ながらきよろきよろとするドクターはふとある壁画を見つけた。

「これは」

「おい」

突然の声にびっくりして

いや、二人とも落ち着きはらって

いた。

その目の前に一人の少年が現れる。

真っ白な髪に赤い目、顔には文様が書かれており

横には青い電波の体を持つ電波体を従えている。

その姿を見てドクターはおや、と声を出した。

「まさかムーの生き残りが直々に現れるとはね……」

その少年　ソロは横に手を伸ばす。

それにこたえるかのように、彼のウィザードであるラプラスがゆっくり身をかがめたかと思うと、その姿が大きな剣に変わりソロの手に収まる。

「貴様ら……このムーの遺跡で何をしている。立ち去れ」

「さもなければ力づくで追い出す……とでも言いたいのかい？」

『まあ、追いだせるかは分からないけどな』

ソロの言葉を平然と流した二人にソロの目がキッと向けられる。

「……忠告はしたぞ」

吐き捨てた瞬間、ソロは地面を蹴って一気に二人との距離を縮め……

…ようとした。

「なっ……」

だが、それは突然目の前に現れたもう一人によって妨げられた。

ソロは舌打ちをすると下がって距離をとり剣を構えなおす。

(なんだこいつは……。突然、なにもないところからふつと現れた……)

警戒して目を細めるソロに対し、現れた人影は何事も起きていないかのようにそこに立っていた。

短い黒髪に、はねた前髪。ニコニコと浮かべるその笑顔にソロは戦慄を覚えた。

(こいつ、ただものじゃない……！)

真っ黒な服に身を包んだ少年 アロンの笑顔にどこか冷酷な表情が浮かぶ。

「……………見いつけた」

第38話 現代の建物と古代の遺跡で（後書き）

最近、更新する時間がどんどん削られています。
ですが、なぜかビッグホール編に入る前のこの話を書いてしまいま
した……。

早くビッグホール編に入らないと進まないのに……。

ですが、確かに予定していた戦いではありませんし、ドクターたち
にムーの遺跡へ行かせることも予定済みでした。
だからまあ、いいかな？

第39話 孤高か、孤独か

ソロが前に出すとその前にムーの古代文字が現れる。

やがて後ろ、横にも同じ文字が現れるとソロは手を横に突き出して叫んだ。

「電波変換！ ソロ、オン・エア！！」

文字が光りながらソロの周りをグルグルと回り出す。

ひととき大きな光が放たれたかと思うと、そこには一人の電波人間が立っていた。

右手は紫色の「ココウノヤミ」で覆われており、目のところには特徴的なプロテクター。

全体的に黒い体の所々には赤い装備があり、額の部分にはムーの文字が書かれていた。

「これが噂のブライか……。それじゃ、ぼくも見せてあげようか」

そういったアロンの体も光に包まれ、同じように電波変換した。

「フン……。お前の電波変換がどんなのであろうと、関係ないしどうでもいい」

そう吐き捨てたブライは一気に距離をつめると

「くらえっ！」

そして、そこからパンチ、アッパー、フック、サマーソルトキックの高速の4連続攻撃を

繰り出した。
だが

「ほい、ほいっと」

そのすべてをアロンは軽く手で払うようにしてすべて流して見せた。

「なっ……………」

驚いたブライがつきだしたこぶしを難なくよけ、カウンターの要領で逆に自分の右手をブライの目の前へと突き出す。

「クロスシュート」

腕を覆う電波が×状になり、さらに周りに浮かんでいた球体の一つが手のひらの前へと飛んできて光り出した。

そしてそこから、×状の黒いビーム状のものがブライへと襲いかかった。

「フン………… そんな直線攻撃、簡単にかわせる！」

あっさりかわしたブライはこぶしを突き出すと

「ブライナツクル！」

たくさんの紫色のこぶしを作り出しアロンへと飛ばす。

その飛んできたたくさんの拳を見てアロンは

「……………」

何も言わずに手を広げる。

その手から電波が格子状になって縦線がずらっと並ぶと、そのうえで球体が光を放った。

「レインポール」

すると空から黒くて太い柱が次々と落ちて来た。

横になって落ちてくるものもあれば、まっすぐ落ちてきて地面に突き刺さるものもある。

その柱たちはブライナックルを次々に消していった。

「……君は自ら人を避け、孤高を貫こうとしているらしいね」

落ちてくる柱の中、アロンの声が響いた。

「孤高とはそうやって自ら人を周りから排斥しようとするもの。だったら、やはり君とぼくは違うようだ。同じじゃないかと期待もしたけどね……」

ブライは自分にも落ちて来た柱をよけながらアロンめがけ腕を振り上げて衝撃波を放つ。

「ブライバースト！」

その攻撃は落ちて来た柱をはじきアロンに当たるかに見えた。しかしその攻撃はたくさんの柱に阻まれたせいで消滅してしまう。

「くそっ……」

「もう、とつととやめようか」

はっと気づいた時には目の前に浮かんできた球体が光り出す。

とっさに顔をかばうが、本当の攻撃は前ではなかった。

「!?!」

その後ろには真っ黒な姿をしたもう一人のブライ。

黒いブライはブライに対しアッパーやキックを繰り返してきた。

「チツ……」

対応するブライの後ろ　先ほどまでブライが向いていた前　ではアロンが腕の電波を直線の形に変え、光をあてていた。

「ダブルネイルズ。……敵に背を向けるのは自殺行為だよ？」

「しまっ……」

ブライが振りむくより早く、アロンは右手に持っていた黒い棒を投げる。

しかしブライは振り向きはできなかったが横にずれることはできた。そしてその黒い棒は、みごと黒いブライの胸に突き刺さった。

「ふん、自分で自分の攻撃を無駄にするとはな」

だが、棒が黒いブライを貫き地面に刺さったのを見たブライは突如違和感を感じた。

動けない。手足はまだ動くのだが、体がその場からどうしても動かせないのだ。

焦りを感じたブライの後ろで、アロンの声があった。

「ぼくはね……」

その声を聞いてブライはぞくつとした。

それは、後ろをとられていたからだけではない。

アロンの声には、感情が混じらず冷たい何かしかなかったからだ。

「孤高じゃない。そんな、だれを避けるつもりでもないのに……

誰も、僕に近づかない。仮に近づいても、すぐに離れていく……」

ギュツと左手に残った黒い棒を握るアロン。

「ぼくは孤独だ。誰かを排するどころか、排する相手さえそばにいない。

……記憶のない、自分の本名すら分からないぼくはずっと一人なんだよ……」

そして、思いっきり黒い棒を投げた。

まるでイライラした学生が石を投げるかのように。

まるで憤慨した大人が書類をたたきつけるように。

……ブライに向かって、思いっきり投げた。

「くそっ……」

動けず、また振り向こうとしても首が少ししか回らずあまり後ろが見えなかったブライは

思いっきり叫んだ。

「ラプリアアアアアアアアアス!!」

ヒュウつと風を切る音がした。
飛んできたのは一振りの大剣。

その剣は投げられた黒い棒をはじき、一回転するとブライの目の前にあった

黒いブライとそれに刺さった黒い棒を砕いた。

「フン……これで、また対等だ。

次は容赦しない。覚悟しろ」

「……………」

大剣を構えるブライに対し、アロンは右手を横に出す。

その腕から出た電波が剣の形に変化すると球体が飛んできて光った。

「ダークネスサーベル」

作り出された真つ黒な剣を握り締めると、その刃先をブライに向け
孤高と孤独は静かに対峙した。

第39話 孤高か、孤独か（後書き）

一話で終わるかなーと思ったら終わりませんでした。
最近更新速度がガクンと落ちたし、本気で早く進めねばと焦っています。

次でこの戦いは終わる予定です。

第40話 奪われた力

向き合った二人は同時に剣を構え相手に向かって走り出した。

「おおおおおおおおおっ！」

ガキーン！ギイン！

二人の剣は互いに弾きあい、なかなか相手に当たらない。

「チツ、きりがない」

舌打ちをしたブライは一度大きく距離をとった。
すかさずそこへアロンが手を伸ばす。

「クロスシュート」

しかし、剣を持ったブライにとっては簡単に剣で払うことが出来る
大したことのない攻撃だった。

「……………」

それを見たアロンは球体のうち一つを呼び寄せると

「な!?!」

剣の柄にはめ込んだ。

さらに、驚くブライに向けると、球体がはめ込まれたことでその刀
身まで光っていた剣に

腕の電波がからみついた。

「これで、消える」

振りおろした瞬間

「ぐはっ！」

ブライの体に激痛が走った。

「ぐ、うっ……」

ブライは何が起こったか理解できなかった。

自分は距離をとった。

確かに、自分と相手との距離は7.8メートルはあったはずなのだ。
なのに、

その4分の1もない剣がこうして自分に届いている。

「どういふことだ……」

「わからなくてもいいよ。どうせ今消えるんだから」

アロンは冷たい目でブライを見据えていた。

一方、アロンとブライが戦っている間フォースはドクターと共に遺跡の奥へと進んでいた。

「そろそろだ……」

『いったい何が……!?!』

フォースが驚いたところでドクターは立ち止った。

そこは通常の部屋とは明らかに異なつた雰囲気だつた。

今までの倍はある広さ、壁一面に書かれたムーの文字、

そして何より、部屋の中心にひとときわ輝く台座があつた。

その上にはまがまがしい色の電波の塊があつた。

『あれが、探していたものか?』

フォースは壁画を見ていたドクターに尋ねた。

ドクターは振り返ると、

「ああ、そつだ。だけど、ここはなかなか面白いな。

古代の技術について、壁画としていろいろと記されている。ここは

そついう、記録の部屋みたいだな」

『読めるのか?その文字が』

壁画の文字を読みながら苦笑して答える。

「ま、いろいろあつてな。完全にではないが、全く読めないわけじゃない

さて、俺がこの技術を現代風にデータ化する間、台座の上のもの回収しといてくれ」

『そんなの、すぐ終わるぞ……』

そついいながらもフォースは台座へと向かう。

それに背を向けながらドクターはひとり呟いた。

「まあ、とるだけなら簡単だけどな。当然そういうものには……」
フォース勝ち数いた途端、台座の柱に仕込まれていた黒い機器が反応した。

ヨ シンニューシャ。アカシヨマモリ、シンニューシャヲハイジヨセ

機器が光ると、そこには灰色っぽい体に黄色い電波、そしてその長い首の先の顔には
感情を感じられない緑色の目が光る電波体があった。

『おいおい、こんな予想済みだぜ……。まあちょうどいい。
チエンジ。タイプ“レックス”、オン！！』

フォースから電波が伸びたかと思うと、その先で獣の顔が牙をむいた……

わずか3分後。

『キャプチャー』
『グ……ガ……』

電波体はずぶずぶとフォースの体内に取り込まれ

『回収、つと』

フォースは何事もなかったかのように台座から塊をとった。

『何に使うんだ、これ？』

「話はあとだ。先にアロンを止めないと……」

あのムーの生き残りが生きていれば」

「ぐはっ……」

ブライはまだ生きていた。

しかし、その体はぼろぼろでもはや満足に動くことはできなかった。にもかかわらず、その目にはまだ光が宿っていた。

「わかったぞ、お前の能力……」

その言葉にアロンはやれやれと首を振る。

「今更わかってもさ……」

そのままアロンはブライに剣を振りおろそうと腕を上げた。

「遅いでしょ」

そのまま振りおろそうとして

「ストップ」

「!?!」

アロンは手を止めると振り返った。

そこにいたのはドクターとフォース。

「もう終わり。足止め、御苦労さま。

まさかいるとは思わなかったから、助かったよ」

それに対し、アロンは不満げな顔で電波変換を解いた。

「……手伝ったつもりはない。約束は覚えているだろ？」

「もちろんだ。」

“お前に脱走する力を与える。その力で我々の邪魔さえしないなら、何をしてるかまわらない、何をしようがお前の勝手”」

ドクターはすらすらと答えて見せた。その一字一句間違いのない答えに

アロンは背を向けた。

「最初あんたは仲間にならないかと誘ってきた。でも最後には必ずぼくは一人になる。」

「だったら、初めから勝手にやれるほうがいい」

「そうか」

そのままアロンが黙ってしまつと、一行はそのまま出口へと向かう。

「くそっ……」

彼らの後ろで、ボロボロになりながらもブライはその体を起こす。

「逃がすか……ムーの力は渡さない……ブライバースト！」

右腕を振り上げると、ドクターたちに向かって衝撃波が放たれる。
だが

ドクターは振り返ると、右手を広げた。

ガキーン！

「な……」

衝撃波を防ぐと、今度こそドクターたちは出て行ってしまった。

「なぜだ……」

一人残った中、ブライはソロの姿に戻り呟いた。

「なぜ、あいつは普通に俺に攻撃ができた？」

しかも、別のやつが俺の攻撃を防いだのは……」

間違いなかった。

何度もこの目で見、この身を防いできたのだから。
たとえ今回、なぜか発動しなかったとしても。

「……電波障壁だ」

第40話 奪われた力（後書き）

今回は割と長めになりました。

次回から、スバルたちに戻ります。

第41話 肩書き

「いや、驚いたなあ……」

「暁さんが言っていたのはこういうことだったんだね……」

教室でスバルとミソラがのんびりと話していた。

今は学校は休み時間。

二人の周りでは教室中の生徒がぺちゃくちゃとしゃべっていた。というのも、それは朝礼でのこと。

「いいかみんな、今日はビッグニュースがあるぞ!」

担任である育田は教室に入るなりそう言った。

なんだなんだと騒ぐクラスの生徒達に育田は宣言する。

「今度、グラディエ大臣が来る日、大臣が演説をするビッグホールにこのクラスが招待されたんだ!」

……

それに対し生徒のリアクションは薄かった。

唯一反応したのは、

「まあ、本当ですか!」

クラス一の才女であり現生徒会長である委員長、白金ルナだった。

当然、ニュースを大人と同じように見るルナにとって

今話題のグラディエ大臣の演説会場に行けるのはまさに幸運なのだ。

「でもいったいどうしてですか？」

「確かなことは先生にもわからないんだが……WAXAから招待があったんだ。」

子供たちに特別な経験をする機会を……、ってことだそうだが」

「そうですか……」

育田とルナが話す中、スバルとミソラは顔を見合わせた。

「これは……」

「暁さん、だよね……」

二人には覚えがあった。

そして、時間は休み時間。

「招待、って言うのは建前で、本当は……」

「私のせいなんだよね……あはは」

ミソラは舌を出して頭をかいた。

その光景をクラスの他の男子がうらやましそうな顔で見ているのは言うまでもない。

「それにしても、あのときは驚いたなあ……」

スバルとミソラはWAXAに再び招集がかかった日のことを思い出した。

「よう、お待たせ！詳細が決定したぞ」

嬉しそうな子供のようにシドウが言った。

「牛井と一緒に……」

「却下だ」

ゴン太の願いはあっさり却下された。

「じゃあまず、今回のメンバーを発表するぞ。

まずは遊撃隊のオレ、スバル、ミソラ、そしてゴン太。他に、要請で来てもらった人が4人いる」

「「よ、よにん!!」」

ゴン太とスバルは驚いて声を上げた。

そんな二人を笑った顔で見ながらシドウは続けた。

「そのうち二人は今日は来られないそうだ。だから、とりあえず二人はチームAだ。」

そして、とりあえず今日来ている二人を紹介しようか」

そう言って、シドウは声を大きくして呼んだ。

「それじゃ、入ってください!!」

そして入ってきたのは……

「ええ!!」

「お前は……」

まず入ってきたのは、一人の少年。

「ツカサ君!!」

「やあ、久しぶりだね」

その一人目は、かつてスバルと別れて以来旅をしていたツカサだった。

しかし、その頭や腕には包帯が巻かれていた。

「あれ、その包帯……どうかしたの？」

スバルが気になって尋ねると

「あ……なんでもないよ。ただの怪我さ」

ツカサは急に包帯を隠した。

その時、わずかにツカサが苦しそうな顔をしたのをスバルは見逃さなかった。

「そしてもう一人は……」

シドウがもう一人を招き入れた。

それは、

「スバルとミソラは……まあ、面識があるわね」

金髪をたなびかせ、ジーンズのポケットに手を入れて

「彼女は……」

シドウが説明する。

「元サテラポリスアメロツパ支部副支部長……サラ・マルダーさんだ」

笑ってスバルたちの前に腕を組んで立つサラだった。

（サラさんって、そんなすごい人だったの……！？）

第41話 肩書き（後書き）

お久しぶりです。

そしていきなりミスをしてしまいました……

この話は半分学校、半分が回想ですが

学校での話の意味がこれじゃあわかりませんよね……

次話でちゃんと明らかにします。大したことではないんですが……

やっぱりそこはちゃんとしておかなくてはならないので

早めに次話を出したいです。

第42話 その日に向けて

「サラさんって、そんなすごい人だったんですか……」

しかし、サラは首を振ってとても嫌そうな顔をした。

そしてシドウに指を突き付けて言った。

「肩書きなんて何の役にも立たないわよ。ましてや、私にとってこの肩書きは

私に何ももたらしてくれなかった。ただ、苦しみを積み重ねただけ
よ」

「……す、すみません」

シドウをここまで追い詰めることが出来るとは、やはりサラはすごい。
い。

そんな認識をスバルは持った。

シドウは険悪な雰囲気になりつつあることに気付いて、慌てて言った。

「と、とにかくこの6人でのチームを発表するぞ。

まずはチームB、俺とスバルだ」

「ええー！ーっ！」

その声を上げたのはミソラ。

まあ、二人組ならスバルと一緒に良かったなーと思うのは必然だったのだが……

「だって、お前達と一緒にしたら仕事にならない気がしてな……」

「なんですかそれえっ！」

シドウがぼそつと呟いた言葉にミソラは猛反発する。

「私は仕事の時はちゃんとやります！普段だってそうなんですから！だから、考え直してください！」

しかし、シドウはニヤツといじわるな笑みを浮かべてミソラの前で口笛を吹きながら言った。

「そうかもしれないけどな……」

でも、確かミソラは前にスバルに会うためにスケジュールをずらしたとか……」

「はわわわわわっ！」

明らかに動揺したミソラは腕をぶんぶん振って否定した。

「そ、そんなことあるわけ……」

「あるかもしれないだろう？」

サテラポリスの情報収集力はすごいんだぜ？」

何も言えなくなったミソラ。

そんなミソラは無視してシドウは次のチームを発表した。

「チームCがミソラとサラ、チームDがゴン太とツカサだ。

各チームはそれぞれ……」

そう言ってシドウはホールの地図を表示するとそれぞれの場所を指示していく。

シドウが表示されている地図に触れると一部の場所に色がついて色に応じてA、B、C、Dが表示された。

「各チームの担当区域はこの辺だ。では当日よろしく頼む」
「あ、あの……」

その時、ミソラが申し訳なさそうに手を上げた。
もう片方にはミソラのハンターが握られていた。

「さっき、事務所のほうに確認したら……」

今月は忙しいらしくて、スケジュールが詰まっているから
あらかじめ設定しておいた学校に行く日と仕事の日の数を変えるこ
とはできないそうです……。だから、私はこの日、行けないかと…
…」

それを聞いていたシドウは少し首をひねって

「そうか……じゃあ、少し無理を言うか」

そう言うとシドウはハンターをいじりだした。

「よし、これでオツケーだ」

シドウは問題ないよと手を振った。

それを見てスバルやミソラは

「？」

首をひねるが、それがわかるのは数日後のことだった。

「まさか学校のクラス全員ごと招待するとはね……」

「確かに、これなら学校に出席する日にカウントすれば出席日数も足りるから

大丈夫なんだよね」

さすが現役アイドル、小学生のくせに出席日数なんて知っています。スバルはミソラを見るとゆっくりと笑顔を見せる。

「当日、がんばろうねミソラちゃん」

「うん!!」

そしてまた二人で笑顔になる光景をやはり他の男子諸君がうらやましそうに見ているのは言うまでもない。

その頃、ドクターはとある部屋にいた。

「メイク、お前に仕事を頼みたい」

『え？ぼくですか？』

そうドクターにこたえたのは一体の電波体。

くすんだ青色の電波をした体でところどころに人間が道具入れとして使うような

ポーチのようなものが付いている。

頭の部分には鉢巻きのようなものが巻かれており、片方の目の部分にも

特殊なゴーグルのようなものがつけられている。

少し渋るような声を出すメイクに、ドクターは手を壁際に向け

「今回は臨時ボーナスも出すが？」

いくつかあるものを出現させた。

すると、それを見たメイクの表情がさつと変わった。

その様子を満足げに見ながらドクターはさらに付け足すように話しかける。

「これに興味はあるだろう？先日手に入れたものだが、お前に預けて使ってもらったほうがこちらとしても有益だと思っし何よりお前が一番使いたいだろう？」

なんなら、今回さつそくこれを使って“作成”しても構わないが？」

それが決定打だった。

目を輝かせたメイクは即座に頷き「やります！」と一言言った。

ドクターは口元を曲げ笑うとその部屋を後にした。

部屋を出るとき、オペレーターの間人はゆっくりと頭を下げる。

「これであとは……まあ大丈夫か？」

今回はそう簡単につまくいかないかもしれないから、人数は相当割いたからな……」

当日に向け、それぞれが着々と準備を進めていた。

第42話 その日に向けて（後書き）

とうとうここまで来ました……

次回からいよいよビッグホール編です。

第43話 BATTLE OF BIGHALL! ? (前書き)

もうしわけありません

41話で大臣の名前が「ダラディエ」になっていましたが
正しくは「グラディエ」です。

他の場所でも間違っていたらご指摘お願いします。

第43話 BATTLE OF BIG HALL! ?

とうとう、その日が来た。

ニホンの中でも、よほど大物のアーティストや全国的な行事にしか使用されない大きなドーム状の建物、それがニホン特技館大ホール、通称ビッグホールである。

そして今日、そこではD国の大臣、グラディエ大臣がわざわざニホンへまで来て演説を行うのだ。そのような行事だからだろうか

「スゲエ……偉そうな人ばかりだ」

呟いたゴン太を始め、スバルのクラスメートたちはあっけにとられていた。

目の前には確かに高そうなスーツを着た人たちでいっぱい、その光景にスバルだけでなくミソラやキザマロもぼかんと口を開けていた。

ただ、例外はルナとジャックだった。

二人は別にそんなの普通だ、という目で見ている。

「よし、全員来ているな！」

ははは、さすがにすごい人たちばかりだな」

育田はのんきに笑っている。

「おお、やっと見つけたぞスバル」

そう言って固まったスバルの肩に手を置いたのはシドウだった。

「あ、暁さん」

「お前、ずいぶんマヌケな表情だったぞ？まあ、他の奴らもほとんどが似たり寄ったりだったんだけどな」

笑って言うシドウはスバルを始め警護に当たるメンバーを手招きする。

「先生にはもう伝えてある。まずは警備の場所に行く前にちょっとついてこい」

「どうしたんですか？」

ミソラの質問にシドウは歩きだしながら返事をする。

「なに、ちょっとした挨拶だ。しっかりついてこいよ」

一行がたどりついたのは見るからに豪華な造りの扉の前。しかもそのわきには警備のサテラポリスさえいる。シドウがパスを見せると、警備の一人が頷いて扉の中へ入って行った。

その間にシドウがスバルたちにもパスを配る。

「絶対なくすなよ。なくしたらとても怒られるからな　俺が」

やがて扉が開き、中には言ったサテラポリスが入って良いと手で合図した。

「それじゃあ行くっか」

「いったい誰がいるんですか？」

スバルの問いに帰ってきたのはただ一言

「今日の主人公である人さ」

そしてそれだけで十分だった。

中に入ると、真っ先に目に入ったのは一人の人物。

それは黒いふかふかのソファに座った一人の男性。

スーツ姿で襟にはD国のシンボルである剣をかたどった国旗のバッジをつけており、

髪は所々にウエーブがかかる白髪でひげを伸ばしていた。

しわが刻まれた顔の中にある目は閉じられており、腕を組んでいる。

男性は目を開くと立ち上がり軽く一礼した。

それに応えるかのように、その場にいた子供たち以外全員も頭を男性に下げる。

「はじめましてみなさん、私はD国大臣を務めております、グラディエです。」

本日はわざわざ警備のためにありがとうございます」

老人とは思えない凛とした声には大臣としての厳格さや風格が感じられる。

シドゥも頭を下げると自己紹介した。

「本日警備をいたします、サテラポリスの暁シドゥです。」

この子たちは電波体やウィザードによる襲撃への警備を担当してもらいます。

みな電波変換が可能で、経験も豊富ですのでどうかご心配なく」

いつもと比べて段違いに丁寧なシドウにスバルたちは違和感を覚えてしまう。

その時、

「ふん、子供にまで警備をさせるとはワシはこの国の考え方を疑うな。

このような時にはわが国では訓練された選りすぐりの兵士を警備に使うがな」

「そんなことは言っではいけませんよ。

いくら訓練されていようと電波変換はそうできるものではありません。それに、その子は確かあの有名な少年ではないのですか？もしそうであれば実績としても十分です」

壁側に立っていた二人がそう反応する。

最初に口を開いたのは向かって右側の痩せこけて厳しい目をした人で次に口を開いたのは向かって左側の丸顔で優しい目をした人、メガネをかけた人である。

「彼らは私の優秀な部下です。右側がブライト、左側がホワールです」

グラディエが紹介した。

次に、シドウは部屋にいた他のスタッフ達にも挨拶をする。

それを見てようやく要領がつかめてきたスバルたちも慌てて挨拶をした。

「そうですね。お若いのにすばらしいことです。

私、今回グラディエ様の接待を任されています筑紫 忠一郎と申します」

細目でタキシードを完璧に着こなした初老の男性が一步前に出て右手を胸にあてると深々と頭を下げた。次にやや太った男性が前に出る。

「料理長の、ファイエンです。よろしく」

こうした感じでスタッフの紹介が始まり最後の人の番になった。左手に持ったハンターから出したメモ機能ですっとメモをとっていたその女性は自分の番になったことに気付くと慌てて頭を下げた。

「わ、私はこのニホン特技館大ホールの従業員で今回の演説会の企画や準備、および本日のサポートをさせていただく真寧寺まねいじ律りつです……」

緊張したせいか、思わずハンターを落としてしまう。慌てて拾うと律は何度も頭を下げた。

「すみませんすみません！どうぞよろしく願います……」

ショートヘアで幼い目をした律は声が段々小さくなっていた。顔合わせが終わると、いよいよ警備。

グラディエの部屋を出たスバルたちは演説が行われる部屋のほうへ歩き出した。

第43話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

ついに来ましたビッグホール編!

このペースでどんどん進むことができればいいですね。

次かその次には事件を起こそうかと思います。

第44話 BATTLE OF BIGHALL! ?

演説が行われる部屋へむかって、スバルたちは長い廊下を歩いていった。

シドウに従い、突き当たりの角を右に曲がると

「うおっ!?!」

「すごい……」

そこからのびる廊下の両側にはずらつと鎧や甲冑が並んでいた。まったく同じ形に同じ態勢が続くこの光景にミソラは少し寒気がした。

鎧に見守られる廊下の先には先ほどの部屋の扉とは比べ物にならないほどの豪華の扉があった。

「さっきのより断然すごい……」

「まあ、あの中がメインホールだからなあ。

扉だけでその反応ならお前達中に入れないほうがいいかもしれないな……。

心臓発作を起こしたら困る」

「「そっ、そんなに!?!」」

シドウの言葉に一同は驚き固まる。

「ミソラはここに来たことはないのか?」

シドウがミソラに質問するとミソラは首を横に振った。

「いえ、ありません……」。

奏先輩は来たことがあるって言ってたんですけどそれはそれはすごい
かったって
興奮していました」

その言葉にシドウはうんうんと頷く。

「このホールってなぜか豪華なんだよな……
まあいいや、集合場所はここよりもうちよつと先だから、ほら行く
ぞ！」

え、入らないの？

後ろの子供たちがそんな視線をシドウにぶつけていたがシドウは必
死で耐えた。

というか、気づかないふりをしていた。

(いや、あの中ってホントすごいから……。お楽しみ、ってこと
にしよう)

そのままシドウ達は歩いていく。

「あー、ヤバい。遅刻だな」

「いや、なんでそんなにのんびりしてるのよー！」

「うん、こりゃ遅刻だね」

「あんたも！何よ、有名だからってそのサングラスにかつらに帽子
つて……」

「え？必需品でしょ？」

「……いや、さすがに俺でもおかしいと思うぞ……」

スバル達から結構離れた場所で、3人の少年少女が走っていた。当然、遅刻しそうだからである。

「そついえばさ」

少年が金髪のほうの少女に話しかける。

「あいつ、一緒に行ったのか？」

その質問に少女は走りながら答えた。

「ええ、確か、クラスに一人欠席がいる、って言うことが分かってうまく潜り込んだみたいよ。全然ばれなかったってさっき連絡が来たわ」

「そっか。あいつもいるし、今日は大丈夫だろうな」

そんな会話に変装しているほうの少女は首をかしげる。

「私にわからない話しないでよ……」

「あれ、おつかしいなあ……」

廊下の真ん中でシドウは立ち止って首をかしげていた。

「どうしたんですか？」

「いや、その……道がわからなくなった」

「はぁ!?!」「」

照れ笑いでごまかそうとするシドウにさすがに啞然とする一行。
見ればアシッドまで出てきてため息をついていた。

『まったく、あなたはいつも……』

ピリリリリリリリリ!

その時、ハンターが鳴った。

それはシドウのハンターだった。

着信を見たとき、シドウの顔色がさーっと青くなる。

「やばっ……」

おそるおそる電話をつなぐ。

「ぬぁぁぁにをやってるんですかぁぁぁぁぁ!!
もう時間でしょうがあッ!」

つないだ瞬間画面からほとばしる激昂の叫び。

金髪を振りみだし画面の奥で怒鳴り散らしているのはサラだった。

「い、いや……すまん」

「すまんですんだらサテラポリスはいらないでしょうがあ!!」

さんざん怒鳴り散らすサラに画面の奥でストップをかける者がいた。

「いいかげんそのへんでやめたらどうだ？」

「少しは落ち着きなさいよ……」

その画面に映っていたのは……

「え？」

「あれ？」

スバルとミソラが驚いた声を上げる。

「兄さん？」

「先輩？」

そこに映ったのは、まぎれもなくセイヤと麗音だった。

第44話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

まだバトルには入れそうもありません……
何とかします

第45話 BATTLE OF BIGHALL! ?

警備が本格的に始まる前だからか、二人の警備員が楽にしてこんな話をしていた。

「おい、お前ここの怪談知っているか？」

「怪談？」

「ああ、最近話題になっているんだよ。ここの鎧がな……」

「鎧？」

怪訝な顔をしてルナがそうキザマロに返す。

それを見てキザマロは得意そうにメガネをつり上げて話を続けた。

「このビッグホールの廊下に鎧が並んでいるのは見ましたよね？」

ある日、この鎧の一つが忽然と姿を消したそうです」

「はぁ……」

ルナは何を言っているんだというような目でキザマロを見る。

それにも気付かれずにキザマロはペラペラしゃべり続けた。

「当然、驚いた警備員はホール中を探し回り、また何度も鎧の数を数えなおしたそうなんですが、とうとう消えた一つは見つからなかったそうです」

「なんだよそれ、ただ盗まれただけじゃねえか」

退屈そうにしていたジャックまでもが話に割り込む。
やれやれとため息をつくジャックにキザマロは慌てて言った。

「あ、いえ……この話には続きがあるんです」

「え？ そうなの？」

「はい、実は……」

「その鎧が戻ってきた!？」

「そうなんだよ、驚いたか？ 鎧がなくなってからちょうど1週間後、鎧が消えた日と同じようにある警備員が夜の見回りをしていると、ぽっかり空いていたスペースにいつの間にか鎧が戻ってきていたんだ」

「はあ!？」

警備員は驚いて声を上げた。

「はあ!？」

ジャックも驚きの声を上げる。

「おいおい、盗んだやつがわざわざ鎧を戻したって言うのかよ! な

「ぜだ？」

「それをボクに聞かれましても……」

困ったように目を白黒させるキザマロに、さらにルナがたたみかける。

「それで、これのどこが怪談なのよ！」

ルナが怒ったように言うが、そこでキザマロは何も言わない。そしてフツと笑みを浮かべた。

「ここからが本番です。」

鎧が見つかって警備の人はすぐに報告に行こうと鎧に向けました。

……その時、彼は聞いてしまったのです

ごくり、とルナとジャックが息をのむ。

顔が青ざめていく二人にキザマロはゆっくりと告げる。

「……ガシャン……ガシャン……と音がするのです。だんだん近づいてくるその音に

恐怖に震えながら警備員が振りかえると、そこにはゆっくりと歩いてくる鎧の姿が……」

「にゃああああああああっ！！」

限界が来たのか、ルナが大きな悲鳴を上げた。その顔は真っ青になっている。

「お前、怖がりすぎだろ……」

ジャックはあきれ顔になり、キザマロも驚いたような顔をしていた。

なにせ、ルナが涙目になってがたがたと震えていたのだから……。

「……オイ、お前もしかして怖い話苦手なのか……？」

「はっはっはっはっ、そんなのどうせ作り話だろう？ 鎧が動くわけないじゃないか」

「……」

話を聞いていた警備員は急に笑い転げ始めた。

「だいたい、そんなことが……」

「……その警備員が、実は俺だとしたら……？」

突然話をした警備員の雰囲気が変わる。

急に暗い表情になりゆっくりともう一人の警備員のほつを見る。

「はっはっはっはっ、そんなわけが……ある……のか……？」

その雰囲気笑笑っていた警備員の顔がこわばって行く。

問いかけに頷いた警備員は話を続けた。

「多くの人に話したが、だれも信じてはくれなかった。……当然だな、俺だって信じなかっただろう。だけど、これは本当なんだ！俺は、確かに……」

カシャン。

第45話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

動き始めましたねえ。

この原稿、実は眠気覚ましに学校で少しづつ書いていました。
このやり方、割といいかもしません。

もう少し騒ぎが大きくなってからバトルに入る予定です。

第46話 BATTLE OF BIGHALL! ?

警備員たちが悲鳴を上げる少し前……

シドウ達はいまだ集合場所にたどり着いていなかった。

「……なぜだ？」

『あなたが方向音痴だからではないですか？』

これでもう何度目になるかわからない行き止まりを目の当たりにしてシドウは茫然としていた。

その時、ハンターがまたびりり理とけたたましい音をあげる。その音にびくつとするシドウ。

『出ますか？』

「もう勘弁してくれ……」

これまで電話でサラに怒鳴られること3回。

さすがのシドウもそれにはぐったりとしていた。

「でも、出なかつたら出なかつたで後が大変ですよ？」

さらつと現実的なことを言うのはツカサだ。

それを聞いて、シドウは至極嫌そうな顔でハンターを見ると目をつぶってゆっくりとボタンに指を近づけていった。

ポチッ

「まだですか！いくらなんでも遅すぎる！……」

案の定、飛び込んできたサラの怒鳴り声にシドウ以下全員がげんなりした顔になる。

サラが映った映像はサラが怒鳴るのに合わせて揺れて……というかぴよんぴよんとびはねていた。

「遅い！遅い！！遅~~~~~~~~い！！！！」

もはや駄々をこねるようなそのセリフにスバル達はどこかで聞いたことがあるような感覚を覚えた。

「このセリフ、どう考えても……」

「ハーックション！！」

とある場所で、生徒会長であり委員長である彼女は盛大にくしゃみをした。

「……？誰か噂でもしているのかしら？

そうよね、この私は優秀だから話題になって誰かが噂していてもおかしくは……」

つくづく幸せな人である。

「とにかく、本当にもう近くまで来ているんだ。うん、それじゃあ」
シドウが謝り、何とか4度目の電話は無事(?)終わった。

「はあ、疲れた……」

その表情はげっそりとしており、とても今から警備の仕事をする人とは思えない。

彼はゆっくりと子供達を振り向くに行った。

「よし、それじゃあそろそろ行くつか。これ以上怒らせると……」

だがその時、

「「うわあああああああああああああああああああああああああああああ
あ!」「」

大きな悲鳴が廊下の先から聞こえて来た。

その悲鳴に、辺りの人々はいったい何が起こったのかとざわめきだし
だんだんと騒がしくなっていた。

「すみません、通してください!」

「お、落ち着いてくださいみなさん!」

ざわめきだした人々をなだめようと慌ててやってきた律が呼び掛け
る。

「落ち着いてください！」
「道を開けてください！落ち着いて！」

シドウ達も声をあげ人をかき分けて人が群集するその廊下の先へと行こうとする。

しかし、逃げ惑う人々に阻まれてシドウ達はなかなか先へ進むことが出来ない。

そんな中、スバルとミソラはうまく人の群れをくぐりぬけることが出来た。

それに気づいたシドウは一度ため息をつくと大声を出して言った。

「ミソラ、ペア交代してやる、スバルと一緒に廊下の先へ行け！」

「はい！」

心の中でよくやった自分とガッツポーズをしたミソラは

「行こう、スバル君！」

「うん！」

スバルと共に廊下の先へ走って行った。

それを見届けるとシドウは次にゴン太とツカサに指示を出す。

「お前たちは律さんを手伝って、そのあと警備に合流しろ！俺に連絡してくれればいい！」

「わかりました！」

律のもとに走っていく二人。

二人が来て律は多少面喰ったようだったが、シドウはそのあとハツとする。

「そつだ、このことを知らせないと……」

逆に自分からサラに電話をかけるとシドウは走りだした。

廊下の先を走っていると、二人の警備員が半狂乱になって走ってきた。

「うわああああ!」

「た、助けて……!」

スバル達の横を走り抜けて言った二人はしきりに「鎧が、鎧が……」と繰り返していた。

「どついついことかな?」

ミソラの問いはすぐに現実が答えをくれた。

カシャン。

ゆっくりとそれは現れる。

「な……何あれ……」

カシャン。

体を引きずるようにして歩いていた鎧はスバルとミソラを見ると足

をとめた。

『デンパヘンカンカノウナニンゲンニメイヲハツケン。トウバツシマス』

「と、討伐……!？」

辺りに不穏な雰囲気広がっていった……。

第46話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

鎧が宣戦布告を行いました。

これを機に、騒ぎはもっと大きくなります。

ちなみにこのビッグホール編、下手をすると軽く10話は超えるか
もしれません……

第47話 BATTLE OF BIGHALL! ?

鎧はスバル達の前で立ち止まったまま動かず、同時にスバル達もまたその禍々しいプレッシャーに圧倒されて動けなかった。

鎧の大きさは約2.5m、小学生のスバル達から見ればとてつもなく大きいのだ。

「今、討伐って……」

ミソラの声は少し震えていた。

「大丈夫、何とかするから」

こんなときでもそんなことをさらっと言えるスバルは鈍感なのか天然なのか。

しかし、その言葉でミソラの顔が少し赤く染まったのはミソラを含めだれも気付かなかった。

「ウィザード・オン！」

スバルがハンターを前に出して叫ぶとウィザードであるウォーロックが現れる。

ずっと戦いたくてうずうずしていたのだろう、その目は闘志にもえていて

素振りまでしていた。

『オウ、スバル！あいつをぶったおせばいいんだな！』

「頼むよ、ロック！」

ウォーロックは一瞬で鎧のそばに行く

『オラアアアッ!』

自慢の爪を振りおろした。

しかし。

ガキイツ!

そんな不快な金属音を立てただけで、鎧自体には傷一つなかった。

「そんな……」

『……』

黙っていた鎧は次の瞬間、いきなり腕をふるうとウォーロックを壁に突き飛ばした。

不意を突かれ直撃を受けるウォーロック。

『ぐはっ……』

「ロック!」

突き飛ばされたウォーロックにスバルは慌てて駆け寄った。

一方、鎧のほうも改めてスバル達と敵だと認識した。

そして右腕を伸ばす。

『マテリアライズ…… “マサカリ”』

「え!?!」

ミソラが驚きの声をあげた。

ウン

低いうなり声のような音が聞こえたかと思うと、鎧の右手にはマテリアルウェーブによる武器が握られていたのだ。

長い柄を持ち、片方の端は丸く膨らんでおりあふれんばかりの電波エネルギーが渦巻いている。

もう一方の先には斧の刃を模したハンマーのようなものがあつた。

「うそ……武器も使うの？」

「くっ……ミソラちゃん、電波変換しよう！」

鎧の攻撃から逃れるために、スバルはウォーロックをハンターに呼び戻した。

そしてハンターを掲げ叫ぶ。

「トランスコード シューティングスターロックマン！！」

ミソラも同じように電波変換する。

「トランスコード004 ハープ・ノート！！」

鎧の前に青い姿をしたロックマンとピンクのボディーに青いギターを持つ

ハープ・ノートが立ちふさがる。

「よし、これであの鎧をやりすげして、」

『先に行けると思った？』

突然鎧から声がした。

その声は面白そうに笑いながら言う。

『ムダムダ。それじゃいくよー』

声と共に、鎧は左手をロックマン達のほうに向けた。

『ディナイウエーブ!!』

左手から出た電波は避けられないほどに広がりロックマンとハーブ・ノートを包み込んだ。

次の瞬間、二人の様子が変わった。

「う、うう……」

「何、この感じ……」

頭や胸をおさえ苦しむ二人。どうやら同じようにウィザードも苦しんでいるようだった。

『チツ、頭がいてえぜ……』

『ホント、なんなのよこの感じ……』

その間に二人の体はいつの間にかウィザードと離れていき気がついた時にはすでに電波変換は解けてしまっていた。

「どうして……?」

『アーツハツハツハツハ!』

戸惑うスバル達に声は面白そうにけたけた笑う。

『このディナイウエーブは電波変換を無効化する。だけどこの鎧の

コントロールシステムはここ、鎧の電腦の中だからねえ。』

声は愉快そうに言い、そして堂々と言い放った。

『ぼくはメイク。この電腦から鎧を動かしているんだけど、来れる？』

「くっ……」

電腦の中にいこうにも、電波変換を封じられた以上なすすべがないのだ。

そこに鎧はガシャン、ガシャンと迫ってきて今にも右腕を振り上げようとしていた。

その時

『うわっ！』

何かが鎧に当たり、鎧はバランスを崩してガツシャアアアンと大きな音を立て倒れた。

「援軍到着、だね」

スバルやミソラの後ろに息を切らして立っていたのは、デスティルを従えたセイヤと

「……誰？」

相手と同じく鎧を身にまとい槍を持った電波人間だった。スバルの「誰？」発言にがっくりと肩を落とす鎧の電波人間。

「あーあ、かわいそうに……。
じゃ、デステイル、行くよ」

苦笑してセイヤがデステイルに手を伸ばすと、デステイルの体はねじ曲がって変化し、
巨大な鎌になった。

柄と刃の一部は真っ黒に染まり、柄の端にはデステイルの顔にあたる髑髏が付いている。
電波変換していない実体のままでセイヤはデステイルが変化した鎌を構えた。

「それじゃ、あの鎧を何とかしようか……。奏」

第47話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

ずいぶん遅くなりました……

というのも、学校で書いていた原稿を一時なくし、仕方なく思い出しながら書いていました。

しょうがないので学校で次の話の原稿を書き始めたところ急にこの話の原稿が出てきました。

とにかく

おくれてすみませんでした。

そして一つ質問です。

このBIGHALL編の次の話のために、ミソラの母親のことが知りたいのですが名前がわかりません。どなたか教えていただけないでしょうか？

口調や話し方も教えていただけると助かります……

第48話 BATTLE OF BIGHALL! ?

(前書き)

改めてお詫び申し話げます。

今さら気がついたのですが、

「グランドホール」と最初言っていたものが

いつのまにか「ビッグホール」に変わっていました。

申し訳ありませんでした。

とりあえず改正して「ビッグホール」で統一する方向でいきたいと思えます。

まだおかしいところがあればどんどん教えてください。

第48話 BATTLE OF BIGHALL! ?

「ハア、ハア、ハア……」

シドウは走ってグラディエの部屋に向かい、ノックをすると部屋に入る。

部屋の中ではグラディエをはじめホワール、ブライトなどが
いったいどうしたのだろうというような顔をしていた。

「いったい何の騒ぎなのですか？何やら外が騒がしいようですが」
代表してグラディエがシドウに質問した。
その質問にシドウは一呼吸すると言った。

「今、ロビー付近の廊下で何かパニックが起きているようです。
二人が確認に行っていますが、詳しいことは、まだ……」

~~~~~

そこに、重苦しい行進曲が流れた。その曲はグラディエのハンター  
から聞こえていた。

「む、メールか？こんなときに……」

そういつてメールを開いたグラディエは次の瞬間目を見開いた。

「これは……ッ」

「見せてください、大臣！」

シドウが慌てて駆け寄り、ハンターの画面を覗き込む。  
そこにはこんなことが書かれていた……。

レルド・グラディエ

お前は生きて国に返さない。ここがお前の死に場所だ。

このホールに今日、2種類の爆弾を仕掛けておいた。

1種類はウイルス爆弾、大量にウイルスを発生させ、警備システムを壊す。

もちろんウイルスの一部は実体化するようなプログラムも組み込んでおいた。

もう1種類はきわめて普通のシンプルな爆弾だ。このホールが崩れるほどのな。

このメールが開かれた時点で、すべてのタイマーは起動する。

ついでに、そのメールを持つ人間……つまり、レルド・グラディエが今いる部屋を出た時点で起爆装置が作動する。もちろん、他の客達が逃げてモアウト。

解除してほしいければ、要求が一つある。

まずは人払いをしる。指示は追って伝える。

くれぐれも妙なことはしないことだ。

忘れるな、常に起爆プログラムと停止プログラムの両方は私の手元にある。

P・S タイマーはウイルス爆弾は起動してから5分後、普通のダイナマイトは2時間後に爆発するようにしておいたぞ

「普通のダイナマイトって、普通じゃねえし……」。

しかもなんだよこの最後のふざけた星マークは……。

……って、5分後お!!!?」

一通りの律っ込みを終えたシドウが時計を確認すると、残された時

間はすでに3分を切っていた。

「ど、どうするのですか……?」

「落ち着きたまえ。……私はとりあえず、この部屋に残ります。それでよろしいですか?」

慌てるホワールにグラディエはあくまで冷静な態度でシドウに指示を仰いだ。

シドウはグラディエを見るとゆっくりと頷いて言った。

「わかりました。我々はこの部屋から出しましょう」

「しかし!」

ブライトの抗議にもシドウは首を横に振る。

「ここは下手に犯人を刺激することは得策ではありません。

筑紫さん、真寧寺さんに連絡して誰もホールから出さないようにしていただけますか」

「かしこまりました」

恭しく礼をすると筑紫はハンターを取り出し、真寧寺を呼び出した。表示された仮面には少し疲れた顔をした真寧寺が映っている。

筑紫はシドウに言われ通り真寧寺に指示を伝えた。

どうしました?こちらは何かみなさんに落ち着いていたいたところですが……

「爆弾がこのホールに仕掛けられました。大臣あてに届いた脅迫メールによると

誰も外に出すなということですよ」

ふえええっ!ちよっと、どうということですか!?

話を聞いた真寧寺は驚いた声をあげた。

「詳しくはメールで伝えます。何しろ、脅迫として命令が出されていますし騒ぎを広げたくはありませんので」

「あ、そうだ、ちょっといいですか」

そこでシドウが手をあげて口を開く。

「一つ咳払いをすると、凜とした声で宣言する。」

「今回のこの爆弾のことはここにいる人物……すなわちこの私、グラディエ大臣、

ホワールさん、ブライトさん、筑紫さん、ファイエンさん。

および真寧寺さんと警備である自分の仲間、この数名以外には口外しないよう

かん口令を出します。

なにとぞご協力をお願いします」

全員が頷いたのを見て、シドウは扉を開けた。

第48話 BATTLE OF BIGHALL!

？  
(後書き)

今回は時間がかかった割に短いです。

ただ、これからの大体の流れは既に決めてあります。

あと、前話で書いたミソラの母親について、

このビッグホールの間情報を集めようと思っています。

何かご存知の方はどんどん教えてくださいださると幸いです。



第49話 BATTLE OF BIGHALL! ?

シドウはドアを閉めると、廊下を走りだす。走りながらハンターを操作して電話をかけた。相手はサラだ。

……あらかうかした？

「まずいことになった……」

ポップアップに映し出されてサラにシドウは渋い顔をした。サラもそれを見てひよっとしてという顔になる。

もしかして……鎧のこと？

「は？」

予想外の答えにシドウは思わず足を止めてしまった。どういふことかと尋ねたシドウにサラはやれやれといった顔をして言った。

さっき、ロビーのほうで騒ぎがあったでしょ。

なんでも、廊下にあったたくさんさんの鎧のうち、1つが突然動きだしたらしいのよ。

あなたも鎧は見たでしょう？

その言葉にシドウは頷く。

あんな大きな鎧が動き出したら、それは騒ぎになるだろう。

あなたはスバルとミソラを行かせたみたいだけど、結構ヤバいことになってるみたいよ

「なっ……」

いや、そもそもなんで俺が二人を行かせたことを知っているんだ？」  
あの時、その場にはサラはいなかった。本来は知っているはずがな  
いのだ。

しかしそんなシドウの懸念をよそにサラは普通にすらすらと答える。

私のウィザード、マリアの能力よ。

自分の周りにいる電波体が具体的にどこにいるか、またそれはどんな奴かがわかるんだけど……。確か、今回の警備についての話し合いの時に教えたわよね？

『確かに言っていましたね』

「ううん……」

攻めるようなサラとそれに乗っかるように答えたアシッドに対し、シドウは何も言えずただ唸るしかない。シドウはそれよりも、と半ば強引に話を戻す。

「二人がやばいってどういうことだ？」

あの鎧からも電波体の反応があったそうよ。その電波体がおそろく鎧を動かしているんでしょうね。どういう仕組みかは分からないけれど。

心配はいらないわ。私もセイヤとあの女を行かせたから

「そうか……」

シドウはほっとする。

……で、あなたの言う“ヤバいこと”って何？

「ああ、それが実は……」

ヴー！ヴー！ヴー！

突如辺りにサイレンが鳴り響き、その音は電話の奥のサラにも届く。

ちよっと、何今の！

「つまりは、こういうことだ！」

時にして、すでに5分がたっていた。

それはつまり……

(ウイルス爆弾が、作動しちゃった……)

シドウが気づいたのと同時に、辺りからウイルスが続々と現れる。

それはどうやらサラのほうも同じだったようで、電話の向こうから焦った声が聞こえてくる。

なんでこんなにたくさんウイルスがいるのよ！警備さぼってんじやないのお！！

少しピントがずれた指摘に、シドウはものすごく省略した説明をする。

「ウイルス爆弾が仕掛けられていて、今作動した！」

あと1時間55分後にダイナマイトが爆発してホールが吹っ飛ぶ！できればそれまでに

ダイナマイトのありかを見つけておいてくれ！以上！」

一方的にまくし立ててシドウは即、サラから壮大なる大声が帰ってくる前に電話を切った。

そしてそのまま走りだしていった。

「ハ、あいつ……切りやがったわ」  
『忙しいんじゃないですか？』

毒づくサラにマリアがとりなすが、サラの怒りは止まらない。

「まったく……これだからあの人は……」

あふれてくるウイルスたちがサラのほうに迫ってくるのだが……

ギロリ

サラの怒りが盛大に含まれた視線にウイルスはひるまずにはいられない。

そろそろと後ずさりを始めるウイルスたちだが、仮にも警備であるサラはウイルスを退治しなくてはならない。

「マリア……電波変換よ」

一方、シドウのもとには一件のメールが来ていた。

メールを確認して見ると、差出人はグラディエであった。

メールによると、あの後犯人から指示があり、部屋の外の人間とはメールをしてもよいが

電話は禁じられたという。むろん、人払いは継続されておりグラディエのいる部屋に誰かを近づけてはならないといい、それは警備をおいてもダメということらしい。

また、真寧寺がホワール達を始め他の客達をホールの観客席に座らせたという連絡も合わせて書かれていた。

「いったい、何が狙いなんだろうな……」

そんなことを考えながらシドウはそのメールをサラにも転送するとまた走りだす。  
だが……

『シドウ！』

アシッドが突然声を出した。

「どうした、アシッド？」

『近くに……あいつがいます』

「え？」

シドウが驚くと同時に、廊下の先でバチバチっという音がする。

「まさか……」

『また会ったな。暁』

シドウの視線の先では、フォース……いや、その姿でいうならば鮫崎 タイガが腕を組んで壁に寄りかかって立っていた。  
そしてタイガは獰猛そうな獣の笑みを浮かべる。

一方……

コツツ、コツツと足音が響く廊下があった。

足音の主はあるドアの前まで歩くと、ドアの前で立ち止まる。

そしてコンコンとドアをノックをする。

その奥では、部屋にいた唯一の人間……グラディエがゆっくりと視線をあげた。

第49話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

続々と戦いの構図ができていますね

ですが……もう7回です。

バトルのことを考えると、終わるのはいつになることやら(涙)

第50話 BATTLE OF BIGHALL! ? (前書き)

とうとう50話行きました!

皆様が読んでくれている、そのことが自分の励みとなりここまで来れました。

これからもどうぞよろしくお願いいたします!



第50話 BATTLE OF BIGHALL! ?

ガギーン！ギーン！

とある廊下ではマサカリをふるう鎧とデステイルが変化した鎌をふるうセイヤとが

激しい攻防を見せていた。しかし、鎧を攻めるのはセイヤだけではなかった。

「エアピックシュート！」

後ろからナイト・バトラーへと電波変換した麗音が槍を突くように前に出すと

その先にいた鎧が吹っ飛んだ。

『うわあおー！』

メイクが声をあげながら鎧は倒れこむ。

その光景をスバルとミソラはあっけにとられて見ていた。

「すごい……」

「圧倒的だね……」

そんな二人へセイヤは顔を向けると、二人に提案をした。

「お前達、あの鎧の電腦に行って内部から直接やつを止めてくれ」

「「ええっ!?!」」

驚く二人にセイヤは少し困ったような笑顔を見せた。

「奏はまだ電波変換に慣れてないからとても電腦の奥まで行くのは  
厳しい。」

それよりは、俺と奏が外に残ってこいつを足止めするほうがより現  
实的じゃないかな、って思うんだけど……」

「うーん……」

セイヤの言うことはもっともである。

その時、ナイト・バトラーの横に一体の電波体が現れた。  
紺色の電波の体を持つ電波体は現れた途端大声で叫んだ。

『何を迷っておるのだ、少年!!』

セイヤ殿の提案は的確なものだ、迷う必要などないではないか!』

「え……」

ハイテンションな電波体にスバルだけではなくセイヤ、そしてメイ  
クまでもが圧倒される。

一同の視線に気がついた電波体は一度咳払いをすると高らかに叫ぶ。

『これは失礼、紹介が遅れたな。』

我が名はナイト!レディー!に使える騎士である!』

「はあ……」

全員があっけにとられるなか、ナイト・バトラー……となっっている  
麗音は恥ずかしさのあまり赤面する。しかし、顔は兜をつけている  
ので誰も気がつかない。

つくづく、かわいそうである。

そこでやっとメイクは我に返る。

『って、今戦闘中ではないか!何をびっくりしているんだ、ぼくは

！』

鎧はゆっくりと体を持ち上げると右腕を振り上げ

スパン

『は？』

「悪いね、その腕邪魔だから切ることにした」

まったく悪びれた様子もなくセイヤが言った。

その手には鎌がきらりと光っている。

『こんの、人間のままでなせ……』

鎧は残った左腕を伸ばしてセイヤをつかもつとするが、その腕はとんでもない衝撃を受け  
みごとに鎧本体から離れどこかへと飛んでいく。

『んなっ！？』

メイクが驚いた声をあげて振り返ると、そこには槍を構えたナイト・バトラーがいた。

「私は電波変換してるから、この腕も邪魔なのよね」  
（しまったあああ！そういうえばそうだった、とつととディナイウエーブつかつときゃよかったあ！！）

メイク、自分の過ちに気付き茫然。

「スバル！ミソラ！今のうちに電腦に入れ！！」

「はい！」  
「わかりました！」

再びスバルとミソラは電波変換すると、鎧の電腦の中に入って行く。

『くっ………入ってくるなあ!!』

メイクが叫んだ途端、切り離された右腕とふっ飛ばされた左腕が宙に浮く。

「へ？」

「あれ？」

切り離れた本人とふっ飛ばした本人は思わず首をかしげる。  
浮いた腕はなんと鎧本体のところへまっすぐと飛んで行き、そのままくっついてしまった。

「………なんで？」

『電磁力で浮かせて、くっつけたただけだけど?』

メイクはご丁寧にも解説してくれた。

鎧は一、二回腕を回すとセイヤ達のほうを見る。

『邪魔がなかに入ってしまったが、まあ仕方ない。

せめてお前達だけでもいいから、この鎧でぶつとばしてやる!!』

左手をナイト・バトラーにむけると

『デイナーウエーブ!!』

「くっ………」

鎧の手から出た電波はナイト・バトラーにあたるとナイト・バトラーは苦しみ始める。

「頭が……割れそう……」

『これで、まず一人……』

スパン

再び宙に舞う左腕。

それと同時にディナイウエーブは解け、ナイト・バトラーは肩で息をした。

「ハア、ハア、ハア……危なかったあ」

「よくもやつてくれやがったな。奏は俺がいる限り倒せると思うなよ？」

鎌を鎧に向けてセイヤは堂々と宣言した。

『チツ……やつぱり二人じゃ、この鎧でも足止めされるのか？……』

ロックマンとハーブ・ノートがもう少しでそこにたどりつくというその時、  
メイクが電腦の中でガン、と目の前にあるメイクよりひときわ大きなコントロールシステムをたたいた。

『なら、中のやつらだけでも、振り返ちにしてやるよ……』

第50話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

ビッグホールも8回目、バトルにも少しずつ入っています。

他にも少し、戦ってもらう人たちがいますのでその人たちにも頑張ってもらいます。

そのためにも自分が書かなきゃね……

第51話 BATTLE OF BIGHALL! ?

セイヤと麗音が鎧と一進一退の足止めをしていた頃

その鎧の電腦の中ではロックマンとハーブ・ノットがメイクの元へ急いでいた頃

シドウがかつての親友と対峙していた頃

「ああー、疲れたあ……」

律、ツカサ、ゴン太は何とか客達をホールの客席のほうへ移動させ安心してのほほんとソファに座っていた。

いや、ぐったりと、といったほうが正しいかもしれない。

しかし、3人は気づいていなかった。

シャッターで区切られたとある一画にまだ人がいたことを。

……ウイルス爆弾で誤作動したシャッターに同級生達が閉じ込められていたことを。

「ま、まだいっぱいいますよー！」

キザマロが悲鳴を上げる。

彼にウイルスが接近したとたん、そのウイルスは炎に包まれる。逆方向では他のウイルスがそばにいた女の子に襲いかかるうとしたがそこへ今度は水の竜が飛んで行った。

「ハア、ハア、ハア……」

閉ざされたその場所の中心で奮戦していたのはジャック・コーヴァスとクイーン・ヴァルゴ、そして育田が電波変換したリブラ・バロンスだった。

「チツ……数が多すぎるぜ」

「そう、だな……」

三人は他の子供たちを守りながら戦っていたが、ウイルスのあまりの多さに体力が削られていくばかりだった。

肩で息をするリブラ・バランスの目にふと美影の姿が映った。

じっと自分を見つめる美影に、リブラ・バランスは笑いかける。

「安心しろ。先生達が何とかするから……」

そしてリブラ・バランスは再びウイルスを撃退しようと両腕をふるって回転する。

『……今さら確認することでもありませんが、見えていますよね？』

コクリと頷く美影。ぎゅつと車いすの手をのせる部分を握ると

美影は決意を秘めた目で前を見た。

「……誰かを守るために戦う。そのためにあの3人は必死になって



いる。

なのに、それを手助けすることが出来る力がありながら傍観している私は、いったい何なのでしょうね？」

美影は決めた。

一瞬、彼女の頭の中に過去の記憶がよみがえる。

(…………ツ!!)

頭を振って忌まわしい記憶を頭から追い払う。

そしてハンターを持つと叫んだ。

「トランスコード000！ スラー・ブリーズ!!」

ウィルスの、子供たちの、そして戦っていた3人の視線がその一点に集まる。

PCプログラム・第一解放許可……電波変換要請受諾

合成音の音が聞こえたのと同時に周りに風が吹き荒れた。

風がやんだとき、そこに“美影”はいなかった。

代わりに浮かんでいたのは一人の電波人間。

一見、美影には服装を始め何の変化もないように見えたが、肩と腕、足、そして胴体に

羽を模した水色のプロテクターが装着される。胸には虹色の羽が光る。

そして最も違っていたのは頭からツインテールのように二つの細長い真っ白な翼が垂れていることだった。

そこから風が出ており、体を浮かせている。

「ふうつ。やっぱり少し負担がかかるわね。」

『……制限時間は15分、といったところでしよう。すぐに終わらせてください』

「はいはい」

そういうとスラー・ブリーズは腕を広げるとゆっくりと回転を始める。

彼女の回転に伴い、どんどんと風の渦が出来ていく。

風の渦が一つの竜巻になったところで、スラー・ブリーズは動き出した。

「サイクロンウォーク！」

スケートで滑るようにスラー・ブリーズは体を傾け、竜巻をまとってウイルスたちに突進していく。

次々と巻き込まれ、吹き飛ばされてゆくたくさんのウイルスをリブラ・バランス達は

驚いた表情で見つめる。

「マジかよ、強いぜ……?」

「そうね……驚いたわ」

気がつくともウイルスの9割が片付いていた。

そのままスラー・ブリーズはシャッターのコントロールパネルにサイバーインする。

「あのウイルスたち、ここからあふれていたみたいで、実際ここを守るような動きをしていたから……」

『この奥に何かあることは明白でしょう』

スラーの言った通り、奥にあるシャッターのコントロールシステム

はウイルスに囲まれ、  
すぐそばにウイルスの発生源とおぼしき黒いピラミッド状のものが  
浮いていた。

「あれね。……一撃で片付けましょう」

その足に風をまとい、一気にスラー・ブリーズは飛び出した。

「サイクロンキック！」

竜巻をまとったとび蹴りはウイルスたちを蹴散らし、そしてピラミ  
ッド状のものを打ち砕く。

バリイン！！

砕けたピラミッドを見てすぐ、スラー・ブリーズはコントロールシ  
ステムを操作し、  
シャッターを開けた。

『10分程度で済みましたね。良かったです』

スラーがねぎらい、美影はサイバーアウトすると電波変換を解いた。

「さあ、みんな行くぞ！」

同じく電波変換を解いた育田は子供達をホールの客席へと連れてい  
く。

無事助かり安心したのかぺちゃくちゃとしゃべりだしたクラスメイ  
ト達に顔をしかめ、

ジャックは歩きだしたがあることに気がついた。

「あれ、委員長のやつ……どこ行った？」

「さて、もう誰もいないわね」

ルナは一人クラスのみなどと離れ廊下を歩いてきた。  
歩きながらルナは自分にさっき届いたメッセージを読む。

「あとは任せます、他の処理よろしく、かあ……」

ため息をつく。ルナは足を止める。

その目線の先にはやはり大量のウイルスがいた。  
仕掛けられたウイルス爆弾は一つではない。複数あるのだ。  
だからこそまだウイルスがあふれていてもおかしくはなかった。

「まあ、だれも見えてないし……いいか」

ウイルスがどんどんと、炎に包まれていく……。

ゴン太たちから少し離れた場所です。

『……………』

剣の形をしており、刀身の部分はオレンジの電波で剣の柄とつばが交わる部分に

赤い目が光る電波体が黙って浮いていた。

その前には一人の人間　この電波体のオペレーター　が立っていた。

「いくぞ、ガンツ」

オペレーターは柄にあたる部分をつかむと静かに言った。

「電波変換……！」

第51話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

今日は少し長めです。

美影もついに電波変換しました！

ブリーズ、とは”そよ風”という意味です。

いろいろと並行しているので少しこんがらかっているかな?と思ひ、冒頭があのようになっています。

そして、最後に出てきた謎の電波体とそのオペレーター……

何者でしょうか？

そんな謎を残しつつ、次へと続きます。

第52話 BATTLE OF BIGHALL! ?

しばらく一休みしていると、ゴン太たちの前にウイルスがぞろぞろと現れた。

「これは休んでいる場合じゃなさそうだね……」

「よっしゃあ、バトルだ〜!」

「電波変換!」

二人は電波変換するとウイルスを次々と倒していく。

その時、ふとオックス・ファイアの目にあるものが映った。

「?」

奥のほうで自分たちとは違う別の電波人間が歩いていて……ように見えたのだ。

「あれは敵じゃないのか……?」

そう思った時点でオックス・ファイアは何者かの後を追って走り始めた。

……大量のウイルスを全てジェミニ・スパークに押しつけて。

「ちょ、どこに行くんだよゴン太君!」

「ほつとけ、あんなやつ!」

ジェミニ・スパークWが呼びとめようとしたがオックス・ファイアは行ってしまった。

「見つけたぞ！メイク！」

一方、鎧の電腦ではとうとうロックマンとハープ・ノートがメイクのもとにたどりついていた。堂々とそびえるコントロールシステムの前で、メイクは目の前に表示されたメッセージを呼んでいた。

『ようこそ。ここへ本当にたどり着くとは……予想していませんでしたが』

予測していなかったわけじゃありません』

そういうとメイクは手を握り締めると振り返らずに後ろのコントロールシステムについていた紫色のボタンをたたいた。

『せっかくですから、相手をするなら2対2でやりましょうか』

コントロールシステムが光り出したかと思うと、その一部が変形し始める。

「え！？」

「これは……まさか！？」

変形していく中でシステムの核は電波の塊に埋まりその周りでだんだんと装甲などが形を成していく。その姿は……



「あれは……エランド!?」

そう、そこにいたのはメイクよりも数段大きいエランドだった。しかし、通常のエランドとは少し違う。

通常右手に持っている剣ではなくステッキがその手に握られていた。

『それでは、始めましょうか』

メイクがそう言った途端エランドがステッキを振った。すさまじい衝撃波がハーブ・ノートを襲う。

「きゃあああああっ!」

直撃を受け吹っ飛ばすハーブ・ノート。

「バトルカード! エドギリブレード!」

『させません!』

エランドに飛びかかるロックマンだったが、メイクが床に触れとたんに床から巨大な壁が

でてきてロックマンの行く手をふさいだ。

『君の相手はぼくがしてあげます。エランド、あの女の子をつぶしてください』

「そんなこと……させるもんかあ!」

ロックマンは立ち上がると

「バトルカード! ヘビーキャノン!」

壁を壊してハーブ・ノートの前に立つ。

「ミソラちゃんは、僕が守るんだ！」

エランドはそんなスバルの声には全く反応せずただステッキの先を床についた。

そのとたん、エランドを中心として円状に衝撃波が放たれる。

「くっ……」

「シヨックノート……！」

ロックマンがシールドで防ぎ、後ろからハーブ・ノートがギターを鳴らして攻撃する。

その連携技にエランドは体勢を崩すが、ゆらりと立ち上がる。

ドカン！バゴン！

「うわあっ！」

『もう一人いることを忘れてはいませんか！』

一方でメイクは再び床に手をつけ、今度は床から大砲を2つ出現させ攻撃する。

次々と撃たれる砲弾にハーブ・ノートがアンプを出現させ、複数のシヨックノートを使って防ぐ。

「何、相手のこの能力……」

「わからない……バトルカード！ シュリシュリケン2！」

大きな手裏剣が出現し、メイクへむかって飛んでいく。

しかし、メイクに焦る様子はない。

『うけとめなさい！エランド！』

命令通り、エランドはステッキと手を使って手裏剣を受け止める。

『貸してください』

エランドから手裏剣を受け取ると、手裏剣を持った右手と大砲のうち一つに触れた左手が光り出す。

『いきますよ……ミックス合成！』

そのまま右手の手裏剣をなんと左手で触れた大砲に埋め込んだ。次の瞬間、その大砲から次々に先ほどの手裏剣が放たれる。

「バトルカード！ スーパーバリア！」

何とかバリアを出して自分とハープ・ノートを守ったが、すぐに5発が撃ち込まれ  
せつかくのオーラが消えてしまった。

「っ、強い……」

ロックマン達の視線の先でメイクは手を見せて言った。

『ぼく自身が戦うのは苦手ですが、これがぼくの能力です。物に触れてそこから何かを作り出す“フォーム形成”、両手に持ったものを組み合わせる“ミックス合成”、そして……』

メイクがエランドに触れると、エランドが急に大きくなり  
そこにあつた大砲をも取り込んでしまった。  
電波の体の一部が空洞になり、そこにメイクが座って言い放つ。

『フィニッシュ”完成”です』

第52話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

とうとうビッグホール編も10回目です。

……終わるのだろうか？

心配になってきたので次回でメイク・鎧は決着の予定です。

第53話 BATTLE OF BIGHALL! ?

巨大化したエランドの中でメイクは得意げに解説を続けた。

『ファイニッシュ完成を一度使うと使ったものは形成で形フォームを変えることもミックス合成で何かを加えることも何かに加えることもできなくなります。その代わり……』

メイクが手をあげると、エランドもまた手を振り上げた。

『……攻撃力、防御力、素早さ……そういったものが倍になりますけどね』

そう言った途端エランドはロックマンに向かってこぶしを振りおろしてきた。  
慌ててよけるロックマン。

「うわっ！」

その威力はメイクが言った通り半端ではなく、こぶしが当たった床は半径3メートルほどがひび割れた。

『はずしましたか……エランド!!』

エランドはステッキを構えロックマンに向かって突進してきた。

「くっ……バトルカード! スカルアロー!!」

ロックマンは弓を構えるとエランドに向かって矢を放つ。

しかし、エラントはステツキで難なく振りはらう。

『そんな攻撃、効きませんよ!!』

メイクの言葉にロックマンは笑って答えた。

「効かなくていい……当たりさえすれば！」  
『な!?!』

エラントが突然腕を垂らしてその場に止まる。

『何をしているんですか!早く攻撃を……』  
「そうはさせないよ」

いつの間にか後ろに回り込んでいたハープ・ノート。

『し、しまった……』  
「パルスソング!!」

ハープ・ノートがギターをかき鳴らすとそこから出た音波がエラントに命中する。

マヒして動けなくなるエラント。

『くっ……』  
「バトルカード! ジェットアタック!!」

ロックマンはエラントが動けなくなったすきに貫通する突進攻撃を使った。

エラントにあたると、エラントはマヒから解放されてなお動きが鈍くなる。

『しかし……それなら形成で直せばいいだけのこと……』  
「無理でしょ？そのエランドはもう“完成”しているんだから」  
『！……』

目を見開くメイクと鈍い動きのままステッキを振り上げたエランド  
めがけ

ロックマンは走りながら叫んだ。

「これで終わりだ！！バトルカード！ドリルアーム！！」  
『ぐおおおおおっ！！』

ロックマンのドリルアームはエランドの体をえぐり、貫き、  
メイクとコントロールシステムの核を取り出した。  
そして、体に大きな穴があいたエランドは爆発した。

「ハア、ハア、ハア……」

「これで、あとはシステムを動かすだけ……」

メイクは意識を失ったようで動く気配がない。

二人はシステムの核にかけよると、システムを操作する。

「うりゃあっ！」

セイヤはデスティルが変化した鎌で鎧を弾き飛ばす。



「下がって、漣……。私が、ナイトランスライドでとどめを……」  
「いや、待て……。様子がおかしい……」

鎧は急に動きを止めると、その場にガシャーンと大きな音を立てて倒れた。

ピリリリリリリ！

セイヤのハンターが鳴りだす。その電話はスバルからだった。

「兄さん！こっちは何とか鎧のコントロールシステムを止めたよ！」

「おおっ、よくやった！こっちも鎧は倒れちゃったよ。」

早くウエーブアウトして戻っておいで」

「うん」

電話を切るとセイヤはデステイルを鎌から元に戻した。

その後ろで麗音も電波変換を解く。

「ああああ疲れたああああ」

そのまま床に座り込む麗音。

そんな麗音を見てセイヤはつつすらと笑う。

（そういえば、奏は初めて電波変換して戦ったんだっけ。

確かに最初はしんどいけど、初めてでここまで長い時間もつとは思わなかったな……）

セイヤは麗音の前でしゃがむと手を差し出す。

「おつかれさま」  
「……うん」

麗音は差し出された手をつかんだ。

一方、鎧の電腦の中でメイクは目を開けた。  
彼は意識など失ってはいない。  
さっき倒れていたのは演技だったのだ。

『あー、しんどかった……』

メイクは起き上がると首筋をさすった。

『まったく……せつかく鎧をぬすんで稼働システムを組み込んで改造して、  
コントロールシステムにも改造したエランドを”合成”したのに……。  
よかったのかな、わざと鎧を止めさせて』

メイクはロックマン達が来たときに読んでいたメッセージをもう一度表示する。

そこにはロックマン達を鎧を使って足止めすること、そして完成を使ってもいいから  
できる限りロックマン達に疲労を与え行動力を低下させること、  
そしてしばらく時間をかけて戦わせたらわざと負けたふりをする  
ことが指示されていた。

『あそこで完成を使わなくても、いろいろ作って合成していけばいいから  
完成させる必要はなかったんですよ……。』  
まあ、あの人が言うならこれでいいんでしょうけど。相変わらずしつかりと布石を打ってますねー、やっぱりすごいやばくのオペレーター』

そしてメイクは指示の続きを読むと立ち上がった……。

『これでいいんですよねー？』

ハンターから聞こえて来たメイクからの声にメイクのオペレーターはゆっくりと頷く。  
それを見ているものは誰もいない。

「  
」  
口笛を吹きながら楽しそうにオペレーターは歩きだした。

サラは一度メールでグラディエに現在の状況を伝えた。

「確かメールは許可されていたわよね……」

そしてすぐに返事が来た。

「わかりました、こちらは今のところ何もありません、か……」

メールの返事を見た後サラは廊下の先を見た。

「それにしても、ミソラの代わりに暁さんが来るっていったけどいくらなんでも遅くないかな？」

そう呟くとシドウを探してサラは歩き始めた。

その後ろには何も無い。

そう、あんなにサラの目の前にいたウイルスも、何も。

第53話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

オマケ

セイヤ「なあ、さつきから気になっていたんだけどさー」

麗音「え？なに？」

セイヤ「お前のウィザード……ナイトだっけ？」

麗音「そうだけど」

セイヤ「確か学園祭でお前にとりついていたのもそいつだよな？」

麗音「うん、でもWAXAで復元してもらったんだー」

セイヤ「……すっごくキャラ変わってない？」

麗音「……それは、否定できないな……」

ナイト『む？吾輩がどうかしたか、レディー？』

セイヤ・麗音「」……………」

第54話 BATTLE OF BIGHALL! ?

『ひさしぶりだな』

「どうしてお前がここにいるんだ……？」

シドウとタイガは廊下でにらみ合っていた。

その緊張状態を先に破ったのはシドウだった。

「何もないなら、そこを通してもらう。どいてくれ」

だがタイガは首を横に振る。

『悪いが、お前をここから先に通すことはできない。』

邪魔をされたくはないんでね』

タイガはククツと笑うと両手を広げた。

『力づくでなら通つてもいいけどな？』

……俺からは何もしない、決めるのはお前たちだ』

「くっ……」

シドウはぐつと歯ぎしりした。

彼にとって、これは大きな意味を伴う問いなのだ。

……自分は失った親友を力づくで倒してまで任務を遂行するサテラ  
ポリスなのか、という。

それはつまり、タイガとの決別をもあらわす。

タイガが憎む電波変換による戦いは、彼と敵対する証だからだ。

……そして、シドウは決めた。

「爆弾を使った時点で、お前はもう……犯罪者だ。たとえ過去に何があるって、俺はお前を……超えなきゃならない！」

シドウは手を掲げ叫ぶ。

「トランスコード001！ アシッド・エース……！」

「やっぱり、お前はその選択をすると思ったよ。だったら、俺もいくぜ？……チェンジ。タイプ”レックス”、オン……！」

タイガが叫ぶのと同時に、彼の左手が電波化しまるで獣の顔のような形状になる。

それから全身が電波化したのち、タイガの体は一度大きく膨張し、体を形成しながら少しずつ縮んでいく。

そして変化した後のタイガの姿はかつて変化したフォース・シャークとは異なっていた。

4本足でその先には鋭い爪が。

背中には鋭い茶色の毛が多く生えており、オレンジのたてがみが後ろに鋭く伸びている。

獣のような顔にはとがって光る牙が左右1本ずつあった。

『これはフォース・レックス……かつて学園祭の事件で暴れたクロウ・ビーストの力を取り込んでコピーし、それを基に俺にあった姿になったものだ。』

言っとくけど、強いぜ？』

「それがどうした……ロックオンソード！」

アシッド・エースはすぐに狙いを定めフォース・レックスに斬りこむが

ソードを振った時その手ごたえのなさに違和感を覚えた。

『こつちだよ……バカが。』

遅い遅い遅い遅い遅いトロすぎるんだよおおおおお!!』

アシッド・エースが振りかえるより早くフォース・レックスはその背中に鋭い爪で切りつける。その威力は大きく、アシッド・エースは後ろに吹っ飛ばされた。

「ぐあああつー！」

フォース・レックスは追撃することではなく元いた位置に戻る。

アシッド・エースはというと元いたよりも後ろに、つまりフォース・レックスよりはもっと離れた場所に倒れていた。

立ち上がるとアシッド・エースはアシッドブラスターをフォース・レックスに向けた。

「ワイドショット!!！」

しかしそれも当たるかと思いきや、フォース・レックスの姿が消える。

『だから遅いつて言ってるだろ』

フォース・レックスはやれやれとした声でつぶけた。

『こいつの真価はその速さだ。パワーじゃない。』

ただ闇雲に攻撃してちゃあ、俺には攻撃が当たりさえしない。ましてや、倒すなんて無理だな』

「……………」



アシッド・エースはしばらく閉口していたが  
あきらめることなくまた構えをとった。

『大した根性だ。それでも通りたいのか？』

「……………絶対に、俺は通つてやるよ。」

アシッド、ウイングブレードで突っ切るぞ」

『クツクツク……………その体でか？』

フォース・レックスが嘲笑うのと、アシッド・エースが横にぐらりと倒れるのがほぼ同時だった。

何がわかったのか分からず驚いた顔のアシッド・エースにフォース・レックスはほくそ笑んでいた。

『こいつの爪には、毒がある。……………遅行性の、強烈な麻痺毒がな。一度ひつかくと、しばらくして急に相手はマヒして倒れ、相手が動転して動けないときにサツと片付ける。そんな使い方を目的として付与した能力なただけだな』

「くっそ……………」

『おとなしくしてもらっぜ？ 暁……………』

そこへ、一人の人物が走ってきた。

「……………！？これは、どういうこと……………？」

『ほう、珍しいやつが来たな……………』

フォース・レックスが言う。

その前に立っていたのは、サラ。

サラは信じられないという顔で床に倒れるアシッド・エース、そしてフォース・レックスを見た。

「こいつ、敵……！」

身構えたサラに、フォース・レックスはにやりとして言った。

『久しぶりだなあ！といっても、この姿じゃわからないか？  
鮫崎 タイガ、といえば何か心当たりがあるか？』

その言葉に、サラの顔から血の気が引いた。

「……嘘」

『あんたも、こいつと同罪だ。』

いや、むしろお前のほうが重いかな……』

第54話 BATTLE OF BIGHALL! ? (後書き)

本当は一話で完結させたかったんですが  
サラとタイガとの再会を書きたかったのであえてこのような終わり  
方にしました。

元サテラポリスアメロツパ支部副支部長、サラ・マルダー。

彼女もまた、タイガにとっては憎悪の対象なのです。

次回へ続きます。

第55話 BATTLE OF BIGHALL! FINAL(前書き)

今回でなんとか決着しました……  
なので、今回は拡大版です!!

第55話 BATTLE OF BIGHALL! FINAL

フォース・レックスは侮蔑的な声でサラに言った。

『あんだと会うとは思っていなかったぜ』

「……………」

顔面蒼白なサラにシドウは違和感を覚える。

あの気の強いサラが、ここまで真っ青になるなんていったいどういうことだ？

すでに電波変換が解けていたシドウは床に倒れた二人の顔を見る。その答えはフォース・レックス自身の口から出て来た。

『気分はどうだ？サテラポリスで可愛がっていた子供を死なせて、絶望してそこから逃げてからの生活は。確かお前、サテラポリスをやめてすぐ……………』

『それ以上言うな！！』

怒って出て来たのはサラのウィザード、マリア。

今まで見たこともないほど怒ったマリアを見てシドウは驚いたが、それは

フォース・レックスも同じようであった。

『はっ、怒るなよ。』

あいにく、あんだと戦うつもりはないんだ女神サマ。俺はあくまで時間稼ぎさ』

『時間稼ぎ……………？』

マリアはフォース・レックスをにらみつけていたが攻撃しようとは

しないようだった。

『そう、時間稼ぎだ』

オックス・ファイアはまだ謎の電波人間を追っていた。

その人物はやがてテレビカメラがたくさんある部屋に着くとそのうちの一つに触れる。

すると、不意にその姿が消えた。

「な!？」

慌ててオックス・ファイアは駆け寄るとそのテレビカメラを調べた。

「どうなってるんだ……」

『ゴン太、どうやらこのカメラは宇宙にまでつながっているみたいだぞ。』

このカメラから、宇宙の人口衛星へと電波が出てる。ここからコスモウェーブに行けるんじゃないか?』

難しい話だとゴン太は理解が出来ないのだが、今のはぎりぎりだった。

大事なことは一つ。

「すると、あいつは……宇宙に行ったのか?」

『そうなるんじゃないか?』

「よし……オレ達もいくぞ!」

オックス・ファイアは電波人間を追ってコスモウェーブへ行く。  
そこは紛れもない宇宙。

いつ見ても変わらないこの光景にオックス・ファイアは思わず見とれてしまう。

「あいかかわらず、すごいな宇宙って……」

しかし、彼はこの時あまりに油断していた。

「クエイク振波！！」

「！！！」

突如起こった振動にオックス・ファイアは慌てて振り向く。

そこにはさつきまでオックス・ファイアが追っていた電波人間がいた。

巨体を誇るオックス・ファイアをさらに凌駕するその巨体。

全体的にオレンジ色の装甲を体中に装着しており、

特に肩は際立って大きくとがっている。

腕は装甲が重なりより太くなっており、その手はオックス・ファイアの顔を

軽く握れるほど大きかった。

背中には身の丈ほどもある巨大な剣を背負っており、顔は雄々しい獣を模した兜をつけていた。

「貴様が、ワシのことをちよろちよるとつけておったやつは」

ドスの利いた声にオックス・ファイアは思わず後ずさる。

「このガンツ・クラッシュにかかわろうとしたのが間違いじゃった

のお……。

跡形もなく消してくれるわ」

「うお、オックスフレイルム！」

オックス・ファイアは口から炎を吐くがガンツ・クラッシュは

「ふん、ぬるいわ」

何をするでもなくなると片手で炎を払い去ってしまった。

それを見たオックス・ファイアは相手に向かって突進する。

「オックスタツクル！！」

「……………」

冷めたような目でオックス・ファイアが突進してくるのを見ると、ガンツ・クラッシュは片手でオックス・ファイアの頭をつかみその突進を止めた。

「な！？」

「……………ガキが」

むんずと頭をつかむとガンツ・クラッシュはそのままオックス・ファイアを投げ飛ばした。

顔から床に落ち、思わず悲鳴を上げるオックス・ファイア。

「あべしっ！」

「……………しつこいのお……………。ワシはうざいやつが嫌いなのでな。こんなガキ相手に使う必要はないんじゃないが……………」

そして彼は背中中の剣に手をかけた。



「甘んじて受ける、幾度の戦争をくぐりぬけて得た我が力を」

倒れているオックス・ファイアをめがけ、離れた場所からガンツ・クラッシュは剣を抜き振りおろした。

「霸王剣 フライングセイバー 飛斬！！！」

剣をふるった瞬間、とてつもなく強烈な斬撃がオックス・ファイアめがけて飛ぶ。

その斬撃が通ったところはすさまじい衝撃を受け吹き飛ぶ。

「ぐああああああああああっ！！！」

避けられず斬撃を受けたオックス・ファイアの叫びがこだました。そのまま崩れ落ちるオックス・ファイアを見てガンツ・クラッシュは吐き捨てた。

「格の違いを思い知ったか、バカめが」

そしてオックス・ファイアに背を向けるとガンツ・クラッシュは少し離れたところで赤く光る物体に近づいた。

「これがドクターの言っておったものか。やつの予測通り、この宇宙空間に残っておるものがあったということか……」

手を伸ばしてそれをつかむと、ガンツ・クラッシュは満足そうな笑みを浮かべる。

「これぐらい大きければ、問題はないじゃろっ。」

……我らの野望が達成される日も近いな、グファッファッファッファッ  
アッファアッ！」

高笑いを残し、ガンツ・クラッシュはウェーブアウトした。

「くっそ……」

オックス・ファイアは動けないほどボロボロになって、悔しさのあまり泣いていた……。

その頃、地上にも大きな変化があった。

「先ほど、ダイナマイトが発見されたそうです」「  
なんですって……！」

驚くシドウに報告していたのは筑紫だった。  
さらに彼は続ける。

「ウイルス爆弾は、みなさんの活躍のおかげでどうやらほぼすべて  
破壊されたようです。  
残りと思われる地点には、現在他の方たちが向かっております」  
「そうですか……」

一瞬ほっとした表情を浮かべたシドウだったが、さらに筑紫に質問  
する。

「しかし、まだ爆弾が残ってるのでは……？」  
「いえ、その心配はないとのことですよ」

今度こそ、終わった。  
大きく息を吐いたシドウに筑紫は笑いかける。

「お疲れさまでした。皆様にもそうお伝えしてください」

いつの間にかフォース、もといタイガは姿を消していた。

シドウとしてはサラのことが気になったのだがサラ自身は「別に何でもないわよ」と

しばらくしてからめんどくさそうに答えた。

そして、数時間後にはスバル、ミソラ、セイヤ、麗音、ツカサ、ゴン太もシドウの元へ合流した。

「みんなお疲れ様。これで、任務は終了だ」

時刻はもう昼過ぎ。

みんなくたくたになっていた。

多少の時間変更はあったようだが、グラディエの演説も無事に終わり、

みな安堵していた。

結局、襲撃者の真の目的はわからなかったが、結果的には勝利することが出来たのだ。

もっとも、ゴン太は一人負けたと悔しがっていたが。

とにかく、無事に終わった。

誰もがそう思っていた。

ビッグホールでの激闘は、警備チームの勝利に終わった。

表向きには。

第55話 BATTLE OF BIGHALL! FINAL(後書き)

はい、ゴン太の敗北やメイクの演技からも想像がつく通り、警備チームは勝利などしていません。

敵の本当の狙い、その舞台裏、

そして表立って書きませんでした。がセイヤ達の本当の狙い。

すべては、次話で明かされる予定です。

第56話 BATTLE OF BIGHALL! +

ビッグホールの激闘のさなか、ジャックは姿が見えなくなったルナを探し廊下を走っていた。

「どこだ委員長！まったく、世話が焼ける……」

ブツブツ言いながらもルナを探していたジャックは廊下の角を曲がる。

その時、彼は見た。

たくさんウィルスがまだ残っているのを。

「くそつ……コーヴァス！」

「おう！」

「電波変換！」

電波変換してジャック・コーヴァスになると群がってきたウィルスたちを紫色の炎で焼き払う。しかし、ウィルスはまだまだいた。

「数が多い……」

その時、今度は青い炎がウィルスたちを襲った。

「ギーツ……！」

悲鳴をあげて燃えるウィルス達。

今度こそウィルスがいなくなったのを見てジャックは電波変換を解いた。

炎が飛んできた先へ走ると、そこには燃えさかるウィルスたちと

それを見ていたルナがいた。

「なっ、お前……」

「え？」

ジャックに気がつくるとルナは慌てて振り向いた。

「これはどうということだ！」

「あ、いや、その……」

『ジャック……そいつ、偽者だ！』

コーヴアスの声にジャックは驚いた顔をする。

「本当か？」

『ああ、オレにはわかる。一見本物のようだが……』

オヒュカスの残留電波が、こいつからは感じられない……！』

『残留電波……それは盲点だったのです……』

ルナの姿が揺らぐ。

『ばれた以上は、もう隠す意味もないのです』

ルナは違う女の子に姿を変えた。

黄色い服に白いミニスカートの、赤茶色の髪をした女の子に。

「何者だお前！」

『私はマダラというのです。ルナとかいう女の子に姿を変えて星河スバルについてきただけなのです。もっとも、本人は知らないです』

「本物の委員長はどこだ！」



詰め寄るジャックにマダラはあっけらかんと答えた。

『風邪引いて家で寝てるです』

「ハックシヨン!」

ベッドの上でくしゃみをしたルナ。その横ではウィザードのモードがひよこひよここと浮いていた。

「あら、また誰か優秀な私のうわさを……」

『ルナちゃん、たぶんかぜ引いているからだよ?早く寝て治さなきゃ!』

「はあい……」

『じゃ、そういつわけで私は帰るです』

「逃がすかよ!」

再び電波変換してマダラの前に立ちふさがるジャック・コーヴァス。それを見るとマダラは

『……しつこい人は嫌いなのです』

全身が青い炎に包まれたかと思うと、9本の長く黄色い尻尾が生えてきた。

尻尾の先には水色の炎が燃えている。

全身も黄色い毛並みをした大きな狐の姿に変わり、足も尻尾と同じようにその先で

水色の炎が揺らめいた。

『マダラ・バーニング……』

「やる気がてめえ！」

そのまま突進したが当たると思った寸前マダラ・バーニングの姿が揺らめく。

『陽炎です。私はもう帰るのですよ……』

声だけを残しマダラ・バーニングは消えてしまった。

「なんだったんだよいたい……」

そして、すべてが一件落ち着いたかに見えたその日の夜。飛行船の中で高笑いをしている男がいた。

「グフアッフアッフアッフアッフアア！いや、お前の計画はなかなかだったな！」

「確かに、見事でしたね」

笑う男の前にはドクターがおり、二人は横に座っていた一人の人間をほめる。

『さすがは、ぼくのオペレーターだよね』

メイクもそのハンターの中からほめる。

「いえ、私はそんなすごくはないですよ……」

遠慮がちに言うのはメイクのオペレーター……真寧寺 律であった。律に男は言う。

「いやいや、見事なものじゃ。

爆弾騒ぎと鎧の騒ぎで邪魔な警備の連中を集め、さらに“グラディエ”が

誰の目にも触れないようにする。警備のやつらが騒ぎに気を取られている間に

ワシがテレビカメラから人工衛星の電腦に行き、そこからコスモウエーブに出て例のものを回収する。いや、人工衛星と直結したテレビカメラのあるビッグホールで

あれほど見事に人間を動かすとは、さすがなものじゃ。ワシは感心した」

「どうも……」

まだ律は緊張したようである。

そこへ、新たに声をかける者がいた。

『まったく、俺があの邪魔な暁を止めていたんだぜ？おまけにもう一人サラってやつも相手にしたしな』

それはフォースだった。今は電波の姿をしている。

「ああ、おまえもよくやってくれたよ」

『ふん、どうも』

ドクターがフォースをねぎらう。

カチャカチャ……と陶器が触れ合う音がした。

「紅茶をどうぞ」

「ウム、すまん」

ドクター、男、律の前に紅茶の入ったカップが置かれる。

「あなたもお疲れ様でした。……筑紫さん」

ドクターの言葉に、紅茶を渡した筑紫は苦笑する。

「といっても、私がしたのはダイナマイトが発見されたとうその情報  
報を流し

もともとウィルス爆弾しかしかけていなかった爆弾騒ぎをつやむや  
に終わらせたこと、

そして人払いされたグラディエ様の部屋へ行つて……すり替わり、  
外の人間とメールでやり取りをしてグラディエ様が部屋にいるよう  
に見せかけただけです」

「グファツファツファツファア！！」

筑紫の言葉に、男……グラディエはソファに寄りかかって大声で  
笑った。

同時刻、

「疲れたな」

「疲れたわね」

『全くです』

セイヤ、サラ、そしてマダラがぐったりした顔で机に突っ伏していた。

3人にココアを配るのは同じくビッグホールにいた美影だった。

「私だつて疲れているんですよ？久しぶりに電波変換したし」

『その通りですよ』

美影の言葉にスラーが同意する。

「でもさー、警備の仕事、引き受けたかいはあつたよね？」

セイヤが受け取ったココアを飲みながら言った。

「マリアが感知したんだろ？ “霸王” …… ガンツの周波数を。

やつらの動きが、少し探れたじゃねえか」

「そうね、メイク、フォース …… 少し相手の駒もわかったし」

サラもココアを飲みながら同意した。

「まあひとまず、潜入御苦労さまでした。

とりあえず、わかったことは報告しておきますね。 …… ニックに」

「そうね」

「よろしくー」

美影の言葉にぐったりした二人は返事をしてココアをまたもう一口飲んだ。

第56話 BATTLE OF BIGHALL! + (後書き)

これでビッグホール編は完結です。

やっと終わって、ホッとしました……。

そして、次の話に入りますが、都合により1週間ほど更新できません。

なので、その間に今までも書いたとおりミノラの母親についても情報も欲しいです。

よろしく願いします!!

## 第57話 敵の正体は？

ビッグホールの激闘の翌日、WAXAに数人の人間が呼ばれた。スバル、ミソラ、セイヤ、サラ……。そして、その場にはシドウとヨイリーの姿もあった。

「みんなに集ってもらったのは、他でもない。

この前の事件で、我々は無事警備として活動することが出来たかに思われていたが

彼の話聞く限りどうやらそうでもなかったらしいんだ」

そういつてシドウがみんなの前に連れて来たのはゴン太であった。

「ゴン太、もう一度あの話をしてほしい」

シドウに促されると、ゴン太は口を開いた。

「オレと戦ったやつ……めちゃうくちゃ強くて、俺はすぐに倒されたんだけど、

そいつが妙なことを言っていたんだ。

宇宙にもあったか、とかこれぐらい大きければ、とか何とか……」

「どういこと？」

疑問符を頭に浮かべたミソラにシドウが答えた。

「要するにだ、あの騒ぎの裏で、相手は何かを探していたらしい。しかし、それをゴン太が目撃していたのは幸いだ……」。

もしゴン太がそれを見ていなかったら、俺達は何も知らずに終わっていただろう」



「……………」

一度、サラとセイヤが顔を見合わせる。

その様子を見たスバルが口を開きかけた時、部屋のドアが開いて青いマフラーをした一人の男性が入ってきた。

「だいたい終わりましたよ、シドウ」

「すまない、道野」

入ってきた道野にシドウは礼を言って道野から報告書を受け取る。その報告書をめくりながら道野が説明した。

「残念ながら、相手が何を探していたのかはわかりませんでした……」

しかし、ゴン太が戦った場所、そして鎧の電腦を調べてみたら少し面白いことが分かったんですよ」

「なんだ？」

シドウをはじめ、その場にいた全員が道野に注目する。全員の視線を浴びながら道野は続けた。

「敵とおぼしき残留電波やそのノイズがそれぞれの場所から検出されたんですけどね。」

あれは人工のウィザードではない、おそらくは電波生命体だと考えられるんです」

「それって、ハープと同じってことですか？」

ミソラの問いに道野はやや複雑そうな顔で答える。

「うん、そんなところです。ただ……」

ウォーロックやハーブ、オックスといったAM星人、FM星人とは明らかに周波数が違います。むしろ……」

そこで道野はセイヤとサラを見た。

「セイヤさんのウィザード、デスティル。

そしてサラさんのウィザード、マリアと周波数がほとんど一致するんですよ」

その報告で今度は視線がセイヤとサラの方へ向く。

「……」

「つまり、ティルちゃんとマリアちゃんが何か知っているかもしれない、ってこと？」

「はい」

ヨイリーの問いに道野は頷いた。

シドウは話を聞いてから道野に礼を言う。

「すまないな、いろいろと調査してもらって……」

「いえ、急な頼みだったから確かに驚きましたけど。」

それでも、電液体が残したノイズを解析するのは僕の専門分野ですから」

そういって道野は部屋を出た。

道野が部屋を出ると、次にシドウはセイヤ達のほうを向いた。

「さて……さっそくだが」

「俺達のウィザードに話を聞きたい、と？」

「それもあるが……」

セイヤの言葉にシドウは付け加える。

「君達からも話を聞きたい。どうやら心当たりがあるようだからな……敵の正体について」

シドウはセイヤとサラが顔を見合わせていたのに気づいていたのだ。なおもセイヤが黙っていると、サラがため息をついて口を開いた。

「しょうがないわね……確かに、心当たりがあるわ」

「話していいのか？」

セイヤが不満そうな声を出す。サラは仕方ないと首を振った。

「ただ、私たちが話すよりマリアに話してもらった方がいいわ。

マリア、いい？」

『……わかりました』

マリアがウィザード・オンすると急に空気が重くなったように感じられた。

そして、マリアが口を開く。

『まずは、私たちがどういったものか、そこから話しましょうか』

ゴクリ、と誰かがつばをのむ音がした。

『私達は……テンカイの電波体です』

「て、天界……？」

マリアは静かに語りだした……。

## 第57話 敵の正体は？（後書き）

次の話は、この小説の設定とどうか  
根本的なオリジナルキャラクターの設定を多く書きます。

これからのストーリーにおいても、一つの区切りとなる話になると  
思います。

## 第58話 テンカイ

『みなさん、ムー文明をご存知ですか？』

「ムーって……あの？」

ミソラがハツとした表情でマリアを見る。

ムー文明。

古代に大いに栄えた謎の文明で、その技術力は現代の技術を凌駕していたとも言われている。

実は少し前、ドクター・オリヒメという科学者が

ムー大陸を復活させ、地球を支配しようとしたのだがスバルこと口ツクマンが

これを阻止し、ムー大陸は海の底へと沈んだ。

しかし、これはまた別の物語である。

『では、その歴史については知っていますか？』

「えーと……なんか争いがあったとか何とか……」

スバルがあいまいな返事をする。

マリアは頷くと先を続けた。

『まあ、そうですね。そして一部の人間は陸に降りることにしたのですが

一方、ラ・ムーから生まれた電波体にも戦いを好まないものが少数ですがいました。

彼らはムー大陸を離れると空中に今で言うウェーブロードのような電波の道を作りました。それがより大きくなり、

いわゆる一つの国になったもの、それがテンカイです』

一同はみなマリアの話に聞き入っていた。

『通常、一つの区を一体の“王”と呼ばれる電波体とそれを補佐する電波体達で統治します。』

さらに、そのようにして複数存在する王をまとめるのが

“神”の電波体です』

「なるほど、そこは俺達と結構似ているんだな」

シドウの言葉にマリアは同意して続ける。

『そうですね、王がニホンで言う町長や市長、』

神が政府、と考えてもらっても差し支えありません。

それで、このテンカイはとりあえず平和ではあつたんですが……』

そこでマリアは言葉を切った。

『実は一か月前、大規模な暴動がおこつたんです』

「暴動？」

『はい。王のうち何名かが「なぜ自分達王の電波体が神というものに束縛され』

支配されなければならないのか」と主張し、それが他の一部の電波体にも浸透したのです。』

“神”をよく思わず、王の政治を神の政治よりも賛同していた者もいなかったわけではありませんから………』

マリアは少し悲しそうに言った。

『結果……秩序こそ何とか元に戻りましたが、』

4名の王を筆頭に少数の電波体がテンカイを去りました』

「つまり、そいつらが今回の事件を起こしたってことか？」

シドウがマリアに聞いた。

『そうだと思います。そして、その4名の王というのが、そのスピードで相手を翻弄し、多くの電波体を切り刻んできた“獣王”クロウ。』

強大な力で数多の猛者達をもねじふせて支配した“霸王”ガンツ。目の前の敵をひと睨みで地に屈服させひざまづかせる“魔王”カルム。

そして、あまりに強大かつ異常な力と周波数を持つので電波変換が出来ないと“思われていた”王、“冥王”ハデス……この4名です』

「ガンツ……オレを倒したやつは、ガンツ・クラッシュってやつだった」

物覚えが悪いゴン太だが、今回の相手の名前はすっかり覚えていた。それだけ負けたことが悔しかったのだろう。

『“霸王”ガンツが、やはりあのホールにいましたか。』

あとになってその感じはしたのですが……』

「ねえ、僕も一つ質問が」

そう言っ手を手をあげたのはスバルだ。

「最初に言ったクロウっていう電波体は、もしかして僕とミソラちやんが戦った……」

『そうです、あの学園祭での事件もテンカイを去った電波体によるものです。』

クロウと……ナイトもそうですね。今は少し変わったようですが』

そう言つてマリアは、ナイトがビッグホールで麗音のことをレディーと呼んだり中世の騎士のようなしゃべり方をしていたり、記憶と違つていたことを思い出す。

「今のナイトは残留電波から復元したものだからな。あと、俺からも質問なんだが

学園祭とビッグホールの両方に現れたフォース……鮫崎 タイガはやはり

テンカイとかかわっているのか？」

シドウの質問にマリアは少し言葉を濁した。

「彼は……私達の中でも、正直一番よくわからないのです。もとは人間のようですし……」。

私達の間では、人間から電波体となった鮫崎タイガにテンカイの電波体が融合したのがフォースではないかと考えています。それも私たちが把握していない、王クラスの電波体と融合した」

「王クラス……？」

目を見開く一同。マリアも確証はないようで一言一言ゆっくり話す。

「おそらく、の話です。」

しかし、テンカイを去った電波体はどうやらそのフォースという電波体と、さらにその上にいるいわば黒幕である人物のもとでチームを組んでいるようなのです。

目的はわかりませんが、聞くところによると“キングダム王国”と名乗っているそうです」

「そこで、だ」



デステイルもウィザード・オンしてマリアの横に現れ、マリアの言葉を引き継ぐ。

『神としても、何か対策をたてる必要が出て来た。なにしろ

あいつらがまとまったとなると、何をするかわからないからな』

『“死神”デステイル、“雷神”ギール、“竜神”レイス、“鬼神”オルグ、

あと私、“女神”マリアが派遣され、人間のパートナーを見つけました。

そして私たちはチーム“神議會”しんぎかいを組んだのです。

レゾンは……「王国の企みを暴き、阻止する」です』

## 第58話 テンカイ（後書き）

やっとこの話を書けました……

設定自体は初期に決まっていたのですが、説明がないままずるずると引きずり

ここでやっと明かされました。

王国の具体的な目的はもう少し後になって分かります。

また、前回対ガンツ達があまりに長引いたので

次はスパッと進みたいなあと思っています

## 第59話 墓前の花束

マリアの話の後、シドウはサラに聞いた。

「俺達で何かできることはないか？」

「相手の動向を探ってくれたらそれが一番助かるんだけど……。特に手掛かりもないしね、さっきの調査だけでも十分よ」  
「そうか……」

やや残念そうにシドウは言ってサラから離れた。  
そして、その日の集まりは終了した。

「ねえ、スバル君……」

帰り道、ミソラがスバルに遠慮がちに話しかけた。

「何？ミソラちゃん」

「ちょっと、この後いいかな？」

「え？いいけど……」

ゴン太が何か言いかけるが、後ろからセイヤが口をふさぎサラと共にゴン太をどこかへ引きずって行く。  
そんなことには全く気付かず、スバルとミソラはウェーブライナーに乗り込んだ。

「それで……どうしたの？」

スバルの問いにミソラはゆっくりと答えた。

「ちょっと……ついてきてほしいところがあるんだ」

「？」

一方でウォーロックも同じくハーブに詳細を尋ねていた。

『オイ、お前何か知っているだろ？』

『ええ、まあ……。ただ、私の口から言うのは気がひけるわ。』

ミソラの話聞いてちょうだい』

『……………』

普段と違い、からかう口調ではないハーブの言葉に  
さすがにウォーロックといえども口をつぐんだ。

しばらくして待ちかねたウォーロックとスバルの気持ちが伝わった  
のか、

とうとうミソラは口を開いた。

「私と一緒に……私のお母さんのところへ、行ってほしいんだ」

二人はウェーブライナーを下りると少し歩く。

二人が歩く間、二人の間には一言も会話がな

やがて二人はある墓地についた。

少し天気が曇ってきたが、やはり無言で歩く。

しばらく歩いたところ、初めてミソラが声をあげた。

「あれ？」

ミソラの視線の先には一人の青年がいた。

背はやや高く、少し長い銀髪が印象的な青年だ。

その青年はある墓の前に立っており、しばらくその墓を見つめていたが

二人が歩いてくるのに気付くと視線をそちらへ向けた。

「あつ、すまないね」

とても穏やかで優しげな声だった。

そう言つて場所をあげ一歩下がった青年の行動にスバルは首をかしげるが、

ミソラは気がついた。

「そのお墓、私のお母さんの……」

えっ、とした顔でスバルがミソラを見るが

青年はどこか悲しげな笑顔で言った。

「この人にはずいぶんお世話になった。

この人がいなかったら、今の自分はなかつただろうね……絶対に」

そのままの表情で青年は二人の脇を通り過ぎた。

「それじゃ、二人の邪魔はしないからここで帰ることにするよ。

じゃあね……ミソラ」

自分の名前が呼ばれてミソラは驚いた表情になるが、二人に背を向けて青年は去って行った。

『いいでガンスか？久しぶりの再会なんでガンしよう？』

「……まあね。でもあの頃はミソラは小さかったからボクのこと覚えてないだろうし。」

別に今思い出してもらわないでしょ」

『おいはそう思わないでガンスがねえ……』

「そう言うなよ、オルグ」

去って行った青年の後ろ姿を見つめながら  
じっと考え込んでいたミソラにスバルは声をかけた。

「どうしたの？ミソラちゃん」

「さっきの人、どこかで会ったことがある気がする……。私のお母さんのこと知ってたし……」

ふとミソラが母の墓のほうを見ると、そこには  
煙の立ち昇る線香とピンクの花束が供えられていた。  
ミソラは振り返ったがもう青年の姿は見えない。  
ただポツンと、ミソラは呟いた。

「あの人は……どこかで……」

## 第59話 墓前の花束（後書き）

現れた謎の青年。

いったい彼はどうストーリーにかかわってくるのでしょうか？

そしてもう今回はすぐに第3の王の話へ行きたいと思えます。



**番外編 新年く焦りと希望と悲しみとく（前書き）**

新年1発目ということで、番外編です！

少しこれからの物語への布石が含まれています。

番外編 新年〜焦りと希望と悲しみと〜

「まずい……」

「不味い……」

「不味いうえにまずい……」

「あと12時間しかないのに……」

白金家の家で、台所で啞然としている4人の女性。

それはしゃべった順に言うとうるる、響ミソラ、サラ・マルダー、そして奏麗音である。

今、4人は台所に立っていた。

目の前には一つの鍋があり、中身は……なんとも言えないかぐわしい香りを放つ謎の物体であった。

これが本来何になるはずだったのかは、皆さんのご想像にお任せする。

「ルナちゃん、料理苦手だったんだね……」

「だ、だからあなたに他の人も呼んで一緒に作ってもらおうとしたのよ！」

でもまさか……」

「みんな料理下手だとは知らなかった、と」

締めくくったサラの言葉に一同は再び肩を落とした。

「どうしよう……私たちが作るからあかねさんには少なめでいいですよって言っちゃった……」

「最悪の場合、その“少ない”で一体何人の分をまかなうのかしら……」

ルナが何げなく言った言葉は、危機意識をより向上させるには十分すぎた。

「またもや雰囲気が悪くなる一因。」

「ねえ……なんで漣呼んじや駄目だったの？」

「え？」

ふと、麗音がサラに尋ねた。

「当たり前でしょ、もとは女の子みんなでつくろっていつ話だったし、ほら……」

そこでサラは少し恥ずかしそうに口ごもる。

「……あいつには私たちが作ったものを食べさせてあげたかったのよ」

「そうだね……」

そう、せめて食べることが出来るものさえ作れば。

「でも、どうしてセイヤさんなんですか？」

「そういえばそうね」

不思議そうなミソラとルナにサラと麗音は苦笑いして言った。

「実は、漣ってね……」

「料理が半端なくうまいのよ……」

「こんな感じですか？」

「あら、すごいわねセイヤくん」

一方星河家では、女性陣の苦勞など全く知らずセイヤがあかねの手伝いをしていた。

あかねもなかなかの料理上手だがセイヤも負けてはいなかった。そしてその横でスバルが啞然とした表情をしていた。

「兄さんすごい……」

「ん？そうか？」

軽く笑うとセイヤは包丁で切っていた食材を鍋の中に入れる。

「まあ最近リアルウェーブとかでもいろいろ料理が楽になるものはあるんだけどね。」

あれ、料理が根本的にできない人にとっては逆に悲惨な結果をもたらすこともあるんだよ。

だからやっぱり手作りでも出来なきゃだめなんだよ。

それに手作りの方が心がこもっていておいしそうだろ？」

「あら、よくわかってるじゃない」

そう言っつて笑いあう3人。

ちなみに、大吾はぎりぎりまで仕事だ。

「それにしても、どうしてそんなに上手なのかしら？」

あかねが聞くとセイヤはものすごく複雑な顔をした。

「いや、実はですね……」。

一時期、両親が大喧嘩して母さんが料理とかの家事をボイコットした時期があつて……。

一応食事代はもらったんですけど外食ばかりじゃ足りなくなるほどボイコットが続いてしまつて……。自分で料理できるようにならざるを得なかつたんです」

「……………」

スバルとあかねはどこか憐れむような目でセイヤを見ることになつた。

だが、女性陣にはそんな談笑する余裕などなかった。

「どうしよう……もうこんな時間だ!」

「さすがに……マズいわね」

慌てる4人だがその時

ピンポーン ピンポーン

突如チャイムが鳴った。

「あつ、はい」

ルナが一度インターホンで相手と話す。

そして部屋に入ってきたのは……美影だった。

「み、美影!？」

「やれやれ……予想どおりでしたね」

『手伝いに来たのですよー』

後ろにはにつこりとしたマダラもいた。

今は人間の姿だった。

美影はあきれた顔でため息をつく。

「やっぱりね……。料理が出来ないサラが“おせちに挑戦する!”なんて

言い出すには何かあると思ったのよ。

とはいえ……。ここに4人もいてこんな結果なんて……。悲惨ですね」

『悲惨なのです』

美影とマダラのダブルパンチに胸をおさえる一同。

そんな4人を見ると美影はマダラを従え台所に近づくと包丁を持った。

「仕方ない、私も手伝います」

「ちよつと、車いすのあんたが……」

タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ

美影を止めようとしたサラだったが、美影がもった包丁が

規則的に軽快な音を立て猛スピードで食材を切っていくのを見て手を止めた。

その光景を他の3人が同じように驚きの目で見る。

視線に気がつくと、美影は少し恥ずかしそうに言った。

「……私が料理できたら、おかしいですか？」  
『マダラも手伝つです』

横に立ったマダラも包丁を持つと、美影ほど速くはないがそれでも丁寧に食材を丁寧に刻んでいく。

「……………」

「なにぼんやりしているんですか。手伝ってください。とりあえず女の子二人で野菜を洗って、その二人はお湯を沸かしてください」

「……は、はい!!」「……」

美影のシドウにより、泡だたしく動き出す4人。

こうして、先ほどとは打って変わってまともな料理が作られていく……。

「ま、まにあつたあゝ」

「お疲れ様、ミソラちゃん」

その後、星河家で。

ぐったりしたミソラをスバルが優しい言葉をかけた。

「ちょっと、私もしたのよ！私は何もなしなの、スバル君!？」

「ええっ!？お、お疲れ様です委員長……………」

やや不満げなルナ。

ゴン太とキザマロはその様子を見てクツクツと忍び笑いを漏らす。その横ではサラと麗音の様子にややあきれた顔でセイヤがため息を漏らしていた。

「まったく、美影がいなかったらどうなっていたんだろうな……。  
まあ、二人とも料理が下手なのは知ってたけど」

思わずハツとする二人。

「ちょ、ちよつと……」

「なんで知ってたの!？」

「だって……麗音は調理実習の時同じ班だったから焦げたパスタ食うはめになったし」

サラなんかこの前ボヤ騒ぎ起こしただろ!」

顔を真っ赤にしてうつむく二人。

そこへあかねがセイヤと作った料理を美影達を作ったものと一緒に並べる。

「さあ、食べましょう!」

こうしておせち料理をみんなで食べ始める。

たまに魚の骨が残っていたり味が妙にしょっぱかったりというトラブルはあったが……

まあ、許容範囲内だったとだけ言っておこう。



そしてその後は初詣。  
スバルとミソラは並んでお賽銭を投げ入れる。

(ちなみにミソラと麗音ははかつらとメガネで変装しているため周囲の人は誰も気がつかない。サラとセイヤはかつらはいらないうと猛反対したのだが)

「今年もいい年になるといいね」

「そうだね……スバル君」

そのままじつとスバルを見つめるミソラ。

「この年が……あなたにとって幸せな年でありますように」

だが、新年を祝う人々に紛れ。  
祝いの気持ちより大きなものを抱く者たちもいた。

「新しい年が来ても……失ったものは戻らないわ」

「……そう、かもしれませぬ。お嬢様」

「“新年”？ “お祝い”？ “めでたい”？

さっぱりわからない

さっぱりわからないさっぱりわからない

さっぱりわからないさっぱりわからないさっぱりわからない

……というか、僕にそんな感情あったっけ？」

『……………』

「新年ねえ……………」。

もう、祝う気にもなれねえや。またポーカーで稼いでくるか……………」

「また、時間がたつちまった……………」。

だが、いくら時間がたとうと俺の憎しみは、復讐は……………終わりが来るのかわからない……………」

そして、スバル達から離れたセイヤとサラは。

「新年おめでとう、ニツク」

「ん、ああ……………もうそんな時期か」

「……………それぐらい分からないか？」

「せめて常識ぐらい知っておいてください」

「相変わらずだなあ……………」

「バカだと言いたいのにな、そうでも無いから……………コイツは」

そして。

「新年か……。」

まさか、また一人で新年を迎えることになるなんて……」

そこでちらりと視線を落とす。

そこにあるのは一枚の写真。

まだ幸せに満ちあふれ、これからの未来に希望を持っていた、あの頃。

一緒に、二人で……撮った写真。

「もう少しなんだ……。もう、すべては動き出している。待っていてくれ」

ドクターは一人静かに嗚咽を漏らす……。

番外編 新年〱焦りと希望と悲しみと〱(後書き)

なんとか1月1日です。

更新遅くて申し訳ありません。

しかも本編ではないという……

ですが、これからも精進いたしますので

なにとぞよろしくお願いいたします。

第60話 三人目の王は動き始め、五人目の王は裏切りを誘う

翌日。

「お呼びですか？お嬢様」

とある屋敷で、部屋をノックする音がする。

ドアをあけて部屋に入ってきたのは筑紫 忠一郎。

そして部屋には彼の主……一人の少女がいた。

スバルやミソラと同年代の彼女は、名前を西園寺ユリといった。

ストレートの黒髪で瞳は大きく、背は高い方ではない。

意志の強そうな唇が肌の白さをより際立たせていた。

ユリは少し怒った声で言った。

「ねえ、頼んでおいた資料まだ？」

「それでしたら、こちらにございます」

資料を取り出した筑紫だが、手渡す前に手を止めた。

どれをユリは不満げな目で見る。

「どうしたのよ」

「……今はまだ、動く時ではないと思われませう。」

つい最近グラディエ様が動いたばかりですし。

王クラスのウィザードを持つあなたが、しかもクロウを退けたあの二人を

わざわざ倒す必要があるのかどうか……」

筑紫の言葉にユリはあきれて答えた。

「邪魔は早めに排除する、当然でしょ？  
そう思わない、カルム？」

ユリの呼びかけに彼女のウイザードがウイザード・オンした。  
赤い電波の体をした電波体で、目つきが鋭い。

黒マントのようなものを肩からさげており、十本の指に  
それぞれ灰色の指輪をはめている。  
同じような輪が腰にも斜めについていた。

『ユリ様の言う通り、邪魔は早めに片付けたほうが  
後々計画の進行に影響が出ません』

「ほらねー」

勝ち誇った笑顔を見せたユリに、筑紫はやれやれと言って  
資料を手渡した。

笑顔でそれを受け取ると由利はさっそくその資料に目を通し始める。  
その目つきは今までと違い真剣だ。  
資料を読みながら由利は筑紫に質問した。

「ところで、フォースは？」

「今どこかへ行っています、何をしに行ったのかは知りませんが」  
「ふーん」

ユリはそれを聞いて一度資料から目をあげた。

「あなたにも、いくつかやってもらうことがあるわ」  
「仰せのとおり」

筑紫はうやうや礼をする。  
ユリの呼んでいた資料には、  
星河スバルと響ミソラについて詳しくそのデータが書かれていた…  
…。

話に出たフォースは、ある人物とあっていた。  
フォースは相手の前に電波体の姿で浮いていた。

『これが、俺達をまとめているドクターの計画、  
そして目的だ』

全ての話を聞いた相手は驚いた顔をしていた。

「……なるほど」

『そこで、だ。あなたにも協力してもらいたい』

だが相手は首を横に振った。  
相手の拒否にフォースは笑う。

その笑いは悔し紛れのものではない。  
予想通り、しかしまだこっちにもカードがある、という意地悪な笑  
い方。

『そうだろうと思ったぜ。』

だが、あなたには理由がある。

オレと決別できない理由も、この計画に乗る理由もな』

ぐっと歯ぎしりする相手にサラにフォースはたたみかける。

『アンタが一番わかっているはずだ。  
アンタだって、苦しかっただろっ？つらかっただろっ？』

「……………」

相手は何も言えない。

確かに、この話にのれば、今まで背負ってきた苦しみから少しは解放されるかもしれない。  
相手の脳裏に、ある記憶がよぎる。

警報を鳴らして異常を知らせる装置。

目を覆うほどのまばゆい光。

今も耳から離れない女の子の悲鳴。

何もできなかった自分の前で、女の子の方へ走った一人の人物。

「危ない！」と叫んだ自分の声と相手をつかもうとして伸ばした手。  
そして、そのまま空をつかみ何も救えなかった手……………」

「……………」

相手はじっと自分の手を見る。

『俺にはお前の気持ちかわかる。お前がこの話を断らない確信があ



ったからこそ

話した内容もある。覚悟を決める……裏切る覚悟を』

バチバチつと音がするとフォースの背中から顔、胴体、腕と全てが電波で構成された人間の上半身が現れる。その赤い目で相手をじっと見つめていた。

『この“暴王”ゲインの話に、のるか？』

相手はフォース……鮫崎 タイガの目とゲインの目を見てゆっくりと……頷いた。

第60話 三人目の王は動き始め、五人目の王は裏切りを誘う（後書き）

明らかになったフォースの正体。

つまりは、「暴王」ゲインと電波体になったタイガが融合した姿がフォースだったわけです。

そして、誕生した裏切り者。

この人物はいつたい誰なのか？

すでに登場した人物だということは保証します。  
考えながら読んでいくのも面白いかと思えます。

## 第61話 言えない反論(前書き)

おひさしぶりです。

今回の話は、少し暴言が含まれています。

(どうしてもというのであれば見ないことを勧めますが、とてもというほどではない気がします。作者の私見ですが。)

## 第61話 言えない反論

ピリリリリリリリ！

「?」

そのメールが届いたのは雨でも降りだそうかという天気の後だった。

オクダマスタジオの控室にいたミソラはメールの着信音に気付くとメールを開き

「これ……どういうこと!?!」

おもわず片手に持っていたコップを落としてしまった。

その原因はハンターの画面に表示された、メールに添付されていた写真。

その写真に写っていたのは、ぐったりとしてうつぶせに倒れたスバルの姿だった。

うつぶせのためその表情は見えない。

メールの本文には、今から3時間後に

ドリームアイランドにある廃墟の奥へ来るように書かれていた。

「……………」

ミソラは最後の文をじっと見つめる。

<こいつをどうするのかはお前次第だ>

(私次第……………)

今まで、ずっとスバルに助けられてきた記憶、その場面がいくつもミソラの頭に浮かんでいた。

（今度は……私が助ける番なんだ！）

決意を胸にしたミソラは控室を出ると力の限り走り出した。ハーブは何も言わず、ミソラを止めようとはしなかった。

「ハア、ハア……」

指定された場所についたミソラは電波変換して奥に進む。

「……」

どれくらい歩いたころだろう。

警戒して歩くハーブ・ノート目に飛び込んできたのは

……写真の通り、うつぶせで倒れているスバルの姿だった。その体はピクリともしない。

「……スバル君……」

思わず悲鳴に近い叫び声をあげ駆け寄るハーブ・ノートだったがその時、ハーブが慌てた声で叫んだ。

『ミソラ、止まって！これは罠よ……！』

ハーブ・ノートが立ち止まる前に、その足がガクンと崩れる。

(え?)

何が起こったのかわからず、その場に倒れこむハーブ・ノート。そんな彼女をあざ笑うかのように一人の電波人間が現れた。

「やっぱり来た。バカだよねえ」

赤い体をし、腰には斜めにベルトをつけているその電波人間は肩から紺色のマントを羽織っていた。

指にはベルトと同じデザインの指輪をしており、大きな瞳をした女の子の顔だった。

「スバル君を……解放して……」

呻くミソラの言葉に女の子　ユリは大笑いする。

「アハハハハハハッ！あなた気付いてないの？  
あなたのウィザードが言ってたじゃない、畏だって」

ユリが倒れたスバルに手を向けると、

ヴウンという音とともにスバルの姿が消えた。

それは、リアルウェーブによる偽物にすぎなかったのだ。

嘘……

一瞬気が遠くなりそうだったが、ハープ・ノートはギターを構えて相手のほうを向きよろよろと立ちあがった。

「あなた……王国ね！」

キングダム

「そうだよ。……だから、何？」

ユリが言った途端、またしてもハープ・ノートは倒れこむ。

「うわあっ!?!」

『どうしたのよミソラ!』

「わからない……急にギターが重たくなって……う!」

今度は体全体が急に重たくなり、もはや手足すら動かせなくなってしまった。

「……だよね」

「え?」

かろうじて顔をあげたハープ・ノートの目の前でユリはゆっくりと手をあげた。

「あなた、今度は自分が助けなきゃ、とか

スバル君を助けられるのは自分だけなんだ、とか思ったでしょ」

手があがるその動きに合わせ、周りにあったガレキがゆっくりと浮





第61話 言えない反論（後書き）

ミソラに襲いかかるユリ。

彼女の能力はもうわかった方もいるかもしれませんが。

次は、そのことを知ったスバルがどう出るか……

## 第62話 見えない恐怖

<まず、第一段階は終わったわ>

電話で女の子……ユリと話しているのは筑紫である。

「左様ですか」

<これから第2段階に移るわ。あなたもよろしく頼むわね>

「かしこまりました……」

ピッ

電話を切ると筑紫は目の前の建物を見上げた。

そして自分の傍らにいるウィザードに話しかける。

「ではいくぞ、メレ」

『メレレレレレ……』

筑紫は見上げていた WAXAニホン支部へと歩いていく。

メレと呼ばれた灰色の体をした電波体があくびをするように大きく口をあけると、

そこから長いピンクの電波の舌が伸びた。

スバルのもとに電話がかかってきたのは突然のことだった。

「はい」

相手はかつてある事件で知り合った浦肩 マモロウである。

<久しぶりだな、スバル。>

実は、さっき急にミソラがスタジオを出て行って以来連絡が取れないんだ。

何でも、焦った顔で廊下を走っていたそうなんだが……何か心当たりないか？>

「いえ、ないです……すみません」

<そうか、ならいいんだ。何か分かったら教えてくれ>

そして電話は切れた。

「……何なのかな？」

スバルは疑問に思ったが、特にこれと言って思い当たることもなかった。

あまり深くは考えなかった。

ピリリリリリリ！

電話が切れてからまだ数分もしないうちに、今度はメールが来た。

差出人は暁 シドウ、題名は……「ミソラが危ない！」

「……！」

その題名にスバルは慌ててメールを開いて本文を読む。

<さっき、ミソラが電波変換したことが>

トランスコードが送信されてわかったんだけどな、どうやら近くに  
テンカイの電波体が

いたようだ。しかも、今ミソラと連絡が取れない。

俺も向かうから、今すぐドリームアイランドの廃墟へむかってくれ  
！>

真つ青になったスバルはメールを読み終わるとすぐにウェーブステ  
ーションへとダッシュする。

「ミソラちゃん……無事でいて……」

電波変換してウェーブロードに上がるとロックマンは  
コスモウェーブを使ってドリームアイランドへと急いだ。

メールに書かれた場所に着くとロックマンはあたりを探す。

電波変換を解いていないのはウェーブロードや下にいるデンパ君達  
が何か知っているかと

思ったからだ。しかし、話を聞こうにも彼らの姿はどこにもない。

「……………あれ？」

違和感を覚えながらもロックマンはウェーブロードからあたりを探  
した。

その時……………

「……………うわっ！」

ロックマンが驚いた声をあげる。  
それもそのはず。

前のほうから突然何かが飛んできて

『ウイルスか!?!』

なんとか飛んできたものをよけたものの、驚きの色を隠せないロックマン。

だが、

「ちえっ。はずしちゃった」

という声に反応して思わず声がした方を見た。

「ミソラちゃん!?!」

「いや、声からして違うわよ。……バーカ」

そこにいたのは電波人間の女の子。

だが、不思議なものを見るようであったロックマンの目は

「せっかく、あのバカな響ミソラと同じようにポコポコにしようと思っただのに」

せせら笑う女の子の言葉で怒りの色に変わった。

「ミソラちゃんはどこだ!」

「さあ?……それより、あなたロックマンよね?」

女の子がそう言った途端、急にロックマンは地面にうつぶせに倒れ

た。

まるで、見えない手に上から押し付けられるような感触を受けて……。

「うあっ……」

「まあ、何があったのかは……この状況じゃ言うまでもないでしょ」

ロックマンは必死に立ち上がろうともがくが、何が自分を抑えつけているのか  
わからなかった……。

「くっそ……」

同時刻、シドゥは電波変換してアシッド・エースとなり、  
ロックマンのもとへむかおうとしていたのだが……

ビシッ！

「ぐあっ！」

さっきからこの連続なのだ。

どこからなのか見えない攻撃に翻弄され、アシッド・エースは今いる場所から

先へ進めないでいた。

「アシッド、サテラサーチングで敵の位置が分からないか？」

『やっています、でも……』

アシッドは悔しそうな声で言う。

『同じような反応がいたるところにあるんです。

つまり……大量の何かに囲まれていて、』

「そいつらが四方八方から攻撃してくる、ってことか……!!」

アシッド・エースは応戦しようとするのだが

「見えない敵か……厄介だな」

何度見渡しても周りには何もいない……何も見えない。

## 第62話 見えない恐怖（後書き）

……ここしばらく、更新が遅くて申し訳ありません。  
二つの連載というだけではなく、最近パソコンに触れる時間が  
がくと減ったのです。

一応話の原稿は手書きで書いてはいるのですが……  
やはりパソコンに入力しないと意味がないわけで。

そして、今自分はこの小説に何が足りないか悩んでいます。  
バンバン指摘してもらって構いません。  
皆様の言葉をお待ちしています。



### 第63話 解せない目的

姿の見えない相手に苦戦していたアシッド・エース。いたるところから来るムチのような攻撃に苦戦していたのだがしばらくすると形勢が変わってきた。

「ワイドウェーブ！ワイドウェーブ！」

アシッドブラスターを構え、ワイドウェーブを連発するアシッド・エース。

サテラサーチングによりおおよその敵の位置をつかんで攻撃範囲の広いワイドウェーブを連発することで相手を次々に撃退するという

戦法をとったのだ。

『残り15体、11体、9体、6体……』

大勢いた敵も次々に消え、ついに残るは1体……！

「ワイドウェーブ！」

とどめだ、とワイドウェーブを放ったアシッド・エースだったがワイドウェーブはただそのまま飛んでいった。どうやら、何にもあたらなかったらしい。

「外した？いや……避けたのか？」

「ご明察の通りです、避けました」

「……！」

パチパチパチ……と拍手の音とともに、それまで何もなかったように見えたあたりで、まるで空間から浮き出るように一人の電波体がシドウの目の前に姿を見せた。

「大変、お見事です。私の放ったコマツカイ達をすべて一人で片付けるとは……。」

一応、50体は用意しておいたのですがね」

拍手する電波人間は燕尾服を着たような外見をしているが右目にかけて片眼鏡モノクルからレンズが突起のように飛び出しており、燕尾にあたる二つの服の先はやや下向きにカーブしていた。しかし、アシッド・エースを驚かせたのは……姿よりも、その声。

「その声は……筑紫さん!？」

アシッド・エースの言葉に相手はさらに嬉しそうな笑い声と共に手をたたいた。

「すばらしい!!」

覚えていただいて光栄ですよ!まさかわかるとは思っておりませんでした。

もつとも……」

そこで筑紫は優雅に微笑を浮かべた。

「今の私は……メレ・クリアーで通しておりますがね!」

言うやいなやメレ・クリアーが右手を振ると

「ぐはっ！」

アシッド・エースの体にまたもやムチで叩かれたような衝撃が走った。

しかし、今の攻撃はそれまでの比ではなく、アシッド・エースの体は吹っ飛ばされた。

「ど、どういうことだ……？」

アシッド・エースが戸惑うのも無理はない。

メレ・スケルトンとアシッド・エースの間には距離があり、手を伸ばした程度で届くものではない。にもかかわらず、アシッド・エースはたたき飛ばされたのだ。

「続いてまいりますよ……ハイ！ハイ！」

アシッド・エースが休む間もなく、メレ・クリアーが手を振ると手の動きに合わせ何らかの攻撃が繰り返される。

「くっ、この……きりがいい……」

アシッド・エースは攻撃をよけようと離れると

「おおおおっ！」

アシッドブラスターを構えグラウンドウェーブやワイドウェーブ、マシーンフレイムなどで乱射した。

「む……」

むろん、自暴自棄ではない。

乱射することで相手の動揺を誘い、そのすきにロックオンソードで

……

「と、攻撃をくらう隙ができると思いましたが？」

「え？」

メレ・クリアーは動じなかった。

的確に攻撃を見て、当たらないものは無視し当たりそうなものに関しては

なんと、軽く手をあげただけで、攻撃が突然障害物にあたったかのように

防がれてしまった。

「いかがですか？」

「なるほど……逆に、あなたの秘密が見えたよ、筑紫さん」

落ち着き払った声を出してアシッド・エースは言った。

「あなた、今まで見えないムチで俺を攻撃してたよな？」

おそらく、両手に見えないムチが仕込んであるんだろう。

そして、今、ムチと同じく見えない盾を作り出して防いだんだろ！」

ピシッ！と音が出るようなほど指を突き付けてのアシッド・エースの推理。

『シドウ、こんなときにふざけるのは止めてください』

「なっ……ふ、ふざけてなんか……」

「ふざけているから頭が回っていないのではございませんか？」

メレ・クリアーのあきれたような声が見えない槍となってシドウの胸を貫く。

「むウウ……」

唸るアシッド・エースにメレ・クリアーは残念そうに言った。

「見えないムチ、その通りでございます。

そしてまた、私が見えない盾で攻撃を防いだことも。

……しかし、あなたは本質が見えておいではない」

「！」

アシッド・エースが一転、まじめな顔になる。

「……ビシッと決めてくれたらよかったのですが、実に残念です。申し訳ありませんが……ここは、ペナルティとまいりましょう」

メレ・クリアーがさっと手をあげた。

『……！…… 後ろです、シドウ！』

「な……」

ビシッ！

「ビシッと来たでしょう？」

『これは、さっき倒したはずの……』

「少々、追加させていただきました。コマツカイたるもの、頭のチップの集合一つで集まってこそです」

言い終わると、その姿が次第に透けていく。  
慌てたアシッド・エースは叫んだ！！

「な！待つんだ、筑紫さん！」

「はて、待つとはどういうことでしょうか？私は特にどこへもいきません。」

……ただ、鞭うちを再開するだけです」

どこからか見えないところから、メレ・クリアーの声がした。  
その言葉から、アシッド・エースは再び考え始めた。

「そつだ……。彼は、なぜ戦っている？なぜ、わざわざ手の内を明かすようなことをしたと思えばまたコマツカイなんか使ってきたんだ？」

『コマツカイが何かはわかりませんが……おそらく、彼と同じような電波を放って攻撃するしかできない、攪乱手段程度のウィルスのようなものでしょうね』

「ますますわからないな……俺を本気で倒すようにも思えない」

メレ・クリアーは何も答えない。

アシッド・エースは彼の真意がまったくつかめなかった……。

### 第63話 解せない目的（後書き）

……”解せない”の意味、あっているでしょうか？  
駄文ですが感想お待ちしています。

## 第64話 通じない反抗（前書き）

こんにちは

かなり期間が空いてしまい、申し訳ありません

これまでの経緯を忘れてしまった人も多いかと思しますので  
少しあらすじを……

くあらすじく

「ミソラが危ない」とシドウから連絡を受けたスバルは

一人ミソラが電波変換したと思われる場所へ向かう。

そこでスバルは一人の電波人間の少女と出会う。

ミソラをせせら笑う彼女にスバルは怒りを覚えるが、

彼女こそ、ハープ・ノートを毘におびき寄せた”王国”の一員、西  
園寺ユリだった……



## 第64話 通じない反抗

何度やっても、同じ事。

アシッド・エースとメレ・クリアーが戦っていた時のこと。  
ミソラのことと暴言を吐いた謎の女の子に戦いを挑んだのだが。

あれからロックマンは女の子……すなわち、西園寺ユリに何度も攻撃しようとしたのだが自分が近付けば自分がつぶされ、離れた場所から攻撃すればガレキで放った攻撃ごと押し返された。このことから、想像ができるだろうか。

ロックマンが距離を変え手段を変え何度も攻撃するがユリは一步も動いてないことに……！！

「くっ……そおおお！！」

声をあげ、再びユリに向かって走り出すロックマンだったが、ユリはただ手を動かしただけでその足を止めさせた。

「ぐっ……」

「まだわかんないかなー。君の戦い方がどうであれ私には通用しない。むしろ、近づいた方が受けるダメージが大きくなるってことに

まだ気がつかない？」

彼女は今、廃墟にあった崩れかかった柱の上に座っている。そして馬鹿にした顔でユリはロックマンを見下ろしていた。ユリは座ったまま手をあげるとその手をロックマンに向けた。

「そろそろ、終わらせよっか……」

その手の前で、なにやら黒いものが集まって魔法陣のようになっていき

「なっ！」

ロックマンの体はどんどんその陣に引き寄せられていた。

「ねーねー。実はあなた達のこと、あらかじめ調べてもらってたんだけどさー。」

どうして、あなたは今まで強かったんだと思う？」

何とかして引き寄せられるのを踏ん張ろうとしているロックマンに突然ユリはそんな問いかけをした。

いきなりの質問に「え？」という表情になるロックマン。

「僕の強さ……？それは、みんなの力が、キズナの力が……」  
「違うね」

今までロックマンが信じて戦ってきたキズナの力。それを、ユリはきっぱりと否定し、切り捨てた。

「君が今まで強かったのは……そのキズナの力も多少はあるかもね。でも、それはあなたの強さの根本的理由ではないんじゃない？」

ユリは静かな、しかしうつすらとした笑みを浮かべて語る。

「今までの君の力は……スターフォースやらオーパーツやらノイズやら

そういった特殊な力を手に入れ、操っていたからにすぎないんじゃない

ないの？

今もエースプログラムは持っているみたいだけど、今となってはあまり意味がないよね？」

確かにユリの言う通り、メテオGが砕け散った今、ノイズチェンジもファイならいずもできない。

ただのノイズ対策程度の役割しか果たしていなかった。

「つまり、今の君は普通の電波人間。これといった強さは、ない」  
『テムエー！さつきからゴチャゴチャぬかしやがって！

オレ達は強いに決まってるんだろ！今この場でお前を殴ってやる！』

ウォーロックはいきり立って怒鳴った。

だが、一方でロックマンはどんどん青くなってしまった。

「ほお………」

ウォーロックの言葉でユリの目がどんどん鋭くなっていったからだ。

「………だったら、やってみなさいよ！押し付ける<sup>プレスショック</sup>負荷……！」

「うわぁっ……！」

踏ん張っていたロックマンの足元が大きくへこみ、その反動でロックマンはバランスを崩してしまう。

「これは………もしかして、重力!?!？」

突如足元がへこんでいたのを見て、ロックマンの脳裏に浮かんだのは少し前、突如体が重くなって上から押し付けられる感触を受けた、あの時のことだった。

「ブラックホール全てを飲み込む間!!」

ユリの手の魔法陣が黒く光ると、バランスを崩したロックマンはもはやこらえきれず闇のようになったユリの手元へと体が引つ張られた。

(違う、これは重力じゃない。むしろ……)

ロックマンが何かに気付いた顔をする。それを見てユリも秘密を明かした。

「そう、あらゆるものを引き寄せる“引力”。

これが、魔王の力。カルム・アトラクションの能力、引力操作!!」  
ロックマンは引き寄せられてカルム・アトラクションのいる柱の上まで浮かぶと、

カルム・アトラクションに首をつかまれた。

「重力もいい線いつてるんだけどね!」。

重力っていうのはこの地球の引力のことなんだから」

首をつかまれていたロックマンは左手を目の前にいるカルム・アトラクションにむける。

それと同時に、カルム・アトラクションはロックマンをつかんでいた手を離して

もう片方の手をあげた。

「ロックバスター!」

「アースアトラクション大地の戯れ!!」

カルム・アトラクションがいきなり手を離れた上に突如引力で下に引っ張られて、

ロックマンが放ったロックバスターは外れてしまう。

だが、下に引き寄せられるロックマンは横目で見てしまった。

下からの大地が、ウェーブロードがとげのように変化して自分の方へその切っ先を

向けていたことを……。

「お別れかな？ロックマン」

カルム・アトラクションは無邪気な声とともに残酷な笑顔をその顔に浮かべた。

## 第64話 通じない反抗（後書き）

すしカルム・アトラクションの能力について補足をおきます。  
「電波人間を引力で引っ張ることができるのか？」と思った方もいるかもしれませんが、厳密には彼女は磁場を操作しています。磁場を操作することで発生した引力でガレキを操ったり、電波人間に押し付ける、引き寄せるといった影響を与えたりウェーブロードの形を変化したりできるというわけです。

## 第65話 許せない暴挙

「うわああ〜！」

『スバル、何とかしてよける！』

落ちていくロックマンにウォーロックが檄を飛ばす。

ロックマンはとっさに

「バトルカード！フウジンラケット！」

風を起こすことによって少しでも自分の位置をずらして落下地点を変える。

そのおかげで、ギリギリではあったが棘を避けることが出来た。

もともと、腕にかすったが……全身を串刺しにされるよりはよっぽどマシだ。

『くそ、まずったな……』

「うん、油断したよ……」

肩で息をするロックマン。

腕から血が流れているようだったが、気にはしてはられない。

一方、それを見てカルム・アトラクションは悔しそうに歯ぎしりをした。

「アースアトラクション大地の戯れを避けた……。この……！！！」

カルム・アトラクションは手をあげると引力を使って

……なんと、空気をも武器に変えた。

「だったらこれを避けてみなさいよ！エアガトリング 荒れ狂う大気！！」

確かに引力を使ってはいるのだが、引き寄せるのではなく逆に大気を相手の方に

まるで機関銃の弾丸のように放つ。それが“荒れ狂う大気”だ。

ズダダダダダダ！！

ロックマンめがけ、空気の弾丸が嵐のように降り注ぐ。

「ちょ……くつ！」

その攻撃をロックマンはもろに受けてしまう。

何せ空気。猛スピードで飛んでくると電波体であるにもかかわらずその体をえぐる

この弾丸はその目で見る事が出来ないのだ。

プレスショット  
「押しつける負荷！！」

「ぐあつ！」

『スバル！』

よろめいたところをすかさず狙って追い詰めようとするカルム・アトラクション。

手をロックマンの方に向けると足に重力をかけることでロックマンをその場に足止めしたのだ。

「これでとどめよ……荒れ狂う大気！」

ヒュンヒュンヒュンヒュン！！



空を切るその音に思わず目をつぶる。

「くっ……!!」

……キーン!!

「え?」

「どづいうこと!?!」

だが、その攻撃がロックマンに届くことはなかった。

「あつぶねえ……」

「だ、誰よあなた!こんな時に……!!」

突如現れた人物にカルム・アトラクションが初めて動揺した声をあげた。

「こんな時、だから俺は来たんだけどな」

ロックマンの前に立つその電波人間が笑って言う。  
黒いマントに大きな鎌が特徴的なその電波人間は……

「兄さん!!」

スバルが嬉しそうな声をあげると、セイヤが電波変換した電波人間……デステイル・ボーンもニヤツとする。

「よ、スバル」

“死神”デステイルか……最悪」

吐き捨てるように言ったカルム・アトラクションは薙ぎ払うように手を振った。

「荒れ狂う大気!!」

カブリッチョ  
「狂想曲!!」

カルム・アトラクションが放った無数の空気の弾丸に対しデステイル・ボーンも数には数とばかりに鎌を軽々と振りまわしてたくさんの斬撃を放った。

ガキーン!ドゴオン!

鎌から飛んで行った斬撃は次々に空気の弾丸を相殺していった。その勢いは尽きることがなく、ついには逆に攻撃にまで転換し始める。

「ぐ、うあああああああつー!!」

カルム・アトラクションは叫び声をあげる。  
それは痛みにはない、自らの技が破られ、突如圧倒され始めた怒りからだ……。

「じゃあ……これならどうよッ!!」

近くにあったガレキが浮かび上がり、カルム・アトラクションの手の動きに合わせて移動する。

「!!」

「ミソラちゃん!？」

ガレキが浮かんで行った先……そこには、ボロボロになったミソラが廃墟の一部に後ろ手で縛られ、拘束されていた。

ぐったりとして動かないミソラの横にカルム・アトラクションは移動すると

ガレキの矛先をミソラへと向けた。

「ここで私が指を鳴らせば、即座にこいつの身はズタズタになる。

この人質を使うのは最後の手段だったんだけど……やっぱり、あらかじめ用意しておいてよかったわ」

ロックマンとデスティル・ボーンは絶句する。

下手に動けば、ミソラの命は……ない。

「それじゃあ……ウィルスパニック 阻害の宴!」

「!?!」

カルム・アトラクションがデスティル・ボーンに手を向けると彼の周りが引力で引き寄せられた大量のウイルスで埋め尽くされた。

「これでまた1対1よ……。もつとも、今は人質がいるけど、ね」  
「くそ、卑怯だ……」

勝ち誇るカルム・アトラクションにスバルは歯を食いしばる。

「さて、これからどうしてあげようかな……？」

そう言っただけ品定めするような視線を向ける。

まさに今、流れはカルム・アトラクションの手に戻った

……かに見えた。

「あーあ……」

ウイルスに囲まれた中、デスティル・ボーンが呟く。

「こんなことしちゃって……。怒らせちゃったみたいだな、どっちら」

瞬間、その空気が震えた。

**第65話 許せない暴挙（後書き）**

次回、ついに……あの人物が登場です。

## 第66話 恐れない鬼神

「!?!?」

突如感じた得体の知れないプレッシャーに背筋を凍らせると、

「誰ッ!」

カルム・アトラクションはとっさにプレッシャーを感じた方向にガレキを放った。

しかし、飛んでいったガレキは急に勢いを失ってその場へ落下してしまう。

「そんな……」

目を見開き、予期しない状態に愕然とするカルム・アトラクション。そんな彼女の方へ、ゆっくりと一人の人物があるいてきた。

「あ……あなたは……!」

現れた一人の青年。

その顔にスバルは見覚えがあった。

流れるような銀髪を持つ彼はかつてミソラと墓参りに行った時、ミソラの母の墓の前にいた青年だった。

しかし、その顔には依然見せた朗らかさが無い。

「……セイヤ」

ここに来て初めて青年が口を開く。

静寂の中、青年は静かな、しかしはつきりした声でセイヤに声をかけた。

「そんな雑魚ウイルス、いつまでも放っておくなよ。さっさと片付けなよ」

「はい」

前と雰囲気と違う青年に対し、いつもと変わらぬ雰囲気をもとつてステイル・ボーンは  
だらんと下げていた腕を曲げ鎌を持ちなおした。

「それではご鑑賞ください、<sup>ワルッ</sup>円舞曲」

自分を中心にして、鎌が円を描く。

舞うように回転するデステイル・ボーンの姿とは対照的に  
円の軌道上にいたウイルスたちは一瞬でその身を引き裂かれた。  
しかも、その際放たれた斬撃はさらに他のウイルスをも斬り裂いていく。

ウイルスが一瞬でデリートされた光景をカルム・アトラクション、  
そしてロッキマンも  
啞然とした表情で見つめていた。

「……さて」

静寂を破ったのは銀髪の青年。

その視線の先にはカルム・アトラクションがいる。

「オルグ」

『はいよ』



オペレーターの声にこたえ姿を現したのは鬼のような姿をした電波体。

朱色の電波の体で頭には2本の金色の角が光り、腕にはやはり金色の腕輪が。

そして腰の部分には黄色と黒の縞模様のアーマーがあった。

「いくぞ……電波変換！」

キーン！

一瞬の光が青年を包んだ後、電波人間となった青年の姿があらわになる。

頭には金色の2本の角があるのに加えさらに額から3本目の、銀の角が伸びている。

その他は腕輪といい腰といいオルグの姿がそのまま実体したかのような姿だった。

もともと、その姿は筋骨隆々でたくましい。

まさに、鬼。

そしてその目は怒りに燃えていた。

（あれは“鬼神”オルグ・アンガー……。なんでこんなところに！でも、仕方がない……）

「だあああつ！」

心の中で湧き上がる不安をおさえ、カルム・アトラクションは叫びと共に

ガレキを放つ。

「……無駄なことを」

しかし……そのガレキはオルグ・アンガーまで届くことはなく、オルグ・アンガーまであと数メートルというところでその場に落ちる。

「くうううう……」

「わかるか？力の差、というやつが」

侮蔑的に煽るオルグ・アンガーだったが

それに対しカルム・アトラクションは何も言わず両手を合わせた。

「な、何……？」

「あいつの手……磁場がものすごい勢いで変化しているな」

ロックマンが不安そうな声を出すのも当然だ。

カルム・アトラクションが手を合わせたことで、ウェーブロードのいたるところが

揺らぎ始め、一部は消えそうになっているのだから。

それでもなお冷静な表情のオルグ・アンガーにカルム・アトラクションはニヤリとした

笑みを見せた。

「右手に斥力、左手に引力。

今、私の手には右手から左手への高密度の磁場の流れのベクトルができています。

そして今から、このベクトルを保っている左手の引力を解除する。

さあ、行き場をなくしたこの一方通行のエネルギーはどうなるかしらね？」

最後の勝負を仕掛けようと、カルム・アトラクションは自身もつ中で

最大の技を放った。

「ストレートフラッシュ一方通行の激情!!」

叫びと共にカルム・アトラクションが右手を振りおろすと行き場をなくしたエネルギーが

「え？」

そのあまりの大きさとオルグ・アンガーだけではなく、ロックマン、デスティル・ボーンの両方をも呑みこもつと襲い掛かってくる……!

「アハハハハハハハハハハ!!」

この技で、みんな消えちゃえ!!」

高笑いする魔王、カルム・アトラクション。

「まあ……確かにすごい技だね?でも……」

デスティル・ボーンはちらりと鬼の方を見る。

「うちのリーダーに、こんなものは通じない」

オルグ・アンガーは、まっすぐな視線で一方通行の激情が自らの方向に向かってくるのを見ていた。

## 第66話 恐れない鬼神（後書き）

出てきましたね、鬼神オルグ。

この話ではまだオペレーターは「青年」としか書いていませんが、実は彼の名前は既に何度か出てきています。

## 第67話 勝てない相手

「そんな……」

「……………」

カルムの放った一方通行の激情はすさまじい威力だった。  
ストレートフラッシュ  
にもかかわらず、オルグ・アンガーには傷一つない。  
それはロックマン達も同じだった。

「ありえない……そんな、そんなバカなッ……………」

だが、カルム・アトラクシオンにとっては屈辱的であると同時に信じられないことだった。

「私の攻撃が……………消えた？」

呆然とするカルム・アトラクシオン。

その向こうで、ウイルスをすべて切り裂いたデスティル・ボーンがぽつりと呟く。

「“鬼迫”」。

オルグ・アンガーの能力の一つにしてもつとも強力な能力の一つだ。鬼迫は一定範囲内にいる電波人間のあらゆる能力を無効化しちまう。ま、早い話、技をすべてかき消してしまうむちゃくちゃな能力さ」  
「……………」

オルグ・アンガーは何も言わなかったが、その沈黙が逆に圧倒的な迫力を醸し出している。

「俺の終曲も、通用しないだろうな……」

自らの最強の技までも通じないと呟く。  
それほどまでに、鬼迫の強大さを理解しているのだ。

「だ、だから、どうだっていうのよ……」

追い詰められたカルム・アトラクションが、やっと絞り出した言葉  
がそれだった。

シヨックから立ち直ったカルム・アトラクションは  
意識を失っているミソラの方を向く。

「だったら、またコイツを……」

「人質にする気か？」

「!?!」

とうとう、オルグ・アンガーが口を開いた。

カルム・アトラクションのもとへ一歩一歩足をすすめるオルグ・ア  
ンガーからは  
なんとも言えない殺気がにじみ出ており、その目は怒りに燃えてい  
た。

「な、何よお……」

カルム・アトラクションの声は最初こそ勢いがあったものの  
オルグ・アンガーを見た途端彼女の声は小さくなっていった。

……無理もない、オルグ・アンガーの右腕は倍以上に膨れ上がって  
いたのだから。

「な、何よその腕……」

オルグ・アンガーが一步、また一步と歩くたびに腕は大きくなっていく。

「俺の右手は怒りの感情に比例して巨大化していく。」

今の俺の心情がどれほどのものかは……見れば、わかるよな?」

少し口元をゆがめるが、それは笑みと言うよりも嘲りに近い。

カルム・アトラクションは、そんなように感じた。

「ニツクって確か、一人称“僕”だったよな?

“僕”が“俺”に変わっているって、

そりゃ一人称が変わった時点で相当キレてるだろ……」

デステイル・ボーンの眩きも背筋を凍らせるのに十分な材料だ。

「く……う……」

カルム・アトラクションはプレッシャーに押され動けない。

その隙にと、ロックマンは電波変換を解くとミソラのもとへ駆け寄った。

「ミソラちゃん……今、助けるから……!」

「し、しまった!」

「よそ見をする暇があるのか?ならば攻撃させてもらおう」

ブン

「ヒッ!?!」

巨大な右腕によるパンチをカルム・アトラクションは何とかぎりぎりでよける。

だが恐ろしいのだろう、その顔に恐怖の色がよぎる。

「今行くから……」

実は足がふらふらで、少し歩きたびに手をつくスバル。にもかかわらず、ミソラの方へ何度も立ち上がって歩く少年の様子をオルグ・アンガーは横目で見ていた。

「……フフ」

その口元が、初めて優しく笑う。

しかし、カルム・アトラクションに向き直ったとたんその笑顔はすうっと消えてしまった。

そしてカルム・アトラクションにむけゆっくりと質問を始めた。

「ミソラをだましてここにおびき寄せたのは、お前か？」

「そ……そうだよ……」

鬼迫によって攻撃が一切効かない以上、カルム・アトラクションにできることない。

彼女の顔色はどんどん青ざめていくばかりだ。

「ミソラをあなたにまで痛めつけたのは、お前か？」

「そう、よ……」

オルグ・アンガーの腕がぶるぶると震えていることにデスティル・ポーンだけが





それほどまでに、オルグ・アンガーの強さは圧倒的だった。

第67話 勝てない相手（後書き）

相変わらず、遅くてすみません。

次回で一応、カルム戦は終わりです。

このあ地は、少し設定にかかわる話があったから、次へ進みます。

## 第68話 問答

その後。

カルム・アトラクションは電波変換が解け、ただの女の子であるユリの姿に戻った。

そしてユリは、突然現れたメレ・クリアーによって連れて行かれた。

「……やはり、敗れてしまいましたか。

しかし、まさか神議会トップが出てくるとは思いませんでしたよ…

…」

メレ・クリアー、もとい筑紫は電波変換を解くと  
気絶したユリを抱きかかえる。

「ねえ」

そこへ、ニックが背を向けた筑紫に声をかけた。

「ここに来る途中、連絡を受けたんですが……あなたがメレ・クリアーですね？」

「だとしたら、何か？」

背を向けたまま、筑紫は淡々と答える。

「アシッド・エースと互角の戦いをしていたらしいけど……そうじ

やないですよね？

あそこでわざわざ、アシッド・エースに合……わせて戦ったのはなぜですか？」

「お嬢様に命じられていたのです。アシッド・エースの足止めをしておけと」

そこで筑紫は眠るユリの顔を悲しそうに見る。

「もつとも、私個人としてはあまりお嬢様には危ないことをしてほしくなかったのですが」

「……なら、止めるべきだった」

「私はあくまでお嬢様に仕える者です。お嬢様が行くところ、ついに行くだけです」

その言葉は、使用人としてのプライドを持つ者にしか出せない重みがあった。

それを悟ったニックは閉口する。

「あなたほどの方なら、そんなこと言わずともわかるでしょう。

異常とも呼ばれた天才、ニコ……」

「おっと、あまり本名はみだりに言わないでくれ」

「これは失礼」

では、私はこれだと頭を下げ、筑紫は今度こそこの場を後にしようとする。

「あなたが使用人として立派なのは認めます。

ですが……あなたはそれだけの器ではないでしょうに」

残念そうなニックの口調。

「……人はみかけによらない、と申しますよ？  
あなたの目にそう見えても、実際私は取るに足らない程度なのですよ」

そう言い残して、今度こそ筑紫は去っていった。

「……行っちまった」

セイヤはその後ろ姿を見送りながら、ニツクに言った。

「スバル達の方、先に行つといてくれないか？……ちょっと野暮用ができたみたいだ」

「わかった」

むろん、ニツクもすでに気づいている。

しかし、ここは任せようと思ったニツクは何かを聞くこともなく頼まれたとおり

スバル達の元へと向かった。

「じゃ、そろそろ降りてこいよ」

「ああ、やっぱりばれてたか」

セイヤの横に、一人の電波人間が上から下りてきた。

どうやら女の子のようだ。薄い水色のベールが顔の周りを覆っており、やはり水色の、ゆったりとしたローブを着ているような姿をし

ている。

そして、その右手には瓶のようなものを持っていた。

「あんだ、誰だ？」

「私は、アクエリアス・ウォーター。そしてウィザードの……」  
『水瓶座のFM星人、アクエリアスなの。よろしくなの』

アクエリアス・ウォーターの横に、ガラスのような体に水色の電波が詰まった

1体の電波体が現れる。

「別にあなたと争う気はないわ。強そうだし。

私はあくまで脇役。出番が来るまで、ステージ袖で見ているだけよ」  
「だから、さっきの戦いでも見ていただけだったのか？」

セイヤは、カルム・アトラクシオンと戦っていた時すでにアクエリアス・ウォーターがウェーブロードに腰掛けていて、観戦していたのを知っていたのだ。

「うん。でも、私はあなた達の敵ではない。それだけは覚えていて……今日は、そんなところかな」

それだけ言って、アクエリアス・ウォーターは姿を消した。

「あ、おい！……ったく、誰だよあいつ……」

セイヤの問いに答える者は誰もいなかった。

「さつきは、どうも……」

「気にしないでくれ。私は私のすべきことをしただけだ」

スバルの礼に軽く手をあげて答えると、

「う、ううん……」

その声でか、ミソラが目を覚ました。

「おっと……まだ休んでおいてくれ」

立ち上がるうとしたミソラをニックが止める。

実際、ミソラはユリに痛めつけられて見た目よりもけがはひどいのだ。

ミソラは、立ち上がるうとした時の激痛に顔をしかめ、ニックの言葉におとなしく従う。

「さて。とりあえず、ミソラは私が病院に運びます。

星河スバルはセイヤが向こうにいると思いますから、彼と一緒に帰るといいですよ」

「ぼ、僕もミソラちゃんと……」

「駄目です」

スバルの言葉を、ニックははっきりと拒否した。

「どうしてですか！」

「……それは自分で考えなさい。今ここで、私が言うことではないからです」



ニックがスバルと一緒に来させない理由。  
それはミソラのためだった。

ミソラはユリのメールに騙され、スバルを守るつもりだったのに、  
逆に守られる結果となった。

(私のせいで、またスバル君を傷つけてしまった……)

ミソラは目を覚ましてから、そのことが頭を離れない。

そして、ミソラが苦しんでいることにニックは気づいていたのだ。  
だからこそ、スバルを来させない。

まずはミソラを落ちつけようとニックは考えた。

「よっこいっしょっつと……」

ミソラをおんぶすると、

「では。また近いうちに会うことになるでしょう」

「それって……?」

スバルの問いには答えず、ニックは歩いて行った。

「一つ、聞いてもいいですか?」

「なんででしょう」

おんぶしながら、されながら二人は話す。

「……私と、前にあったことがありますか？」

「そうですね、確かに、この前墓場で……」

ミソラは首をぶんぶんと横に振る。

「違います違います……！それよりも前に、もっと前に……」。

それに、墓場といえば、どうしてあなたは私のお母さんのお墓の前にいたんですか……？」

「……」

ニツクは何も言わない。

「やっぱり、前にどこかで……」

「さあ、どうだろう？」

背中揺られるミソラの質問は、あいまいな笑みと共にはぐらかされた。

## 第68話 問答（後書き）

お久しぶりです。

長い間お待たせして、本当にすみませんでした……。

これで、「揺」は終わりです。

さて、実をいいますと次の章、「心」は  
7割くらいは出来上がっています。

しかし、なにぶん今は更新がろくにできない……というか、そもそもパソコンがめったに使えないのです。

なので、紙に話の続きを書いているのですが……。

そういうわけで、これから更新はすさまじくのろいですが、  
本当に申し訳ありませんが、なにとぞご了承ください。

## 第69話 壁越しの二組

カルム・アトラクションとの戦いが終わったその日。

シドウと道野は、二人で食事に来ていた。

「最近大変らしいですね」

「まあな。入院して襲われたし、今日だって戦いに勝てなかった。うまくいかないもんだなあ」

ハア、とため息をつくシドウに道野は少しでも気を落とさせないよう話題を変えた。

「そういえば、クインティアさんとはどうですか？」

「ああ、ティアは入院してた時も見舞いに来てくれたし、今でもたまに一緒に飯食うよ。」

そう言うお前はどうかだよ？……まだ、イヴのこと引きずってるのか？」

「……」

かつての恋人の名前が出て黙りこくった道野を見て、やっぱり冷や汗をかくシドウ。

今度は、シドウがフォローする番だった。

「あ、いや……スマン」

「いえ、いいんですよ。……そうですねえ、いまだあの人以上の女性とは会えていませんね。幸か不幸かはわかりませんが」

そこでコップの飲み物を飲み干すと、道野はぽつりと呟く。

「そう言えば、タイガもあの事故で」

「わかってる、だからあいつのことは言わないでくれ……頼む」

鮫崎 タイガ。かつての、シドウの親友。

そして今は、敵同士の関係。

だからこそ、シドウはこれ以上彼のことについて聞きたくなかった。聞けば、思い出してしまうのだ。

タイガが自分の胸ぐらをつかんだあの日、胸をえぐられるような思いをしたことを。

「……………」

「……………」

いつの間にか、二人の空気はすっかり重たくなってしまっていた。

「……………空気、重っ」

「全くだ……………」

一方、セイヤ、サラ、ニックは同時にため息をついていた。

シドウ達は気づいていなかったが、実は、セイヤ達も同じ店に来ていて

おまけに席は壁を挟んだすぐそばだった。

店の構造上、戸は全然違うところにあるので鉢合わせすることは無かったが

会話は完全に壁の向こうへと聞こえていたのだ。

「あの二人、食事に来てまであんな暗い話しなくてもいいでしょうに」

「仕方ないでしょう、お互いがお互いをカバーしようとして見事に話題間違えたんですから」

ニックの言葉には容赦がない。

そこで、ニックはそういえばとメモを取り出した。

「ミソラはここに入院させています。セイヤ、良ければ星河 スバル達と

お見舞いに行つてあげてください」

「いいけど……果たして、あの子がスバル達に会いたがるかどうか

……？」

「それもそうなんですよね……」

スバルのことだ、知らせたら絶対にミソラのところへ行くだろう。

しかし、すぐに行つたところでミソラが会いたがらないのもまた事実。

「貸して」

「あ、おい」

見かねたサラはセイヤの手からメモを奪い取つた。

そしてそのまま自分のポケットへとしまう。

「これは私がどうにかするわ。あんまり詳しい話は知らないけど、セイヤに任せたら」

最悪のタイミングで行かせそうだから」

「失礼な……」

不満げなセイヤに微笑むと、サラはハンターを取り出していじり始めた。

マリアに頼み、メールの作成画面を出す。

「メール？誰に？」

「先輩の奏　麗音とクラスメイトの白金　ルナ」

「はあっ!？」

セイヤの意外そうな顔に対して、ニツクはそれがいいですねと首肯。サラはメールにミソラの入院先とセイヤ達から聞いた事情を簡単にまとめて

二人に送信した。

「私達より、あの二人の方がミソラのことをよくわかってるでしょ。だから、あの二人の判断に任せるわ」

「ふうん……」

「しかし、なぜその二人のメールアドレスを知っているのですか？セイヤならまだ奏　麗音のアドレスは知ってるでしょうが」

それもそうだな、と二人から説明を求められ、サラは何でもないとでも言うように肩をすくめて見せた。

「ほら、前にルナとかミソラとかとおせち作るうとしたことがあったでしょ？」

「ああ、なんだかんだで料理できないお前らが無謀にも挑戦して

美影がいなけりや大惨事になってたアレか」

グーパンチ from サラトオセイヤ

「痛えっ!!」

「今はセイヤの自業自得ですね」

「ホント、デリカシーってものがあるでしょ！」

とにかく、その時にみんなでメールアドレス交換したの。これでわかった!？」

黙りこくったシドウ達と違って、こちらはえらく騒がしかった。



## 第69話 壁越しの二組（後書き）

お待たせしました、かなり久しぶりの更新です。

結局次のステップに入れませんでした。

というのも、この話を入れる必要が出てきまして……。

とにかく、更新のあまりの遅さは本当に申し訳ありません。

もうしばらく、この状態が続きますがなにとぞご容赦ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4627m/>

---

流星のロックマン ～それが僕の選んだ道だから～

2011年12月11日02時45分発行